アッシュ・レコード

道草　いのり

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

本作品は現在連載中の〈Ｉｎｆｉｎｉｔｅ　Ｄｅｎｄｒｏｇｒａｍ〉の二次創作です。

原作が連載中のため少なからず捏造設定などを含みます。

原作への迷惑がかかる場合は大幅な改稿、もしくは削除の可能性がありますがご容赦ください。

作者多忙のため、不定期更新となります。

目次

第一章　始まりと成長
孵化 …… 1
進化 …… 7
姫と魔女、あと狼 …… 13
灰と糸 …… 19
【深鉱金富　アルノーツ】 …… 24
策略と奇略 …… 31
エピローグ …… 40
閑章
キャラ紹介 …… 46
ガチャガチャ …… 50
ウィンドウショッピング …… 59
ハロウィンイベント …… 63
第二章　死の行進
竜で魔女を釣る侍 …… 77
先達者 …… 83
パレードの一幕 …… 91
レストランの二幕 …… 97
市長邸の三幕 …… 102
転職騒動の四幕 …… 107
【超銃兵】 …… 114
トレジャーハント …… 126
不穏 …… 139
【鬼将軍】 …… 146

第一章　始まりと成長

孵化

「…どうしよう」

現実世界で頭を抱える私は、その頭にヘッドギアをつけている。
手に伝わってくる感触はかなりゴツゴツしてるがそれもそのはず、私はさっきまで、世間で話題になっている〈Ｉｎｆｉｎｉｔｅ　Ｄｅｎｄｒｏｇｒａｍ〉をプレイしていたからだ

「…やめようかな」

友人に誘われてプレイしてみたはいいものの、流石に先程のはこれから続けるかどうかを迷う程度にはきつい経験だった。
でも、せっかくああも熱心に誘ってくれたのに、すぐに辞めるというのもなんだか忍びない気もする。

「とりあえず、宿題しよう」

どっちにしろ２４時間はプレイできないようなので、明日友人に相談することにして私はハードを横に置いたのだった。

????チェリー・アウルブルク

「どう、チェリー。プレイしてみた？」

ここはフランスでも由緒あるお嬢様の女子校として有名なロレーヌ女学院。

生徒の行動は厳しく制限されており、私がここに入学する時も家族（主にお母さんが）反対してた。
お父さんはどちらでもいいと言っていたけど、私が強くお願いして入学させてもらった。

とは言っても最近少し厳しすぎるんじゃないかと思うこともあって、少しフラストレーションも溜まっていた時に「いい解消法があるよ!!」と〈Ｉｎｆｉｎｉｔｅ　Ｄｅｎｄｒｏｇｒａｍ〉を勧めてくれたのが、この友人のファリナだ。

「朝からいきなりだね。それがちょっとプレイしててショックなことがあって…続けるかどうか悩んでて」
　いつもどおり相変わらず元気な友人に苦笑しながら答える。
「ええー!?勿体ないよそんなの！何があったの？チュートリアル終わった途端に上空に放り出されるやつ？確かにあれ怖いよね!?私絶叫系得意な方なのに滅茶苦茶怖かったもん！」
「あーうん、あれも怖かったんだけど、そのあとレベル上げしてたらデスペナルティになっちゃって。それがかなりショッキングな死に方だったから怖いなーって」
　ファリナは目を丸くすると確かにという風に首を縦に振る。
「あー、デンドロってリアルだもんね。私も生きながら自分の三倍はありそうな狼に捕食された時はめちゃくちゃ怖かったなあ！」
　え、なにそれ怖い
「でも、そのあと狼をボコった時はかなりスカッとしたよ。そんな風に困難を乗り越えるのもＲＰＧの醍醐味なんだと私は思うよ！」
　…私のはそういう次元じゃないような。
　いや、でも確かに一回で諦めるのもなんだか気が咎めるし、まだ打開策すら探してない。
　一度ぐらい解決策を探してみるのもいいかもしれない。
「そうだね、もうちょっと頑張ってみるよ」
「うん、その息だよ！私も陰ながら応援してるからね!!」
「ところでファリナってどの国に…」
「恥ずかしいから言わない」
　…背景、お母さん
　友人に勧められるままにやってみたゲーム。
　ただしその友人とは一緒にプレイしないというよくわからない状況で私は学校生活を送っています。

????アルター王国　【戦士】雪姫　桜
デスペナルティが明けて私は再び〈Ｉｎｆｉｎｉｔｅ　Ｄｅｎｄｒ

ｏｇｒａｍ〉にログインしていた。
さて、ここまで頑なに言おうとしなかった私がやめようかと考えた元凶にして昨日の私の死因。
それが今は目に見えない私の〈エンブリオ〉。
ＴＹＰＥ：テリトリーである【灰塵幻想　シンデレラ】。
その第一スキル、《灰を被ったお姫様》だ。
そのスキルの効果は単純明解。
『【劣化】の効果を持った灰を辺り一帯に降らせる』というのものだ。
デンドロが発売されてまだ間もないけど、すごく人気が出ているのもあってネットにも色んな情報が飛び交っていて、その中には【劣化】の状態異常に関する記載もあった。
【劣化】
対象が身に付けている装備が、時間経過でボロくなる。
それ自体は、すぐに効果を発揮するわけでも直接害を与えるものでもないが、装備の耐久値は《自動回復》持ちの装備でないと回復しないので、生産職に頼んで修理してもらう必要がある。
と書かれていた。
でも、あれはそんな生易しいものじゃなかった。
まず灰が当たったモンスターはその部位がひび割れた。
それに驚き無理やり動かそうとすると、その部位を中心にまるで灰のように崩れ、右腕と下半身が上半身から分離した。
最後には悲鳴を上げる顔からボロボロと崩れていき、そのまま光の塵となった。
正直に言ってめちゃくちゃ怖かった。
さらにそれが自分の体にも現れてると分かったとき、パニックになって身体を動かしてしまって、足が崩れ倒れた体が粉々になり、頭が半分欠けたところでデスペナルティになった。
ベットから跳ね起きた時、思わず自分の身体を確認してしまったくらいだ。
とりあえずこのままでは危なくてまともに自分の〈エンブリオ〉のスキルすら使えない。

せっかＬｖ３になっている【戦士】だけど、ここはリセットして【シンデレラ】を扱えそうな他のジョブに切り替えるのがいい気がする。
そう考えてお昼休みにネットを漁っているととあるジョブの名前が見つかった。
【礼拝者（ワーシッパー）】？」

????【戦士】雪姫　桜
「あのー、すいません。司祭系統のジョブクリスタルがあるのはここですか？」
「はいー、そうですよー。【司祭】に就かれる方ですかー？それならご一緒に入信もどうでしょー？」
協会をくぐった私の相手をしてくれたのはなんというか、修道服を着たＴｈｅシスターという感じの人だった。
入信も勧めてきているものの、あまり熱心な感じじゃなく、本当についでって感じがする。
面倒な勧誘を考えていただけに楽といえば楽なんだけど、宗教団体としてはそれでいいのかな？
「あの、【司祭】じゃなくて【礼拝者】ってジョブに就きたいんですけど」
【礼拝者】ーー司祭系統派生の下級職にしてリジェネ特化のジョブ。
他者与える回復魔法や浄化魔法、聖属性魔法をほとんど覚えない代わりに自分への回復効果に関しては破格と言っていいほどの回復力を誇るリジェネスキルが豊富なジョブらしい。
下級職の耐久職じゃ【シンデレラ】のスキルに耐えられなくて、クールタイムのある回復魔法を使う【司祭】じゃ継続ダメージを与える【シンデレラ】のダメージに間に合わないようだ。
だからこそ、継続的な回復を見込める【礼拝者】を選んだ。

「それならお布施を頂くことになりますけどー、大丈夫ですかー？」
「お布施？」
「はいー、転職条件にー協会への一万リルの上納があったはずです

がー」
「……」
所持金：一万二百リル
震える手で自身の全財産未満を渡し、【礼拝者】のジョブに就くことができた。
気の毒に思ったのか【司祭】のお姉さんが、【礼拝者】用の服をくれたのがせめてもの救いだった。
…昨日、せっかくだから〈エンブリオ〉が孵化するまで武器は買わずにいようと思っててよかった。
供給過多で初心者狩場のモンスターのドロップアイテムは値崩れしてきてるから、今はお金を稼ぎ直すのも難しいし。

????【礼拝者】雪姫　桜
気をとりなおして中級者向けの狩場にやってきた。
流石にまだ人は少ないらしく、ここならスキルの巻き込みが起こることもない。
本当ならレベル1でくるところではないんだけど、昨日の惨事を見る限りはいける気がする。
狼や熊など強そうなのが集まって来たので早速スキルを使ってみることにした。
「《灰を被ったお姫様》」
宣言とともに灰の雪が降り始め、モンスターと私の身体を侵していく。
腕を振り上げた熊は腕が落ちたことに驚愕し、駆け出そうと踏み込んだ狼は踏み込んだ足が崩れ、頭から地面に突っ込みそのまま崩れて光の塵となる。
そして私の身体も罅が入っている。
入ってはいるが、昨日とは違い少し動かすぐらいなら崩れない。
それに身体に入った罅も少ずつ治ってる気がする。
最も、直後に灰の雪が降ってきてまた罅が広がるのだが。

そして、モンスターを倒し終わったらスキルを解除し、回復魔法をかけてみる。
「《ファーストヒール》」
すると身体に入った罅がまた少し収まり、気をつければ普通に動けるようになった。
「やっっっっ!!」
思いっきり叫ぶと顔が崩れるかもしれないので叫ぶのは自重したが、目論見は確かに成功した。
【礼拝者】ーー単体回復専用ジョブにしてリジェネ特化のジョブは、しっかりと【シンデレラ】にハマっていた。
どうやら下級職の中でも転職条件がきつい部類に入るらしくかなりの回復力を誇っているらしい。
他者にかける回復魔法をほとんど覚えず、他にも聖属性攻撃や浄化魔法の効果が低い引き換えに下級職では回復力は群を抜いているそうだ。
それでも【シンデレラ】の効果を防ぎきれてないみたいだから【シンデレラ】の【劣化】は随分強力なようだけど、私にとってはとりあえず死ななくなったという方がかなり重要だ。
あと【司祭】のお姉さんがくれた【礼拝者】の服は、元々ダメージを受けながら戦うのが前提のジョブであるためか、かなり強い自動回復の効果があるようで、服が先に限界を迎えることもない。
よし、中級クラスの狩場でも問題なくモンスターは倒せるみたいだし、この調子でどんどんレベル上げていこうかな。
ーー二時間後
「…デンドロ、辞めようかな」
再びデスペナルティとなった私は昨日と同じようにハードごと頭を抱えながらそう言ったのだった。

進化

????

【礼拝者】雪姫　桜

…昨日の死因を整理してみよう。

まず、レベル上げをしてたらいつの間にか【礼拝者】のレベルが31になってた。

これはいい。

次、ずっとダメージを受けては回復という工程を繰り返していたからか《継続回復》が下級職では最大のＬｖ５になった。

ついでに回復魔法の《〇〇ヒール》系もＬｖ３になった。

これもいい。

最後…【シンデレラ】が進化した。

問題はこれだ。

第二形態に至ることで獲得したスキル。

《灰まみれの日々》

なんというか、《灰を被ったお姫様》の凝縮版みたいな感じで腕や足に触れたものに強力な【劣化】を付与するというものだ。

ただ、これもデメリットは相変わらず取り払われていなかったようで試しにモンスターに使ってみたら肘のあたりまで私の腕も一気に崩れた。

代わりにモンスターも《灰を被ったお姫様》の時のように徐々に崩れるという感じではなく、一気に身体全体が塵になったけど、問題はそれだけじゃない。

部位欠損は《継続回復》でも《サードヒール》でも治せなかったたのだ。

これはまたどうにかしないといけないな、と思いながら気を取り直して《灰を被ったお姫様》を発動させたら、進化する前より遥かに早いペースで身体が一気に崩れてデスペナルティになった。

一昨日よりはまだ抵抗できていた感はあるけど、そんなのなんの慰めにもならない。

下級職で取れるレベルキャップまで《継続回復》を上げたのに、こ

れでは全く釣り合っていない。
このままでは上級職を取っても上級に至った途端にまた振り出しに戻るという可能性があり得る。
そしてなにより一番の問題ーー服をどうするか、という問題がある。
今はまだ装備スキルの自動回復で耐えれているけど、限界を迎える時はそう遠くない気がする。
こんな〈エンブリオ〉が孵化したことによって私も自信を失ってきてるけど、私はドMでも露出狂でもない。
むしろデンドロにはいろんな服があると聞いて、学校ではなかなかできないおしゃれとかできるんじゃないかと思って楽しみにしてたくらいだ。
それがまさかの自分の〈エンブリオ〉のせいで装備できるものに大きな制限がかかってる。
ファリナに相談しようかとも思ったけど、昨日も具体的なアドバイスはもらえなかった以上、相談してもあまりいい考えが思いつくとは思えない。
ネットでも調べてみたけど、【礼拝者】以上のジョブを見つけることはできなかった。
八方塞がりになってしまったので、とりあえずログインだけして噴水の脇に腰掛けている。
なんとなしに周りの〈マスター〉の人を見ているけど、まだ初心者ばかりなので参考になりそうな人はいなさそうだ。
あ、あそこの二人手繋いで歩いてる。カップルなのかな？
でもデートの先がモンスター狩だったら風情なさそ
「背信ですかー？」
「きゃあ!!」
急に横から出てきた顔にびっくりした私は漫画みたいにひっくり返って噴水にダイブしたのだった、
「ごめんなさいー、大丈夫でしたー？」
「あはは、まあ、なんとか」

どうやら今日はおやすみだったらしく【司祭】のお姉さんーーホホンさんはちょっとお出かけをしていたらしい。
その折に私がじっとカップルの男女を見つめていたので声をかけた、と。
ちなみに今は彼女の家に来て着替えさせてもらっている。
「でもなんですか、背信って？」
「いやー、あんまりにも熱心に見つめてるものですから爆発しろとか思ってるのかなーと思いましてー。国教の教えはスキルで人々を癒しますというものですしー？」
「あ、いや、あれはちょっと考え事してただけで」
「ですからー、その場合は馴染みの呪術師ギルドを紹介しようかなーと」
「馴染み⁉」
いかにも聖職者前とした人から出たまさかの言葉である。
相変わらずぽわぽわしてるので本気で言ってるのかどうかよく分からない。
「ところでー、桜さんは恋とかしたことありますかー？」
「いきなりですね⁉えと、昔幼稚園にいたかっこいい子が初恋だったのかなー？と今では思いますけど」
「最近はー？」
「えーと、それ以降は特に」
男子が寄り付かない学校に通っているのだ。
全寮制であることも含めて出会いなどあるはずがない。
「そうですかー」
「…？」
気のせいだと思うけどどこかふわふわした感じが陰ったような…
「で、その悩みというのはー？」
「急に話が戻りましたね⁉」
ほんとに掴みどころがない…。
とは言っても服が乾くまで暇なのでダメ元で相談してみる。
「という感じなんですけど、解決策ってあります？」

「んー、そうですねぇ」
「一応、回復力を上げる装備もあることにはあるんですけど安いとあんまり効果も高くないんですよねー。効果が高いと装備制限もありますしー……あ、そういえばー」
「何かあるんですか!?」
いかにも思いついたという感じで手を打ったお姉さんに、私も食いつく。
「かなりマイナーなジョブなんですけど【信仰者(ディサイプル)】というジョブがありましてー、回復魔法を一切覚えない代わりに自身のみの回復量を劇的に高めるというジョブですー。普通は聖職者関係じゃない熱心な方が自分の信仰心を示すために就くジョブなんですけどー……これならいけるんじゃないですかー?」
信ずる者は救われる、ということだろうか?
確かに使い道といえばパーティに回復職がいるタンクが下級職で取るようなジョブかもしれない。
でも、回復魔法といっても危なくならない限りは隙を作らないために戦闘前にバフをかけて戦闘終了後に回復するという感じだ。
それなら戦闘が終わった後に全快するまで回復魔法を使い続ければいいということで、わざわざ下級職の一つを埋める必然性は低い。
ステータスも低いみたいだし、就く人が少ないのも頷ける。
でも私にとっては好都合だ。
「なるほど、ありがとうございます。それで、服は…」
「それに関してはあまりいい案は思いつきませんねー。お金稼いで高い装備買った方がいいと思いますー」
「そうですか……はい、ありがとうございます。それじゃ、早速【信仰者】に就いてきます」
こうして私は【シンデレラ】のデメリットを克服したのだった。

????【高位信仰者(ハイ・ディサイプル)】雪姫　桜
あれからしばらく経った。

【シンデレラ】も第三形態に進化し新たなスキルを覚えたことで私のビルド構築は次の段階に移っていた。
デンドロが発売されてから二ヶ月も経ったこともあり、話題は最強ビルドの模索や上級になってから覚える必殺スキルにシフトしている。
とは言っても、私は【生贄】ＭＰ特化理論をしようにもテイムモンスターやガードナーがいるわけじゃないし、ジェム貯蔵連打理論を取ろうにも魔法職ではないので、完全に蚊帳の外だ。
必殺スキルについては【シンデレラ】が上級にすら至ってない以上望むべくもない。
ジョブも下級職三つをカンストし、上級職も【高位信仰者】を取って今はレベル８６と言ったところだ。
本当は【礼拝者】系統上級職である【巡礼者】を取りたかったのだけど、まだ転職条件を満たせていないので仕方がない。
服に関しては相変わらずで最初に貰った《自動回復》つきの装備を使用している。
もっと別の装備もつけたいんだけど、《灰を被ったお姫様》に耐えれる装備がこれしかない以上どうしようもない。
買ってる装備が全て《自動回復》に特化した装備なので、私のステータスは貧弱なままだ。
【礼拝者】が満遍なくステータスが上がるジョブで、【信仰者】がほとんどステータスが上がらないジョブとはいえ、私の素のステータスは〈エンブリオ〉補正を受けた下級職のマスターの大半には劣っていると思う。
でも、それもそろそろ限界にきている。
第三形態に進化した時に、服が耐えれる時間がかなり減ったのだ。
たまに発動しすぎてところどころ服が崩れる時だってある。
狩場の争奪戦も落ち着いたようで最近は狩場を巡ってても誰かと会うことはないけど、女の子として、そしてロレーヌ女学院の生徒として、野外でこんな格好をし続けるのはいささか以上に気が咎める。
第四形態ーー上級になったら一般には犬から虎レベルでの違いが

出るらしい。
そうなる前に腕のいい【裁縫屋】か装備を見つけなければいけないけど、それもかなり難航している。
今は予備で買った【礼拝者】用の装備を着回すことでなんとか耐えてる感じだ。
問題が全て解決したわけではないが、それでも安定してレベルアップはできるようになった。
いつものように狩場を回りつつレベルアップをしている時だった。
広域に展開した【シンデレラ】で弱いモンスターを狩りつつ耐えるモンスターがいれば《灰まみれの日々》で触って消していく。
そんなことをしていた時に
「ぎゃあああああああワーン」
「きゃあああああああああ」
男の人？と女の子の悲鳴が聞こえた。
もしかしたら女の子が男に襲われているのかと思ったけどどうも男の人の方もかなり切羽詰まった声で、パーティを組んでる人達がもしやモンスターに襲われているのではないかと思い、急いで向かう。
サブジョブに【冒険家】を取っていたこともあり、すぐにたどり着いたその先には…
「お、お気に入りの魔女帽が…」
「わー待つワン、今はこれ以外に着ぐるみないワンー！」
装備が溶けて涙目になってる箒に乗った魔女っ子と、あちこちが破けて中の人が露出しかけてる筋骨隆々とした着ぐるみの男の人？がいた。

姫と魔女、あと狼

????【高位信仰者】雪姫　桜

「……」

抱えられてる魔女帽は《鑑定眼》を持たない私でも分かるほどの高価そうな一品で、それが穴だらけになっている。

あ、あれ修理に出すのは無理だろうなーと私が分かるのは、初期装備が同じく穴だらけになった時に、一応予備として修理してもらいにいったら、ここまで損壊してたら直せないと言われたからだ。

着ぐるみの方はもっとひどい。

あちこちに穴が開いて中の人が露出しかけており、毛皮と中の人の筋肉でなんだかテレビに出てくる怪人のような有様になってる。

とりあえず、モンスターに襲われてたんじゃなかったようで、良かった良かったと思いその場を離れようとすると

「あなた、ちょっと待ちなさい」

いきなり身体の自由が奪われて空中に浮かせられ、魔女っ子の人の前まで連れてこられた。

魔女っ子魔女っ子と連呼していたがどうやら私よりは年上のようで、全身から不機嫌という気配が漏れ出している。

「あなたよね、今の灰の雪」

「え、えーとなんのことですか？私はただの通りすがりの〈マスター〉で、悲鳴が聞こえてきたから大丈夫かなーと思ってここまできただけで」

「《真偽判定》」

「…」

「あなたが今の灰の雪の元凶ね？」

「……はい」

観念して目をそらしながら答えると魔女さんの顔が真っ赤になる。

「どーしてくれんのよ！これ買うのにいくらしたと思ってるの！ショーウィンドウで一目ぼれしてからこつこつお金貯めて買ったのに！」

「…ごめんなさい」
事実，私の〈エンブリオ〉せいなので言い訳のしようがない。
【シンデレラ】が孵化してから狩場で人に会ったことなんてなかったし，まさかあった人一号がこんなことになるとは思ってなかった。
でも，二人とも【シンデレラ】の灰を浴びたって割には皮膚を損傷してる様子がない。
ーーもしかしてレジストされたのだろうか。
〈エンブリオ〉の研究も進んできてるし，私だってｗｉｋｉを見たりはする。
〈エンブリオ〉は何らかの制限や追加コスト，そして制御を捨てる代わりに威力を上げる。
【シンデレラ】は無制御な代わりに威力が上がるタイプだ。
それこそ，第三形態に進化してからは純竜級のボスモンスターにだって《灰を被ったお姫様》のみで圧勝している。
私が《灰まみれの日々》を使うのは，状態異常のレジストに特化したモンスターやＨＰが無駄に高くて倒すのに時間が掛かるモンスターだけだ。（それも大半は傷痍系状態異常で倒せるが）
だから装備品での対策程度じゃ【シンデレラ】の【劣化】は防げないはずだ。
どちらかの〈エンブリオ〉が状態異常の無効に特化しているのかと考えたが，偶然会った二人ともが対状態異常の〈エンブリオ〉を持ってるとは考えづらい。
ーーということは，二人ともが【シンデレラ】の状態異常をレジストできるだけの実力者。
そこまで考えて青くなり，どうにか今の所持金であの魔女帽と着ぐるみを弁償できないかと考えていると
「まーまーリーナ、ちょっと待つワン。えーっと俺たちは最近森や草原を荒野に還して回ってる死の灰の元凶を調べに来たんだけど」
ーー偶然じゃなかった。
「……そんなことになってたんですか」
「レベル上げに来たマスターが何人もデスペナルティになってるワ

ン。装備やられた奴も多くてかなりやばいワン」
「……」
人も少なくて穴場な狩場だと思ってたんだけどまさか無意識のうちに物理的に人を排してるとは思わなかった。
【シンデレラ】は敵味方の識別ができないため、パーティを組むという選択肢が私にはない。
《灰まみれの日々》だけを使っていれば話は別かもしれないが、そんなことをしてパーティを組むより《灰を被ったお姫様》を使いつつ《灰まみれの日々》を使った方が効率は遥かにいいのだ。
ジョブも汎用ジョブと司祭系統派生のジョブしか取っていないため、ギルドクエストのようなものも受ける必要はない。
よって、そもそもギルドに行くという選択肢自体が生まれなくなる。
それによって事態の発生に気づくのが遅れた、と。
さらに言えば森や草原は普通のゲームみたいにそのうち再生するものだと思ってた。
まさか私が荒らした狩場がそのままだったなんて
「……その、すいません」
「あー、うん。わざとじゃなかったのは今の反応でわかったけど一応俺たちと一緒にギルドの方に顔出してくれワン。〈ＵＢＭ〉かと思って調査に来てたんで〈マスター〉ってことになったら事情聴取しないわけにもいかないワン」
「……はい」
私が目を伏せて素直に頷くと、事態が好転したと見たのか魔女の人が狼さんに話しかける。
「それじゃあシュウ。あなたはログアウトしてなさい」
「なんでワン？」
「その装備、かなりボロボロよ。特典武具だからそのうち回復はするでしょうけど街中で顔が晒されてかねないわ」
確かに。
やってしまった私が言うのもなんだが、今の狼さんの格好では、モ

ンスターに間違われることはなくても、子供達に泣かれそうではある。
　というか、今この状況と魔女さんの怒りで私の方が泣きそうだ。
「それに、それじゃあもう一つの方が出てきてもあなたまともに戦闘できないでしょ。もう一つの方くらいなら私でも対処出来るから問題ないわよ」
「おっけーワン、それじゃあまた後でワン」
　そして，狼さんがログアウトしてい……あっ
　　そして、不機嫌魔女さんと私の二人だけが，森に残されることになった。

■□【上位信仰者】雪姫　桜
　沈黙が痛い。
　現在私は自然破壊の容疑者（ついでにＰＫと器物損壊もあるがこれは〈マスター〉同士のＰＫなので罪には問われないはず）として現行犯で捕らえられて事情聴取に連れていかれてるところだ。
　魔女帽を破かれた魔女の人ーーリーナさんはかなり不機嫌で，こっちの方は見もしないで空中に浮かせた本をいじっている。
　正直，かなり怖い。
　しかし私はこういう沈黙には耐えれないタイプなのだ。
　関係ない質問をしたら思いっきり睨まれそうだけど，関係ある質問だったらもしかしたら答えてくれるかもしれない。
　なにか話題はないかと考えていると、気になることがいくつかあった。
「あの…私ーーというより，謎の灰の正体を探るために来たんですよね？」
「そうよ，それがなに」
　言葉からーーというより全身からとげのようなものを出して，針で刺されている気分だがさっきの沈黙が続く方がじくじく責められているような感じがしてつらい。
「思ったより【シンデレラ】の【劣化】が通じてなかったみたいでなに

か対策でもしてたのかなーって。ひ，皮肉じゃないですよ，全然」
　言葉の途中で心なしか目力が上がった気がして必死に取り繕う私に，リーナさんはため息を一つつくと
「対策なんてしてなかったわよ」
「え，でもーー」
「本当は対状態異常に特化した魔法職がもう一人ギルドからの推薦で来てるはずだったのよ。あまりの異常事態に〈ＵＢＭ〉の可能性も考えてたからギルドが推薦した腕利き三人でね。シュウが相手が強かった時に前衛に立つ役でもう一人の魔法職が対状態異常。私が何かあった時の保険って形で。でもそいつ今日になってリアルの方で用事ができたってドタキャンしやがったのよ。結局，私が防御魔法であの灰の威力を落とすことになったけど，それも完全じゃなくてこのざまよ」
　なるほど，本来連れてくるはずだった私対策がいなかったせいで，私特化の精鋭部隊にほころびが生じたって感じなのかな。
「ちなみに，あなたにデスペナされた連中には，範囲ギリギリからそいつの必殺スキルを叩き込ませるべきだって意見が多かったわよ。そいつの〈エンブリオ〉状態異常を吸収して打ち返す必殺スキルを覚えてたから」
　アットの奴，ほんっとに許さない。というリーナさんの言葉を聞きながら私はゾッとしていた。
　対状態異常に特化したカウンターを持つ〈エンブリオ〉。
　そんなのは間違いなく私の天敵だ。
　レジストがより困難な《灰まみれの日々》ならどうなるかわからないが，私が知覚できない《灰を被ったお姫様》の効果範囲ギリギリから状態異常を吸収されて打ち返されたら私にはなすすべがない。
　まず間違いなく回復量を超えたダメージを喰らってデスペナルティになっていただろう。
　自分がまたベッドの上で膝を抱えてる姿が容易に想像できた。
　ああ，それともう一つ。
「あと、さっき言ってたもう一つの方ってなんなんですか？」

「あなたに話す義務があるのかしら？」
「……ないです、すいません」
私の撃沈した顔に何か思ったのか開いていた本を紋章に戻しながらリーナさんがこちらを向く。
「……はあ、この辺りにＰＫの目撃情報があるのよ。普通ならマスターがマスターに何をしようがティアンはなんら関与しないのだけどレベル上げができないってマスターが多くて依頼が私達のとこまで回ってきたのよ」
「へぇ、最近この辺狩場にしてたんですけど、私ＰＫになんて会ったことないですよ」
「ＰＫもあなたからは逃げてたんじゃない？」
……否定できない。
なんせ私も巻き込んでの広域殲滅攻撃が【シンデレラ】の真髄だ。
効果範囲ギリギリから撤退でもされてたらそれこそ私には気づきようがない。
ということは私はＰＫよりも強い存在ということに……
……、……？
あれ、私なんで……地面に寝てるんだろう。
そう思って足元を見るとーー
ーー膝のあたりから綺麗に切断された左足が視界に入り込んできた。

灰と糸

??◇【高位信仰者】雪姫桜

「ちょっ、あなた、大丈夫!?」

気づいたら、私の足がなくなっていた。

いや、なくなっていたというのはおかしいのかもしれない。

正確には私の足が切り離されて近くに転がっている。

なんの前触れもなく、唐突に切り離された足から血が溢れ出ていた。

「……っ、どこから」

周囲を見渡しながら警戒するリーナさんが私に回復薬をかけてくれる。

切れた瞬間から《継続回復》による回復は始まっており、【高位信仰者】のスキルによりＨＰが回復できれば部位欠損も治るのでこのまま放っておいても大丈夫だ。

《灰を被ったお姫様》での死に方の方がかなり怖いせいか、足が切り離されても随分と落ち着いていられる。

「ちょっと、大丈夫なの!?」

「はい、大丈夫です。それより気をつけてください。まだどこに仕掛けられてるか分かりません」

周囲を見渡しながら言うとリーナさんが頷いてる気配がした。

だが五分、十分待っても次の攻撃が来る気配がない。

待ってる間に足も回復してきて、そういえば足と足くっつけてた方が治りが早いかもしれないと思って切れた足のある方を見ると――

――空中に血が浮いていた。

不思議に思って手を伸ばしてみるとダメージを受けた感触があった。

ダメージがあったところを見てみると、まるで本をめくろうとしてページの端で切ったかのように指先が切れていた。

「もしかして……これ」

「どうかしたの?」

「リーナさん、私に考えがあります」

始??????

始まりは一体の〈ＵＢＭ〉と〈マスター〉の邂逅だった。

鉱物を食べ地中を掘り進むワームの一種である【グランド・ミネラル・ワーム】の〈ＵＢＭ〉である【深鉱金富　アルノーツ】。

彼は鉱物生成能力と鉱物操作能力を持ち、地面からスパイクを出すことでティアンやモンスターを襲う〈ＵＢＭ〉だった。

しかしとあるマスター。

鉱物やモンスターのドロップ品を糸や紐に変換できるマスターに目をつけたことでその生活は終わりを告げる。

初撃の奇襲を感知され、攻撃の全てを糸に変えられた彼は必死に命乞いをした。

その〈マスター〉には、彼を無視して討伐するという手もあったが、彼が逸話級だということを知り、一計を思いつく。

すなわち、その〈ＵＢＭ〉の鉱物生成能力を利用してその〈ＵＢＭ〉と自身を育てるという計画だ。

彼は初日組ではあるものの、その〈エンブリオ〉の特性上、他から遅れをとっていることを十分に認識していた。

また、データにも精通していたため、ティアンを通じてではあるが、〈ＵＢＭ〉にはランクがあり、ランクが高いほうが得れる特典武具の性能は良くなることも知っていた。

彼の〈エンブリオ〉には鉱物やモンスターのドロップアイテムを変形させる能力はあったが鉱物生成の能力はなかったため、市場価格の高い金属やモンスターの遺骸や全身骨格に手を出せなかった。

また【アルノーツ】には鉱物生成能力や鉱物強化の能力はあったが、変形は【アルノーツ】の気質からか、大雑把なものが多かったので、彼ら二人は性格的な相性はともかく、能力的な相性は良かった。

それぞれに思惑はあったものの、こうして二人は手を組むことになる。

アルノーツが生み出し、強化した鉱石を〈エンブリオ〉によって細

い糸へと変え、それを編んで作った極細のワイヤーを、〈マスター〉が【大操糸（グレイト・ストリンガー）】のスキルによって森中に張り巡らせていく。
こうして生み出された広域殺界は、〈マスター〉やモンスターをことごとく討伐しせしめた。
しかしこの作戦を決行してしばらくも経たないうちに、彼らの作戦には支障が出始める。
生物、非生物を問わず、あらゆるものに強力な【劣化】を付与する〈マスター〉が現れたことにより、作り出した殺界に穴が空くようになったのだ。
元々、耐久値が低いのが糸やワイヤーといった武器種の特徴である。
いくら〈ＵＢＭ〉の　スキルにより強化されていても限界はあり、その限界を軽くその〈マスター〉の〈エンブリオ〉は上回っていた。
おまけに、その〈マスター〉が有名になり過ぎてこの狩場に来る〈マスター〉が激減した。
自分達が有名になって実入りが減るならともかく、突如現れた新参のＰＫに獲物を掻っ攫われるのが我慢ならなかった〈マスター〉はその〈マスター〉の討伐に乗り出す。
しかし討伐しに行こうにも敵はどこにいるかも知れない灰の雪の中。
糸を作るエンブリオと糸を操るジョブでは相性が悪く、また〈ＵＢＭ〉を討伐されるような危険を冒すわけにもいかない。
結局、その〈マスター〉は放置され、虫食いのように空いた穴を埋める作業がその〈ＵＢＭ〉と〈マスター〉には必要になった。
結果、間に合わずに犬や魔女を仕留めれないという事態が発生したりしたが、それでも彼らの優位性は変わらない。
彼らは殺界の中心である安全地帯におり、灰の雪の〈マスター〉も、そんなに深いところまでは来なかったので、それらを一気に退けて辿り着くような人物はいないはずだった。
そう、いまこの時までは

????【高位信仰者】雪姫　　桜
「あと二分程度行ったら相手がいるわ。向こうから攻撃を仕掛けてくる可能性もあるから注意して」
「はい」
　金属の糸を見つけてから、私たちの動きは単純だった。
《灰を被ったお姫様》を使い、金属の糸を破壊し、不完全ではあるものの防御魔法により《灰を被ったお姫様》を防げるリーナさんが回復魔法を連続で使いながらＰＫを目指す。
　この作戦を決行するにあたって私の装備をリーナさんに貸してるので、さっきみたいなトラブルが起きることもない。
　自然破壊してるという点では、私たちの方が悪者かもしれないけど、あれが森のあちこちに仕掛けられてるようだったことと、私の知ってさえいれば明らかに危険とわかる一時的なスキル発動と違って、かなり高い隠蔽能力と殺傷能力を持ってるあれは、ティアンまで傷つける可能性があるから早急に倒すか〈マスター〉に話をつけるかしないといけないらしい。
〈マスター〉だから倒してしまえばまた三日後に復活して同じことをやられるんじゃないかと思ったけど、相手の名前と顔さえ確認できれば指名手配をちらつかせたり相性のいい〈マスター〉に依頼を出すことかができるらしい。
　さて、私たちがどうやって敵を捕捉してるのかというと、それはリーナさんの持つ【高位観測者（ハイ・オブザーバー）】というジョブによってだ。
　このジョブは、下級職で取ってる視覚系のジョブスキルのレベルを上げれるらしく、《透視》と《千里眼》を組み合わせて、今は人口の少なくなった森にいる、二つの反応を探知している。
　そして、走ること二分ほど。
　そろそろ相手が見えてくるんじゃないかと目を凝らしていたとき。
　木の陰から接近してきた二本の鎖が私たちの顔を粉砕しようと迫った。
　私は《灰まみれの日々》を発動した手で鎖を掴み，一瞬で【劣化】した鎖がボロボロに崩れて地面に落ちる。

一方リーナさんは，最初に私にやったように紫の光を鎖に纏わせ，鎖の動きを無理やり止めた。
相手は、金縁のモノクルに金髪でファンタジーなのに執事服に身を包んだ〈マスター〉と、全身に青い岩石を纏った大百足だった。
「一応聞いといてあげるわ。降伏の意思はないわよね」
リーナさんの言葉に対する返礼は、先程と同じ鎖の攻撃と地面から生えてきたスパイクで示された。
「いいわ、それじゃあ相手になるわよＰＫさん達」
「ええ、こちらもそこの方には恨みがありますので」
そして，木々を抜けて対峙するは三人の〈マスター〉と一体の〈ＵＢＭ〉。
後に〝灰塵葬儀〟と〝視本市〟。
そして〝人斬り服屋〟と呼ばれる者たちの戦いが始まろうとしていた。

【深鉱金富　　アルノーツ】

■□【高位信仰者】雪姫　　桜

「ＫＵＲＵＲＵＲＵ」

まさか〈マスター〉と〈ＵＢＭ〉がいるのは予想外だったけど，リーナさんが放った風属性魔法で分断することは成功した。

元々ＰＫの姿は確認されてたので、もし二人以上いるならリーナさんが多い方を受け持って分断するつもりだった。

とはいっても，数はそこまで多くないと予想していた。

そもそも，数が多いだけの相手なら《灰を被ったお姫様》でいくらでも倒すことができるのだ。

それをレジストできるものはさほど多くない。

現に，この【アルノーツ】もレジストはできていない。

それを可能としてるのはーー

「ＫＵＲＵＲＵＲＵ」

（意外と早い！）

かなり大きいムカデのような体躯をしているが，それでも【アルノーツ】は，今の私を凌ぐだけの速さを持っていた。

私よりも大きな口で噛みついてくるのを横に飛んで回避すると，そのまま地中に潜りこんで見えなくなってしまう。

《殺気感知》に反応があるのでまだ逃げてないことはわかるけど，ある程度の隠蔽能力もあるようでどこから来るかは分からない。

少しでも前兆を感じれればと周囲を油断なく見渡す。

そのときだった。

けたたましい音と共に，青く輝く岩が私の足元から生えてきた。

時には連続で，時には時間差をつけて，まるで地上の獲物をこうして追い込むことに慣れているかのように，石柱が私を串刺しにしようと迫ってくる。

いや，実際慣れているんだろう。

恐らく，あの糸よりはこちらが【アルノーツ】本来の戦い方。

あの〈マスター〉に使役されていたのか、一時的に協力関係を築い

ていたのかは知らないけど，今まではあの〈マスター〉にも経験値が分配されるように戦闘での功績を分けていたのだろう。
　確かにあの糸による罠は隠密性と安全性はかなり高いけど、純粋な殺傷能力ならこちらの方が高いように思われる。
　私がなんとか躱せているのは石柱が出てくる前にわずかに地面が陥没するのでタイミングが図れるのと、ＡＧＩ差によるものだ。
　だが、今もなお《灰まみれの日々》を使っているのに石柱がなかなか崩れない。
　そう、それこそがレジストできていないはずなのに【アルノーツ】の外皮を、石柱を、《劣化》で壊せない種。
　外皮に纏う鉱石や突き立てた石柱の耐久力が高すぎて【劣化】でも削り切れないのだ。
　間違いなく，あれこそが【アルノーツ】の特性の一つ。
　鉱石の強化，もしかしたら再生能力もある程度はあるのかもしれない。
　あれと同じ青く光る鉱石を纏った【アルノーツ】は，《灰を被ったお姫様》の効果も薄いように見えた。
　とにかく、今は回避に専念してどうにかこの状況を打破できないか考える。
　しばらく回避し続けてだんだんと体が慣れてきた。
　ただ、このままじゃ足場がなくなってしまうので場所を移さなきゃいけない。
　まだいい考えは思いつかないけど、反撃の手を考えつつ移動を開始しよう。
　そう思い始めた頃だった。
　突如、【アルノーツ】があたりの石柱を砕きながら地面を突き破って外に飛び出てきた。
　私よりは少し離れた位置に出てきたのは、《灰まみれの日々》を警戒してのことだろう。
　でも、わざわざ出てこなくてもあのまま安全地帯から攻撃してればよかったんじゃ。

その私の考えはすぐに崩れることになる。
未だ空中にある【アルノーツ】の周囲の砕けた鉱石が変形し，杭のようにとがった先端を向けてこちらに向かってきたのだ。
速度では私に分があるが、数が多すぎる。
体積が足りずに届かないものもあるが，砕けた鉱石全てが変形して向かってくる杭を私は避けきることができない。
次の瞬間，辺りに粉塵が舞い，私は地面に手足を串刺しにされ、倒れ伏していた。

■□【高位観測者】リーナ
「それにしても意外ですね」
「何がよ」
「私とあの虫もどきを分断する作戦は非常に理に適っているといると思います。ですが，あなたはあの虫もどきの方に行った方が良かったんじゃないですか？」
この男の言ってることは分かる。
あの〈ＵＢＭ〉はかなり固い外郭を纏っていたようだが，私の魔法ならそれは関係ない。
うまくいけば地面に潜る前に決着をつけることだって可能だろう。
特典武具だってあって困るものじゃない。
一方，レジスト困難な状態異常を持つあの子なら、こいつ相手に決着をつけるのにもそう時間はかからないかもしれない。
【操糸士】系統じゃ持ってる武器の耐久力は低いだろうし，さっき使ってた鎖だってあの子はきっちり反応して鎖を壊していた。
それでも，私があえてこっちに残ったのは
「貴方からは油断ならない気配がするからよ」
少なくとも、〈ＵＢＭ〉に寄生プレイしていただけのＰＫと見て油断してはいけない。
こいつは対人戦慣れしている。
今も少しでも私に隙があれば、その寝首を掻こうとしている。
素直すぎるあの子じゃ，この男を追い詰めることはあっても，倒す

ことはできないだろう。
　そんな私の心中を呼んだのか，この男もニタリと笑う。
「ふふふ、随分と買われているようですね。ですが、貴方も随分とお強そうだ。魔法職のようではありますが、ＡＧＩ差を理解した上できっちり先手を取っている」
　ジェム貯蔵連打理論が廃れてまだ間もない。
　私は別にとっていなかったので特にジョブ変更とかはなかったが、ジェム貯蔵連打理論が廃れたということは、イコールで前衛の戦闘スピードが亜音速に突入したということである。
　ＡＧＩは上がりにくいはずの【操糸士】系統のはずだけど、エンブリオ補正か、あるいはサブジョブでなにか仕込んでいるのか、速度は亜音速に近い。
「では、始めましょうか。お互い手早く終わらせて相方の援護にいきたいとこですし」
「そうね、始めましょう」
　そして、私は手元に浮かせてる本のページをバラバラとめくりーーＰＫは腰を通して両腕に巻き付けた鎖と，手袋を通してはめたリングに巻き付けた糸で私の周囲を囲い出した。

■◇【深鉱金富　アルノーツ】
「く，うううう」
「ＫＵＲＵＲＵＲＵ」
　目論見は成功し，杭は人間を完全に貫いた。
　急所は庇ったようだが，それでも足と脇腹，左の手のひらと右腕を貫いていて動きは完全に止まっている。
　想定より刺さった杭は少ないが，十分だろう。
　後は縫い付けてある地面の下から大きな杭を出して，串刺しにしてしまえばいい。
　本来あるべき姿に捕食者と被捕食者の関係に【アルノーツ】は愉悦を覚え、今の不満だらけの境遇を想起する。
　そもそも，この私があんな下等生物に従っていなければならないの

が間違いなのだ。
あの日，いつものように地上の生物を串刺しにして回っていたらあの下等生物が，こちらの攻撃を看破して私のスパイクを無数の糸に変えてしまった。
そこからは私の外殻までもを【糸化】して，私をいつでも殺せるように…。
「ＫＵＲＵＲＵ」
思い出しただけでも腹が立ってきた。
そこからは恥辱の日々だ。
毎日，あの下等生物の言われた通りの鉱物を精製して強化するだけの日々。
あいつは私が弱いから育ててやるなどと宣っているが，今に見てろ。
いつかあいつを超える《鉱物操作》を獲得して，復讐して…
おっと，思考が脇にそれすぎた。
別にあの下等生物なんぞ死んでくれた方がいいのだが、このままこの人間を生かしておくのもまずい。
この人間の手は私を殺す力を持っている。
その前に始末を…
「ＫＵＲＵ？」
そこまで考えて意識を戻したとき，【アルノーツ】は疑問を覚えた。
なぜか串刺しにした時は貫いていたとはいえ、五体満足だったはずの人間が、片腕をなくし，未だ足と脇腹に重傷を負いながらも，立ち上がる姿を。

■◇【高位信仰者】雪姫　　桜
「はあ，はあ，危なかった」
未だに危機は去っていないものの，立ち上がった私は【アルノーツ】の姿を見ながらそう言った。
ＥＮＤが上昇していて，細い杭を弾けなければ，あれで終わっていただろう。

「《フォース・ヒール》」
とりあえず回復魔法とリジェネによる回復先を足に集中させて，足を治す。
回復魔法にも傷痍系状態異常を負った場合には集中できる部分があるらしく，そこを中心に回復してれば早めに治る。
これは《灰まみれの日々》で自身の腕を破壊してばかりいたからこそ気づいたことだ。
回復とダメージが相殺できるようになるまでは、かなり心臓に悪い光景だった。
今回，脱出に使ったのもその《灰まみれの日々》だ。
あえて回復を集中させずに，右腕を崩しながらもなんとか左手の杭に触れて左手を自由にし，あとは左手で刺さってる杭を順次【劣化】させて脱出した。
細くなってる分耐久値が足りなくなっていたようで、何とか崩せたのは行幸だった。
もし右腕が崩れきるまでに左手に刺さった杭に触れて入れなければーー
もし杭に【劣化】では崩せ切れないほどの耐久値が残っていればーー
私は右腕を失っただけで，そのまま【アルノーツ】の餌になっていただろう。
だが，これで危機が去ったわけではない。
むしろ脇腹と右腕のダメージを回復するのには十分程の時間が掛かるだろう。
回復魔法はクールタイムでしばらく使えないし，《灰まみれの日々》を発動できる腕も一本だけになった。
だが，負ける気はない。
【アルノーツ】も私の戦意がくじけていないのを感じたらしく，まだ無事な杭に対してスキルを行使し，変形の準備を整える。
お互いににらみ合う時間が発生し，私の脇腹の傷がなんとか癒えてきた頃に…

ドオン

森の向こう側で爆発が起こりーー

私は【アルノーツ】に向かって走りだし、【アルノーツ】は私を仕留めようと、杭を射出した。

策略と奇略

■□【高位観測者】リーナ

頭の頂点。

視覚から迫る鎖の支配権を，無理やり奪ってそこに縫い付ける。

間髪入れずに目と背後，あと心臓を狙って迫ってきた矢じり付きの糸を止めたと思ったら，私の体を【拘束】するように全身に巻き付こうとする糸が静かに，けれど明確な敵意を持って迫る。

あの子の結果を見ていたら，それが【拘束】なんて生易しいことはせず，体をズタズタに引き裂いてしまうであろうことは，容易に想像できる。

だが，それにはあと数秒遅い。

バラバラとめくられる本が目的のページにたどり着きーー

「ーー《ホワイト・フィールド》」

私の体をズタズタにしようとしていた糸も，制御を奪って無理やり止めていた鎖も，その全てが【凍結】する。

《ホワイト・フィールド》の範囲外に身を置いていたようだが，自身の身につけている装備が【凍結】すれば，それなりに動きに隙は生じる。

《魔法威力拡大》と《魔法多重発動》によって十を軽く超える《クリムゾン・スフィア》ＰＫに迫るが，糸を付けていた手袋と凍った鎖を《瞬間装備》と《瞬間装着》で入れ替えて，新しい鎖を木々に巻き付け熱球の嵐から退避する。

そこにあらかじめ《魔法発動遅延》で発動時間を遅らせていた《テンペスト・ブロック》を叩き込むが，それは読まれていたようでギリギリで回避された。

「まったく，厄介な〈エンブリオ〉ですね。大方，魔法を記録し，その魔法を自由に行使できるといったところですか。魔法を行使するときにはそのページを開いてなければいけない制限はあるようですが，各種《詠唱》スキルと組み合わせられれば厄介きまわりない。加えて《詠唱》の省略もできるのであればなおさらだ」

いくつかの勘違いはあるようだが，大体あっている。
私の〈エンブリオ〉は【魔導偽典　グリモワール】。
その特性は魔法の記録と放出。
【観測者】のスキルである《攻撃観測》で詳細を暴いた魔法を，【グリモワール】に記録できる。
他にも複合魔法の生成や，メインジョブに【魔術師】を据えていなくても《詠唱》スキルが使えたりと，魔法に関してはかなりのアドバンテージを持つ。
これまでのプレイ時間で色んな魔法を見てきた。
【大賢者】が〈ＵＢＭ〉の討伐に出た時も《千里眼》で遠方から魔法を記録したりしていたため，私の使える魔法の数は，そこら辺の【魔術師】系統上級職を遥かに上回っている。
「そういうあなたは金属を自在に糸やワイヤーに変化させれる〈エンブリオ〉ってとこでしょ。それ単体じゃ，ただの生産職の便利グッズだけど【操糸士】の能力と合わせればあなたこそ厄介極まりないわよ」
恐らく剣士系統のアクティブスキルを併用した攻撃でも，切れないだけの強度があのワイヤーにはある。
真っ当な【剣士】や【槍士】がやりあったなら，相手の手数を減らせずに，即死の糸で斬断される。
私があの攻撃に耐えれてるのは多彩な魔法と強力な念力効果を持つ箒型の特典武具である【ハルムート】があればこそだ。
どちらかが欠けていたらとっくにデスペナルティになっていたとしてもおかしくない。
それに…
「あなた，かなりの腕前ね。只者じゃないだろうとは思ってたけどここまでやるとは想定外だったわ」
「これでもあの虫もどきを育て始める前は真っ当なＰＫでしたからね。対人戦の経験はそれこそあなた様よりはあると思われます。さて，そろそろ魔法のストックの類も終わりましたか？では，そろそろ続きを初めましょう」
ばれてたか，とほぞをかみつつ応戦するためにいくつか書き換えて

た魔法を中断し，《魔法発動遅延》でストックしてる魔法の数に意識を向ける。
今の間に準備できたこの魔法で，どれだけ時間を稼げるか。それがこの戦いの鍵だ。
「では，参ります」
鎖で目まぐるしく動きながら視覚から襲ってくる糸を空中に縫い留め，投擲された投げナイフを同じように防ぐ。
ナイフに意識がいった瞬間に，地面からせり出してくるいくつもの鎖を《テンペスト・ブロック》で纏めて吹っ飛ばすことで時間を作り，その隙に《多重発動》した《ヒート・ジャベリン》で牽制する。
ただ，それでは隙すら作れない。
吹き飛ばされていた糸や鎖が一斉に向かってくるのを，《ホワイト・フィールド》で縫い留める。
だが，これは先ほど見せた手だ。
衣服で隠された腰や足から伸びてきたワイヤーが氷の隙間から迫ってくるのを，《多重発動》で仕込んでいた二つ目の《ホワイト・フィールド》で防ぎきる。
これでなんとか，と息をついた瞬間。
氷の間から伸びてきた腕が私の顔面を殴りつけ，私は地面へと投げ出された。
しまった，と思うと同時に理解する。
相手は，私がワイヤーに対処することまで読んだ上で，本人は魔法と【ハルムート】の効果範囲外にいる，という思い込みを利用した奇襲をかけた。
一歩間違えれば【ハルムート】で自由を奪われていたかもしれない賭け。
しかしあいつはそれに勝って，まんまと【ハルムート】と私を引き離した。
【ハルムート】は接触していなければスキルを使えない。
そしてストックはあとは防御には不向きな《クリムゾン・スフィア》と《ライトニング・レイン》しかない。

うなりを上げる鎖が私の頭蓋を砕こうと迫りーー
「《魔導法(グリモワール)》」

ーー熔解して飛び散った。

「なに？」
その光景にＰＫは不可解だと声を上げる。
なぜなら，彼もその輝きを見たことがあるからだ。
デンドロが始まって少し経ち，徐々にランカーが塗り替えられていった頃，世にも珍しいティアン同士の魔法職同士の決闘で。
ただの一つしか使われなかった魔法。
すなわちーー
「《恒，星》…か？」
あの闘技場に彼女もいたのなら、確かにコピーは可能だろう。
だが，それでも不可解なことがある。
かつての【炎王】ですら同時発動は二つがやっと。
〝魔法最強〟である【大賢者】でも使ったのは四つまで。
なのになぜ，この女は…
ーー三つもの《恒星》を浮かべているのか。
「…まさかこれを切らされるとは思わなかったわ」
「なぜだ？」
ノーコストで発動させてるのは、〈エンブリオ〉によるスキルかもしれない。
だが、《詠唱》のストックに魔法のラーニング。
さらには魔法のノーコスト発動。
他にもスキルはあると見ていいだろう。
いかに上級〈エンブリオ〉だとしても積みすぎだ。
どこかで重篤な外部コストか大きな制限を負っているのか、それともーー
短い言葉ではあるが，その声音と顔からＰＫが浮かべてる疑問を理

解したリーナは答えを告げる。
「必殺スキルよ」
「必殺スキル？」
「そう，あなたの予想した通り私の〈エンブリオ〉である【グリモワール】は魔法の記録と自由行使ができる。他にも各種スキルがある分出力は低い。でも、あらかじめ込めておけば、それもある程度は緩和できる」
その言葉でＰＫも悟る。
恐らく、あらかじめ魔法を込めておく事で即ノーコストで発動できるスキルなのだろう。
《魔法発動遅延》でも似たようなことはできるが、あれは自身が持ってる以上のＭＰを注ぐことはできないし、確か時間経過でストックしてる魔法は消えてしまうはずだ。
それを考えれば確かにこちらの方が格上と言える。
しかしーー
「いいのですか、そこまで言ってしまって」
必殺スキルとはその〈エンブリオ〉最大最強のスキルのはずだ。
特に全体的な層がまだ上級に到達して間もない今では、必殺スキルを覚えていない者も多い。
だからこそ、その詳細は秘匿するべきだしましてや、また敵対するかもしれない相手に自身でその詳細を話すなど、ここまでの彼女らしくない。
若干の警戒と偽の情報の可能性も考えた問だったのだが…
「いいのよ、前に〈ＵＢＭ〉を倒した時に野良のパーティで話しちゃったから。おまけに特典武具は私が持ってったから今頃嫉妬とやっかみで情報広く流されてるでしょうし」
「なるほど」
全ての疑問を解消し、ふぅと息をつく。
近くだけで溶解しそうな灼熱の光球に、彼は次の装備を出そうともしない。

何かしようとした時点で瞬時に焼却されると悟ってしまったからだ。
「完敗です。ですが、これだからＰＫはやめられない」
「次はもうちょっとましなやり方を考えるか、闘技場にでも行きなさい」
その言葉と共に三つの《恒星》がＰＫへと向かいーー光にすべてを飲み込まれた。
《クリムゾン・スフィア》を遥かに上回る攻撃に，ＰＫは瞬時に燃え尽きる。
そして，森の一部を熔解させたリーナは未だに戦塵が舞う，灰と岩石の戦場へ飛び立つのであった。

■□【高位信仰者】雪姫　桜
迫る杭は、さっきよりもかなり遅い。
余裕をもって避けることができるし、小さな杭は無視して【アルノーツ】に近づく。
右腕がなくなっててバランスは悪いけど、それでも問題ないくらいにステータスに開きがある。
また地中に潜られたら、私には対処できない。
だからこそ、その前に接近して《灰まみれの日々》を使う必要がある。
《灰を被ったお姫様》では通じなくても、《灰まみれの日々》ならほぼ確実に仕留めれるはずだ。

一方、【アルノーツ】も焦ってるようだ。
それは恐らく、先程よりも格段に私が速くなったからだろう。
私のステータスが上昇し続ける種。
それこそは【シンデレラ】が第三形態に至ったことで獲得した新たなスキル。
《魔女のお誘い》によるものだ。

効果は、ダメージ量に応じたＳＴＲ，ＥＮＤ，ＡＧＩの増強。

このスキルのすごいところは自傷ダメージでもステータスの上昇が発生することだ。

強化率こそ低いものの《灰を被ったお姫様》や《灰まみれの日々》を使用しているだけでステータスが上がっていく。

本来であれば〈ＵＢＭ〉との戦闘に耐えれるはずのない貧弱な私のステータスでも一時間程のレベル上げと道中の糸トラップの排除、この戦闘で十分〈ＵＢＭ〉と渡り合えるだけのーー否、それを越すだけのステータスを上げることができた。

特にさっきなんか死にかけたおかげで、さらにステータスは上がっている。

弾丸に近い速度で射出される杭でも、私自身が弾速を越えれば問題ない。

そして彼我の距離はあっという間に縮まり、私が【アルノーツ】左手を伸ばしたところでーー

「ーーきゃっ」

その左手が串刺しにされた。

手のひらから腕の付け根まで完全に串刺しにされている。

問題はさっきまで見えていたその攻撃が私には見えなかった。

何が、と思う間も無く両足にも串刺しにされ動きを止められる。

そこまできて【アルノーツ】を見て、理解する。

【アルノーツ】のあの体は鉱石だ。

しかも、身に纏う程の魔力を込めている。

それ故、あれだけは操れる速度や攻撃力、強度が段違いなのだろう。

なぶるように体を上の方へ持ち上げられ、一際大きなスパイクを用意される。

そのスパイクはドリルのように回転させていて、今ので上昇したステータスを超える攻撃力で貫くのだろうということが容易に想像できた。

ーーでも、だからこそ

そして、発射されたドリルは私の体を僅かに掠った。
顔色なんて分からないけど、その時の【アルノーツ】の心中を私は明確に感じることができた。
ーーありえない
今の完全に拘束された状態から、何もできない状態から逃れて、あまつさえ私の必殺を避けることなど、ありえるはずがない。
そんな、そんな方法で

でも、そんなに驚くことじゃない
私はただ単に《灰まみれの日々》を発動させただけ。
ずっと疑問には思ってた。
【シンデレラ】の【劣化】は一般的に言われてる【劣化】とかなり違う。
触れた部位からその威力に応じてその部位が崩れるし、機能が大幅にダウンする。
でも、本来【劣化】は呪怨系状態異常だ。
呪怨系状態異常は傷痍系状態異常や病毒系状態異常のように状態異常が発生した部分にだけ効果を発揮するのではなく、対象に効果を発揮させる。
でも、私の【シンデレラ】は違う。
あたかも病毒系状態異常のように効果が発生した部分から感染するように、その力の行使は対象ではなく部位に対して発揮される。
なら呪怨系としての性質はどこにあるのか、なぜこんな感染するような仕様になったのか。
ーーそもそもこれは本当に【劣化】なのか。
〈マスター〉である私自身でもわからないことが多いけど、でも土壇場でこれならあれをすればまだ打つ手があるんじゃないか。
私の手足を自切すれば、まだあれをよけることができるんじゃないかと。
結果的に掠りはしたし、HPの上限もかなり削れてほとんど瀕死の状態だけど、あと数秒あれば十分。

そして，少し弾かれながも重力に従い【アルノーツ】に向かって落ちていく。
【アルノーツ】は自身が発射したドリルのせいで視界が塞がれていて私のことは見えないようでーー
「《フォースヒール》ッ！」
私は手足を落としてからもずっと回復を集中させていた右手をようやく回復させーー
「これで，終わり！」
【アルノーツ】の右半身をボロボロに崩し，私と一緒に倒れていった。

エピローグ

「K，RURURU」
「っっ，まだ動けるの」
右半身を崩してなお，【アルノーツ】は動いていた。
いや、正確には右半身を崩せていなかった。
崩したのは【アルノーツ】が纏っていた鎧だけで、本体が中にいるのが見える。
恐らく、《灰まみれの日々》が適用されたのが鉱石の鎧のみだったのだろう。
いつもならああいう外皮を纏ったモンスターは、外皮を崩して皮下の本体に触るという方法をとっていたが、上から落ちながら触れただけだったので、本体にまで手が届かなかったのだろう。
本体に触れようにも、足と左手がなくなっていて右手だけじゃどうしようもない。
そして，【アルノーツ】が《鉱物操作》で私を仕留めようとしたときーー
「《ライトニング・レイン》ッ！」
空から降り注いだ雷が，【アルノーツ】のコアを砕き，そのＨＰをゼロにした。

【〈ＵＢＭ〉【深鉱金富　アルノーツ】が討伐されました】
【ＭＶＰを選出します】
【【雪姫　桜】がＭＶＰに選出されました】
【【雪姫　桜】にＭＶＰ特典
【深鉱襟巻　アルノーツ】を贈与します】
「はーやったー」
システム的にも戦闘が終わったことを知らされ、ようやく安堵の息をつく。
なんだかレアアイテムも手に入ったようだけど，確認する気力もない。

確認しようにも、腕一本しかないし。
「まったく，詰めが甘いわね」
「あ，リーナさん。ありがとうございます。助かりました」
「ところでその体，大丈夫なの？」
「あはは，流石に治るのに三十分以上はかかりそうです」
あ，でも切断した手足をくっつければもうちょっと早く治るかもしれない。
そう思ってリーナさんに手足の捜索をお願いすると，十分くらいしたらとって戻ってきてくれた。
左手だけは見つからなかったそうだけど，あれだけ傷ついてたら仕方ないだろう。
「ところで，どんな特典武具が出たの？」
あ，そうだと思い出してさっき手に入れたアイテムの確認を行う。
それは【アルノーツ】が身にまとわせていた青い鉱石に似た色合いのストールで，こう書かれていた。
【深鉱襟巻　アルノーツ】
〈逸話級武具〉
鉱石を身に纏いし大百足の概念を具現化した逸品。
装着者の装備を強化すると伴に，決して衰えない効果を与える。
※譲渡売却不可アイテム・装備レベル制限なし
・装備補正
ＭＰ＋１０％
ＨＰ＋１００
・装備スキル
《装備品強度強化》
《装備品回復》
これは，これはもしかして
「なんだ，わりと大したことない効果ね」
「や，や…」
「え，どうし」
「やっと服が着れるー!!」

右腕だけで万歳して森中に響き渡った声は、丸裸にされた森によく響き渡るのだった。

■◇【高位信仰者】雪姫　　桜

「それで、あなたこの後どうするの？」

足も治って王都に戻ってる途中で突然，リーナさんにそんな言葉をかけられた。

というか，どうするもなにも

「え，王都に行くんですよね？事情聴取に」

途中でＰＫに引っかかったから話がややこしくなってたけど，元々そういう話だったはずだ。

「違うわよ。あなた，この後も王国に残るのかって聞いてるの。どちらにしろ，狩りの度に森や草原を荒野に変え続けるようなら，目はつけられるでしょうし」

「んー，そうですねえ」

言われてみてそれもそうだと思う。

アルター王国での知り合いといったら【司祭】のお姉さんくらいだし，別にそこまで王国にこだわってるわけじゃない。それならいっそ…

「【高位信仰者】のレベルももうすぐカンストですし，ちょっと天地や黄河の方に言ってみようかなって思ってます」

アルター王国周辺の狩り場は森や草原のことが多い。

【シンデレラ】が周囲に影響を与えてしまうと分かった今では、これ以上アルター王国で狩りをし続けるのは難しい。

そこで灰が落ちてもあまり害を及ぼさないカルディナを跨ぎつつ、素手での武術が学べそうな黄河や天地に行こうということだ。

【シンデレラ】は《灰を被ったお姫様》を使わない限りは素手での近接戦闘がメインになる。

ステータス上昇スキルである《魔女のお誘い》を覚えたんだし、そっちを伸ばすのもいいだろう。

【アルノーツ】のような《灰を被ったお姫様》が効かない相手だと《武

術》系のスキルを覚えていた方がいいだろうし、私の場合は素手での戦闘職で問題視される近接武器を受けとめられないという点も問題がない。
　相手の武器の防具の強度が相当高くない限りはむしろ相手の武器を失わせながら戦えるので非常に有利になるはずだ。
　黄河や天地に行ってしまえば狩りはしづらくなるかもしれないけど、カルディナ横断の間にはもう一つの上級職もカンストできるだろう。
　下級職のカンストだけなら狩場さえ選べばそこまで時間はかからない。
「ふぅん、それじゃあ私も一緒に行こうかしら」
「へ？」
「あなた、面白そうだし」
「え？」
「見てて危なっかしいし」
「えぇ……」
　確かに私より合計レベルも到達形態も高いリーナさんなら一緒に来てもらえたら心強いだろうけど
「でも、【シンデレラ】の灰が」
「新しく魔法作ってなんとかするし」
「でも【グリモワール】って外部コストありきの魔法は覚えられないんじゃ……」
「【大賢者】の〈ＵＢＭ〉討伐や決闘見てたから割と西方の魔法は記録したわよ」
「あの、えと、でも…」
「なによ、嫌なの？」
「い、いや。そういうわけじゃ。うぅ……分かりました。よろしくお願いします」
「それでいいのよ。あと、パーティメンバーなんだから敬語は要らないわ」
「は……分かった」

そして，私が生まれて初めて組んだパーティは，そのまま継続して東方に向かうのだった。

■□【高位観測者】リーナ

最初に不安に思ったのは，自分の右足が切断されても平然としているときだった。

いくらゲームで痛みがないとはいえ，自分の手足が切断されたら動揺するし，慌ててくっつけようとする。

でも，あの子はそんなことどうでもいいとばかりに，私に警戒を促してきた。

あんな〈エンブリオ〉を持ってるから，そんなことにはとっくに慣れてしまったのかもしれないし，あるいは，そんな精神性だからこそ，あんな〈エンブリオ〉が生まれたのかもしれない。

でも，どちらも正解には近くても，届いていない気がした。

二度目は，そのすぐ後だった。

〈ＵＢＭ〉に致命傷を与え，倒れ伏しているところを見て，さらに私の心はざわめいた。

だって，その時の彼女は四肢のうち三つを欠損していた。

ろくに動けず，目の前に迫ってくる死だが，ほとんどの〈マスター〉はこれを経験している。

私だって何度かデスペナルティになったことはあるし，野良で組んでたパーティで，デスペナルティになるものが出たことだってある。

その時の彼らの目は，諦めや恐怖，あるいは悔しさなどといった様々なものだった。

でも，彼女の目には，何の感情も浮かんでいなかった。

世界派の〈マスター〉のように恐怖や怒りを覚えるのではなく，遊戯派の〈マスター〉のようにゲームだと割り切って退場していくのでもない。

ただただ，自分の死に対して何の感慨も抱いていなかった。

「それは一つの在り方だとは思うけど」

カルディナの噂はよく聞く。

金のない者は全てを失い、金のある者だけが成り上がれる…弱肉強食の国だと。
このまま彼女がどこかに行ってしまった場合、きっとどこかでボロボロになってしまう気がした。
「ほんと、似合わないのは分かってるんだけどなー」
少しだけ、口調をリアルにのものに戻した後、ほんの少し口元を緩めて、あの子の元に飛んでいくのだった。

閑章
キャラ紹介

雪姫　桜　（チェリー・アウルブルク）
父親はフランス人で、母親は日本人のハーフ。生まれも国籍もフランスだが、母親の血を濃く受け継いでいたため黒髪黒目と日本人らしい顔つきをしている。
小学生の時はよくそれが原因でいじめられていた。
それ故に多少気弱な性格になっている。

デンドロ内での容姿は銀髪蒼眼とリアルとは思いっきり変えた模様。
昔日本に数年いたことがあり、その時に日本語も学んでいたため、容姿と名前の国を逆にするということをしている。
最初に選んだ服は白のワンピースだったが、【シンデレラ】が第二形態に進化したことで近接戦闘が可能になったのと、特典武具が手に入ったことによって【礼拝者】用の装備でなくても装備可能となったため服装を一新。
現在はチェニックにショートパンツ、その上から砂漠用の防塵ローブを纏ってるという形である。
ただし防塵ローブはファッションを優先してか腰までしかなく、一度も訪れたことのない砂漠を甘く見てる模様。
多分リーナに呆れられながら冷却魔法をかけてもらい、最初の街まで行って炎熱耐性のアクセサリー買ってる。

ジョブ
下級職：【礼拝者】、【信仰者】、【冒険家】
上級職：【高位信仰者】

【灰塵幻想　　シンデレラ】

ＴＹＰＥ：テリトリー
到達形態Ⅲ
《灰を被ったお姫様》
触れたものを【劣化】させる灰を降らせる。
《灰まみれの日々》
触れたものを【劣化】させる。
《魔女のお誘い》
自身がダメージを受けることによってＳＴＲ　、ＥＮＤ、ＡＧＩを上昇させる。

【深鉱襟巻　　アルノーツ】
アクセサリー
ＭＰ＋１０％
ＨＰ＋１００

《装備品強度強化》
《装備品回復》

リーナ（柳沢　里奈）
昔の魔法少女アニメやプ○キュアが好きなため、それっぽい格好をしようとしたがティアンに理解してもらえず仕方なくコテコテの魔女っ子の服装をしている。
リアルとあまりキャラは変えておらずクールな感じだが、その実可愛いもの大好きなため、あまりにも可愛いものを見るとハメを外す。
本人は自覚してないが、実は桜について行くと言ったのも桜が可愛いからという理由が少なからず存在する。
アバターは金髪碧眼だが、【観測者】のスキルの福次効果で紫の目に無数の星が瞬いているような非常に綺麗な眼となっている。
服装は前述したとおりＴｈｅ魔女っ子。
ただし乗ってる箒は特典武具で、浮いてるのや桜を浮かせていたの

は重力魔法でなくこの効果である。

下級職：【魔術師】、【観測者】、【騎兵】、【生贄】
上級職：【高位観測者】

【魔導偽典　　グリモワール】
ＴＹＰＥ：エルダーアームズ
到達形態Ⅳ
両手装備枠
《魔法記録》
【観測者】のスキルである《攻撃観測》で詳細を知った魔法をグリモワールに記録する。（同じ魔法は記録できない）
《リプレイス・ページ》
二つ以上のページを選択し、そのページに記載されている魔法を入れ替える。
入れ替えには二つだけでも三十秒ほど掛かり、ページが多くなるほど時間は伸びる。
《詠唱貯蓄》
事前に《詠唱》スキルを込めておくことで、その《詠唱》を任意の魔法に乗せて使用可能。
また、副次効果として魔術師系統がサブジョブにあっても詠唱が使える効果を持つ。
《魔法複合》
二つ以上のページを選択し、そのページの魔法を複合させて新しい魔法を作れる。
成功率は低いものから高いものまでピンキリであり、ページ数が多ければ多いほど成功率は低い。
この効果で作った魔法は《魔導法》で消費しても回復せず、複合元となった魔法はもう一度ストックし直すまで使用不可。
クールタイムは成否関わらず一ヶ月である。

《魔導法（グリモワール）》
あらかじめ破っておいたページに魔力や《詠唱》スキルを込めることで、ページをロストさせてその魔法を自由に行使できる。

スキルの多様性の代償として、〈エンブリオ〉補正、装備補正は皆無に近く、【グリモワール】の強度も通常の本並である。
なので、リーナに勝利する最適解は、奇襲や狙撃からの【グリモワール】狙い。

【自在静動　　ハルムート】
古代伝説級特典武具
特殊装備枠
ＭＰ　＋１００％
《制動》
対象を【拘束】し、その対象を範囲内なら自由に動かせる。
ただし、【拘束】できるのは七つまで。
自由に動かせるのは自身に属するものを除けば一つだけである。
【拘束】してる対象が少なければ少ないほど効果は大きくなるが、リーナはこれのうち二つを【グリモワール】と【ハルムート】自身を動かすのに使っている。

ガチャガチャ

??◇ロレーヌ女学院　チェリー・アウルブルク

「じゃじゃーん！これなーんだ？」

「…外出許可証？」

それは長閑な昼の放課後のことだった。

授業も終わり，金曜なのでデンドロでやることの段取りを頭の中で整理してると急にファリナに声をかけられた。

自慢げに突き出されたその手にはしっかり〝外出許可証〟と書かれている。

「珍しいね？ファリナが外出許可証わざわざもらってくるなんて」

ロレーヌ女学院では基本的に生徒の外出は認められていない。

全寮制で学食もかなり豪華で個室が割り当てられてるという高待遇だけどその代わり自由が著しく制限される。

外出許可も夏休みや冬休みに家に帰るときにもらえるくらいで，遊びに行くから外に出たいなんて話はまずまかり通らない。

ご令嬢に悪い虫がつかないためにかなり徹底されている。

人より裕福な代わりに籠の鳥。

ショッピングしたりカフェに入って雑談するような青春の一部が送れないのは，お金に困らない代わりの不自由とも言えるかも知れなかった。

（まあ，私は自分の意思でここに入ったので遊びに出歩いても両親からは何も言われないしファリナのご両親もおおらかなので問題はない。むしろ彼氏を家に連れてったら私の場合はお母さんが大喜びするだろうしファリナの場合はファリナのお父さんが彼氏と酒でも酌み交わすだろう）

さて，そんなロレーヌ女学院の生徒ではある意味異例とも言える私たちだが学院に入ってる以上外出禁止のルールは適用される。

だけどファリナは頻繁に抜け出してショッピングやら食べ歩きやらをしている。

どうやらいくつかバレずに抜け出せるルートを見つけているらし

く脱走の常習犯であった。
余談だが彼女の〈Ｉｎｆｉｎｉｔｅ　Ｄｅｎｄｒｏｇｒａｍ〉のハードはネットで注文したものではなく抜け出して買ってきたものである。
私もルートを教えてもらったことはあるが複雑すぎて覚えられず、ファリナは忍者だったの？というような有様だった。
…ファリナはＮＩＮＪＡ？とよくわかってなかったようなので忍者の末裔ではないはず。きっと，多分。
閑話休題
ともあれ，自在に学校を抜け出せるファリナがわざわざ外出許可証をもらってきたのは私には意外とも言える話だった。
「…？だって，許可証貰わないとチェリーも一緒に出かけれないでしょ？」
「えっ!?私も行くの？」
「当然。そのためにわざわざ理由でっち上げて許可もらってきたんだから。行くよね？」
「うん，そういうことなら行くけどファリナ，その前に…」
「？」
渡井が恐る恐るファリナの後ろを指差し，ファリナがなんだろうという顔でゆっくりと振り向く。
私が恐る恐る指差す後ろ。
そこには礼儀作法に厳しいニーナ先生が怖い顔で立っていた。
「……あ」
ちなみにファリナは礼儀作法が苦手でニーナ先生をすごく苦手に思ってる。
上品な言葉遣いをしようとしてもどこかでボロが出たり，変な言葉遣いになったり。
後きっちりするのが性分に合わないようでドレスを着た時も知らず知らずのうちに着崩したりしてニーナ先生に毎回大目玉をくらっているからだ。
「ファリナ，少し話があります。隣の教室へ」

「えっと，今のは，そのー」
「隣の教室へ」
「…はい」
ニーナ先生とファリナが隣の教室へ入って行き，ーー直後，ファリナの悲鳴が隣の教室から響き渡った。
…一瞬驚いたみんなが「ああ，なんだファリナか」という顔をして友達と話すのを再開した辺りが，みんなのファリナへの評価を如実に表してると言えるかもしれない。
その後，けろっとした顔で「次の日曜だからね！」と私に話しかけてきて，ニーナ先生が苦虫を噛み潰したような顔をしていたのが印象的だった。

■□チェリー・アウグブルク
ああは言ったもの私も楽しみで，次の日曜をそわそわしながら待って外出した。
ショッピングをしたりアイス食べたり，カラオケで歌ったり，とても楽しかった。
短くも楽しい時間が流れ，そろそろ帰ろうかとなったとき。
「あ，ガチャガチャだー」
カラオケで歌ったお店の近くに，ガチャガチャがいくつも置いてあるゲームセンターのような場所を見つけた。
お店の人に聞いてみるとどうやらオーナーが日本かぶれの人で，他の店にもいくつか置いてあるらしい。
「せっっかくだし回して行こうよ，後ちょっとあるし」
「うーん，いいよ。りょーかい」
「…どうしたの？そんな苦笑いして」
あっと，そんなに顔に出てたかな。
思わず顔を触りつつ，ファリナに私が苦笑いした原因を話す。
「実はね…」

■□【アルノーツ】討伐直後　雪姫　桜

ガチャン
「えっと…なんで？」
「あなたをギルドまで連れていく話ーーしたわよね」
「…そうでした」
リーナに手足を持ってきてもらえたおかげで早めに手足が修復され，王都に戻ってきた。
【アルノーツ】をゲットしたことによって服も自由に買えるようになり，ショッピングでも楽しもうかなーと少しウキウキしながら王都に踏み出そうとしたところでーー
ーー手錠をかけられた。
周りの人の目線が痛い。
子供は不思議そうな顔をしてるし大人は物珍しそうな表情で見てくる。
「あの，すごく目立ってるんだけど」
「そう，いつものことね」
つんとすました顔をしてなんでもないかのようにリーナは堂々と歩き出す。
…確かに魔女コスプレのリーナは慣れてるかもしれないけどごく普通の一般人である私にとってこの視線は荷が重い。
「……」
「どうしたの？」
「何でもないわ」
じっと私のことを見てきたけどすぐに目線を外したリーナに首を傾げつつ、取り留めもないことを考える。
ーー一応逃げない気ではあるんだけど罪を犯した以上こうやって逮捕されるのは仕方ないことなのかな…
ーーいや，普通こういう時って手錠や顔は隠してくれるものじゃ。
ーーまあ，逃げる気になったらいつでも【シンデレラ】で壊せるし，むしろ信頼してくれてるから何の効果もついてない手錠を付けてくれたのかもしれない。
ーー普通戦闘系ジョブを持った人を捕まえる時には【衰弱】や【酩

酊】のついた手錠をかけるらしいし。
ーーあれ，でもやっぱり私って戦闘職は持ってないからこの扱いはおかしいんじゃ…？
色々と思い悩んでる間にいつの間にかギルドにたどり着いた。
リーナが報告をするとともにギルドの奥に連れていかれる。
しばらくすると怖そうな【騎士】のおじさんが出てきて事情聴取を始めた。
「つまり，自分が〈マスター〉への一時殺人を犯していることに気づかなかったと」
「はい，すいません」
「森林の損失についても」
「全く気付いてませんでした」
「悪気は一切なかったと」
「ごめんなさい」
《真偽判定》でも嘘がないと分かったのか、はあ，と【騎士】さんがため息を一息ついて水を飲み干す。
その行為にびくっとしつつ恐る恐る顔をあげると
「〈マスター〉への一時殺人については〈マスター〉同士でのことなので罪には問いません。しかし森林については国営のものもいくつかあるのでそこについては損害賠償をお願いします」
「…ちなみにいくらくらいですか？」
後ろにいた【書記】の人が黙ってスキルでコピーした紙を【騎士】さんへと渡す。
それを【聖騎士】さんは私へと差し出しーー
「……」
「……」
「……」
ーーここがゲームで良かったと心から思った。

■■【高位信仰者】雪姫　桜
さて、莫大な借金を背負ってしまった訳だがこれでは出発もままな

らない。
額にして訳百万リルーー一千万円の借金だが賞金首についてる金額は大体そのくらいだったはずだ。
だから賞金首を狩るという手もあるのだがーー
「ーー私が戦闘するとまた借金が増えそう」
この借金が既に戦闘したことによって増えた借金だ。
解決策もないのに同じ手段でお金を稼ごうとするのは気が引ける。
故に，戦闘以外の手段でお金を工面しなくてはならない。
聖職者系のジョブで埋めてるから教会で働かせてもらうという手もあるだろうが，そんなことしていれば全額返済するのにいつまでかかるかわからない。
とはいえ，これから一緒に旅するパートナーにそんな大金を工面してもらうわけにもいかない。
現在の貯金は二十万リル…ここからどうしたものか。
すっかり悩みこんで立ち往生してしまった私の目に，あるものが入り込んできた。
決して可能性が高いとは言えない。
でもこの状況を一気に解決できるかもしれない。
しばらく悩んだ末，私は小さく頷いてとあるお店に入っていったのだった。

■□【高位観測者】リーナ
桜をギルドまで送り届けた後電話がかかってきたので少しの間ログアウトしていた。
しかしその間に桜の取り調べが終わってしまったようで，桜はどこかにいってしまったようだ。
フレンド欄をみるとログインはしているようなので街をしばらく街の中を散策していると桜が行列に並んでいるのを見つけた。
なんの行列だろうとその先を辿ってみると…その先にはガチャが置いてあった。

アイテムボックスから格好つけるためだけに買ったにも関わらず，【グリモワール】が両手装備枠だったために結局一度も使ってない杖を取り出す。
ゆっくりバレないように近づいて，その杖で桜の頭をポカリと叩いた。
「あたっ…くはないけど，リーナ。どうしたの？」
「どうしたの？じゃないわよ。随分探したのになんでこんなところにいるの？」
「大丈夫。リーナと旅に出るために私，がんばるから。おねーさんにドンとまかせなさい」
旅？なんでガチャ回すのが旅と関係あるのだろう？
というか，桜って年上…？いや，これは変なテンションになってるだけかな？
リーナが色々と悩んでる間に行列が進み，桜の番が回ってきてガチャを回す。
一万リル硬貨を十枚入れてーーちょっと待て。
「え？え？ほんとに何やってるの？大丈夫って言ってたけど何が大丈夫なの？」
「大丈夫だよ，なんかいける気がする」
「事情はよくわからないけど危険な匂いがするわ。やめなさい！」
「でも，もう硬貨入れちゃったし」
「…そうね」
私が諦めたのを見て桜がガチャを回す。
そして出てきたカプセルにはーーDの文字があった。
「……あ」
「ほらあ！」
呆気にとられた声を出す桜に私が叫ぶ。
困り顔になりながらも桜がカプセルを開けるとーーそこには大きな猫のぬいぐるみがあった。
「おお，おっきい」

「十万円の人形なんだからそりゃおっきいでしょうよ。でもそんなものどうす…」
桜を責める声がだんだんと尻すぼみになり，途切れる。
その猫に見覚えがあったからだ。
それはーー
「おい，あれ管理ＡＩのぬいぐるみシリーズじゃないか？」
「ほんとだ。あんなに大きいの私初めて見たよ」
あたりの客もそれに気づいたのか騒ぎ出す。
「え？え？どういうこと？」
「ーーそれはガチャからしか出てこない管理ＡＩのぬいぐるみで一部のマニアの間では大人気の代物よ。出た価値の何倍もの価格で取引されることで有名なんだけどそれをあなたーーそんなに大きいのを…」
状況が分かってない桜に説明しつつも，呆れと感心で途中で言葉がでなくなる。
丁度その時，店の店主らしい人が出てきて
「すいません，そのぬいぐるみを私そもに売っていただけませんかな？」
「は，はい。ええっと，でもいくらで？」
「百万リルで」
「ええっ？」
桜が助けを求めるようにこっちを見てきたので，黙って頷いておく。
その大きさならそれくらいが相場だろう。
カルディナでオークションでもやれば桁も変わるかもしれないが，あそこは騙されることも多いので売るならここで売っておく方が賢明だ。
ーーというか，私が欲しい。
「じゃ，じゃあお願いします」
そう言って目を白黒させながら桜がぬいぐるみをアレハンドロさんに渡した途端，ガチャに並んでいた客がこぞって店に乗り込んでき

た。
「いくらだ？いくらで売ってくれる？」
「私の方が高く出すわよ」
客を避けつつ金額を受け取った桜が人混みから出てくる。
「す，すごいね。ぬいぐるみ一つであんなに」
「マニアっていうのはそういうものだから…じゃ，私もいってくるから」
「え，リーナ？」
「ちょっと待っといて，今度はいなくならないでね」
「ええっ!?」
そうして，私も争奪戦に加わったのだった。

■■ゲームセンター　チェリー・アウルブルク
「ということがあってね」
「あはは，それは大変だったね」
ファリナと笑いあいながらガチャを回す。
出てきたカプセルを開けるとそこにはーー
「あれ，これって？」
「んー？おっと」
ガチャから出てきたチェシャ猫のぬいぐるみによく似たストラップが，私の手の中で揺れていた。

ウィンドウショッピング

??◇【高位信仰者】雪姫　桜

今日は服を買うためにウィンドウショッピングにきてる。

今までは【シンデレラ】を使う関係上着る服は《自動修復》の装備スキルがついたものに限られていた。

しかし【アルノーツ】を手に入れた今はそかうではない。

せっかく【アルノーツ】を手に入れたのだから今まではできなかったおしゃれというものをしてみたい。

ちなみにリーナはアルター王国を離れるということで各方面への挨拶に行っており別行動だ。

私も後で【司祭】のお姉さんのとこに挨拶に行かなくてはならない。

「あ、これかわいい」

そんなことを考えながらお店を回っていると一着のチェニック見つけた。

真っ白な生地に所々花の刺繍がされており、装備スキルには《破損耐性》と書かれている。

それ以上のスキルは何も書かれてないが、私の場合は服が壊れないということが何よりも重要だ。

壊れてさえいなければ【アルノーツ】の《装備品回復》の効果で時間をかければ修復できるし、《破損耐性》も《装備強度強化》のスキルと重ねがければかなり頑丈になるだろう。

《破損耐性》のスキルレベルがそこまで高くないためか、あるいは装備スキルが一つしかないからか、値段も今の所持金で十分買えるくらいだ。

「すいません、このチェニックと合う感じの装備を選びたいんですけど、どこら辺にありますかね？」

近くにいた男性の店員さんに聞いてみるとすぐに笑顔で応対してくれる。

「はい、えーそれでした……」

「あの、どうかしました？」

「いえ、失礼しました。それでしたらこちらなどいかがでしょうか？」
途中で笑顔が固まったような気がしたが、すぐに気を取り直して店の奥から商品を引っ張り出してきてくれる。
取り出されてきたのはジーンズのショートパンツに亜麻色のローブだった。
「どちらも装備スキルはついてませんが元は頑丈な鉱石だったものを〈エンブリオ〉のスキルで加工したものです。そのチェニックとも合いますしローブの方は雪を避けるときに役立ちます」
「へえ、いいですね」
装備スキルがついてないためかどちらも値段はそんなに高くない。
むしろチェニックよりは安いくらいだ。
それに頑丈というのも…
…あれ？私って頑丈なのをお願いしますってオーダーしたかな？
それにこのローブ見た感じ防塵ローブみたいな雰囲気あるけどなんで雪限定で言ったんだろう？
「ーーーーーー」
「ーーーー」
「ーーーーーー」
そのとき、店の外で何か音が聞こえたような気がした。
「あれ、今何か音しませんでした？」
「さあ、どうでしょう？」
「…気のせいかな」
ともあれ、三つとも気に入ったので買うことにした。
防塵ローブは立ち回りの邪魔になるから普段は身につけないだろうけど、誰かに貸すときとかでも役に立つだろう。
試着室を借りて、早速着替えてから後で【司祭】のお姉さんに見てもらおうと心に決めるのだった。

??◇
時は少し遡る。

「いいか？この店に前に俺たちをデスペナにしたやつがいる。お前ら、準備はいいかー!!」
「いや、準備って言っても街中だからお前が闇属性魔法でダメージ与えるだけだろ？」
「ばか、相手は聖職者系統だぞ。お前の〈エンブリオ〉で【拘束】すんだよ」
ここに集まった三人は先日桜に無意識のうちにデスペナにされたＰＫだ。
デスペナに際してのランダムドロップや【劣化】による装備破壊によって相当な損害を被っている。
先日の取り調べによってあの時の犯人が桜であると掴んだ三人はその報復にやってきたのだった。
「それだけじゃねえ！お前が【拘束】した後《窃盗》や《強盗》スキルで奪えるものは全部奪ってやる！それをもって俺らへの慰謝料としてもらおうじゃねえか」
「おう、そりゃいい！あんだけのスキル持ってんなら相当稼いでるだろうからなあ！」
「ねえ、それ大丈夫？女の子拘束して持ち物剥ぎ取るとか通報されたりしないよな？」
なお、いきりたつ二人に対し一人冷静な男がいるのはその男が桜による損害をあまり受けてないからである。
【盗賊】でありＨＰが低かったため装備が壊される前にデスペナになり、ランダムドロップでもあまり貴重なものは失わなかった。
ここにきたのは完全に他の二人に巻き込まれたからである。
反面、先程から二人を先導している男は【暗黒騎士】であったため、中途半端に呪怨系状態異常に耐性がありＨＰも高かったが故に高価な鎧や呪いの武器を軒並みロストしている。
「よっしゃいくぞお前らあ！」
「おう！」
「え、俺の意見はまるっと無視？あ、そう」
そして二人の男が先頭に、勢いよく扉を開けようとしてーー

「ーーーーーえ？」
開けようとした男の右腕がーーぼとりと落ちた。
なんの抵抗もなく、まるで包丁をケーキに徹しでもしたかのように唐突に腕が切断され、血に濡れた断面を晒していた。
「う、うわああっ!!」
男がその光景に思わず後退りをし、足を一歩後退させる。
すると今度は右足のかかとが切断された。
靴を装備していたというのに靴すら何もなかったかのように足と一緒に切断されている。
そのままバランスを崩し、体が崩れ落ちると共に残った足を、手を、体を、首を、顔を細切れに切断されていき、その損壊の激しさから地面につく前に光の塵となった。
「は、はあ!?」
「え、なに今の」
あまりにも突然のことに残された二人が動揺したときにはもう既に時は遅くーー
「ひっ」
「うっ」
その首から血が流れ出しており、そこでようやく自分の首に糸が巻きついてると知った。
いつの間にか店の扉には『乱暴なお客様は入店お断り』と書かれた貼り紙が扉についておりーー
「ちょっ」
「まっ」
自分たちの体中に『こいつらＰＫ』と書かれた紙が張ってあるのが目に入った時には、その首は既に落ちていた。

ハロウィンイベント

??□【高位信仰者】雪姫　　桜

「あの、リーナさん。折り入ってご相談があるのですが」

「何よ、改まって」

【巡礼者(ピルグリム)】への転職条件のこともあって、私とリーナは少し予定を変更してドライフに来ていた。

丁度半日で終わる護衛クエストがあったので、それくらいならログアウトも大丈夫だろうととある商人に便乗させてもらっている。

ここまでの旅でかなりリーナとも打ち解けてタメ口の名前呼びになっていたところで、私の改まった口調にリーナも少し身構えてる。

初対面が最悪に近かったにも関わらず、あの共闘で私達の絆はかなり深くなった…と思う。

でも、言わなければならない。

ことは生命の危機に直結するのだから。

そして、私は意を決して口を開き…

「お金を、貸してくれませんか？」

「却下」

そうして幌馬車の中に戻っていくリーナの服の裾を私は掴んで

「お、お願い、リーナ。このままじゃ私寒くて死んじゃう」

「だから却下よ、却下！そもそもなんで冬服買ってこないのよ！」

「だって、だって！ほんのちょっと協会寄ったらすぐ出るつもりだったじゃん！ちょっと国境超えただけでこんなに寒くなるとか予想外だもん！」

今の私の格好はちょっと長めのチェニックにショートパンツといったもの。

対寒性能は皆無だ。

むしろカルディナに行くから涼しい格好の方がいいだろうと思っ

てこっちにした。
寄り道する先はレジェンダリアでもよかったわけだし、護衛クエスト探してる時もレジェンダリア方面で探していた。
だが、その時リーナに言われたのだ。
「レジェンダリアは変態の巣窟だから行きたくない」と。
一応他にもアクシデントサークルがあるからだとか部族ごとに慣習が違いすぎるから面倒だとか色々あったけど、一番の理由は〝変態がいるから〟だった。
何かレジェンダリアであったのだろうか？
ともあれ、そんなわけで少しくらいなら大丈夫だろうと甘い見通しを立て、私はドライフ方面に行く短期護衛クエストをいくつかリレーしながら受けてきたわけだが。
「ほんと見通しが甘いわね」
今になってドライフの寒さを味わっていた。
ちなみにリーナは格好こそいつも通りだが、耐寒性能に特化したアクセサリーをつけているため全く寒くなさそうだ。
私もアルター王国で防塵ローブは買ったが，当然ながらこのローブにも対寒性能はない。
試しに装備して寒さに震えてる私を見てリーナが何か言いたげな顔をしていたけど、これは元々砂漠用に買ったものなんだからそんな顔しないでほしい。
「というか、あなたの〈エンブリオ〉なら広域殲滅できるんだから実入りはかなりいいでしょ。クエストは受けれなかったにしてもドロップアイテムはどうしたのよ」
「えと、それは、その…【シンデレラ】ってお金稼ぎに向いてなくて」
【シンデレラ】の基本スキルである《灰を被ったお姫様》は辺り一帯に強力な【劣化】を促す灰を降らせるというものだ。
それ故、周辺環境を破壊するということでアルター王国から離れたわけだが、実はそれ以外にも問題はある。
というのも、《灰を被ったお姫様》はドロップアイテムにまで【劣化】を付与してしまい、アイテムの回収があまりできないのだ。

近くにあるものはすぐに拾って回収できるけど，広範囲を壊滅させる割には手に入るドロップアイテムは少ない。
クエストをやるにしても採集クエストは言わずもがな、護衛クエストも味方を巻き込んでしまう。
《灰まみれの日々》を主軸に戦おうにも私自身のステータスは貧弱で，《魔女のお誘い》でステータスを上げるのにも時間が掛かる。
よって，【シンデレラ】はレベル上げにはうってつけでも，お金稼ぎには向いていない。
そうした問題を解決するために黄河に向かってるわけだが，それで黄河までの旅費がどうにかなるわけではないのだ。

「それじゃ、ハロウィンイベントで稼ぎなさいよ」

「ハロウィンイベント？」

私はそういうゲームでのイベントごととか初めてだったのでよくわからなかったのだが，どうやらデンドロでも現実のお祭りごとに合わせてイベントとかをやってるらしい。
今日はリアルではハロウィンで、学校でもファリナや他の友達とお菓子を交換してお菓子パーティーをやっていた。
「そのハロウィンイベントってどんなことをするの？」
「確かお化けの仮装をしてアンデッドモンスターを倒そうって話だったわね」
「…お化けがお化けを倒すの？」
「イベント担当の管理ＡＩがハロウィンを勘違いしたんじゃない。そのお化けが落とすアイテム，お菓子らしいから」
これじゃトリック・オア・トリートじゃなくてトリック・アンド・トリートよね，とため息をつくリーナを眺めながら私も衣装について考える。
幸い【アルノーツ】を手に入れたこともあって，装備に関しては自由に選べる。

となるとやっぱり肝心なのは仮装だ。
「あの、仮装するお金がないんだけど」
「私が出す条件を飲めば仮装と…ついでに耐寒アクセサリーを買うお金も貸してあげるわ」
なぜか私の顔を見ようとせずーー明後日の方向を見ながら私に話しかけるリーナに不安を覚えつつ、リーナに条件を問いかける。
「えと、そのーー条件って？」
にっこりと微笑んだリーナの顔が、一瞬本物の魔女みたいに見えた。

■□皇都　ヴァンデルヘイム　服飾店【アンティール】

「あーやっぱり狼女かなー。いやでも銀髪に吸血姫はなかなか映えたわね。…いっそミニスカサンタとか？」
「ひゃっはーッ！いやー，桜ちゃんいいモデルだわ～。これはブログに載せるのが楽しみね」
「もう、いっそ殺して」
服を外部出力してブログに載せることで，リアルでも有名なマスターが運営する服飾店に入った後、店内にある服で片っ端から着せ替え人形にさせられた。
途中から店員さんも一緒に盛り上がって様々な服に着せ替えられ、写真も片っ端から撮られてる。
こんなの、ファリナには見せられない。
メイド服やセーラー服とか明らかに関係ないものまで着せられてもう、ハロウィンイベントなんてそっちのけになってきてる。
「いやーレバルドのやつが急に高性能の糸大量に送ってきたときは何事かと思ったけど，いろんなコスプレ試作しといてよかったわ！まさかこんなに試す機会が来るだなんて思わなかったし」
「私もここまでわかってる店があるなんて思わなかったわ。機会があればぜひ語り尽くしたいのだけど」
「お，リーナちゃんわかる口？実はこんなのもあるんだけど」

そのレバルドっていう人許すまじ。
なんだかリーナもテンションが振り切ってキャラが崩壊してる。
ちなみにこれらの装備品の性能はかなり低い。
というのも〈Ｉｎｆｉｎｉｔｅ　Ｄｅｎｄｒｏｇｒａｍ〉において完全な新しい装備を作るのは意外と難易度が高いからだ。
既存のスキルを保ったままデザインを変えるだけでもかなりの技術が要求されるため、ここに並んでるのは完全にファッション用の服である。
【アルノーツ】のおかげで装備は自由に選べるようになったのでおしゃれはしてみたいと思っていたがまさか二番目ののおしゃれがコスプレになるとは。
「凍死するよりはマシだから大丈夫よ。それより次はこっちにしましょ！」
「ううっ、まだやるの？」
「ふっふっふ、当然」
「その手はなに!?」
両手をわきわきさせながらまた着替えさせようとしてくるリーナに半ば諦めの境地に立たされていると
「ちょっとちょっとリーナちゃん。その前に一ついいかな」
「どうしたの？」
「実は知り合いの【研究者】から面白い薬をもらっててね。まだ未完成品だから一般には流通させてないみたいなんだけど…。さくらちゃんを実験台にしていいかな？その代わりどれでも好きな装備品持ってっていいから」
「駄目ですよ！」
「どんな効果なの？」
「駄目だからね！」
「それは見てからのお楽しみ。ーーでも，桜ちゃんがもっと可愛くなるのは保証するわ」
「駄目だっーー」
「ぜひお願いするわ」

「話を聞いてよーっ!!」
…とはいえ，装備のことを持ち出されたら何もいえないのは変わらない。
丸め込まれる形で薬を渡され，いつの間にかカメラを構えた店員さんが期待した顔でこちらを見てる。
「ーー危なくはないんですよね？」
「もちろん，それ作った【研究者】にもそこら辺のことは確認してるからそこら辺は大丈夫よ」
…薬の色，明らかに毒々しい紫なんだけど大丈夫かな？
とはいえ，装備品のことを持ち出されたら選択肢なんてない。
「そ，それじゃあ」
恐る恐る瓶を傾けて中身を口にする。
毒々しい色に反して意外にもミックスジュースのような美味しい味がした。
次の瞬間，全身が激しい痛みに襲われた。
「え，これ大丈夫なの？」
いきなり苦しみ始めた私にリーナが不安そうな顔で店員さんを見る。
「うん，体を作り替えるんだから痛みが走るとは聞いてたけどーー痛覚設定オフでも痛いってことは頭痛みたいな者なのかな？」
「体を作り替える？」
リーナと店員さんが何か話してるが内容が頭に入ってこない。
体を丸めて必死に痛みに耐える。
やがて痛みは頂点に達しーー嘘みたいに消えた。
「えと，なにが…」
特に変わった様子はなーーいや，リーナが驚いた顔で、店員さんがどこか誇らしげに私を見てる。
とりあえず痛みで目尻に溜まった涙を拭おうと手を伸ばすとーー
ふさっ

ーーふさ？
そこでようやく手を見ると，その手は指先から肘までまるで動物のような毛皮で覆われていた。
いや，手だけではない。
よく見ると足も膝まで毛皮に覆われている。
そして，何かが手に当たった。
それは動物の尻尾のようでーーたどっていくとその根本は私のスカートの中に埋もれている。
そして何より，鏡に映った私の頭には動物の耳ーー猫耳が生えていた。
「いやー，想像通り！やっぱり猫獣人がぴったりだと思ったのよ！」
「えっと，何これ？」
「ん？私の知り合いの【研究者】が息抜きに作った物でね！せっかくのハロウィンイベントなんだからこういうのはできないかって相談したらパパッと作ってくれてね！ーーってどうしたのリーナ？かわいいと思わない？」
「いや，かわいいとは思うんだけどあまりにも予想外な方向に走ったからびっくりして…。えっと，桜，大丈夫？」
「…」
「……、……は」
「は？」
「……は、は、《灰を被ったお姫様》ッ！」
あまりの事態にパニックになって思わずいつものようにスキルを使ってしまい、灰雪がちらちらと舞い始める。
だがーー
「待って桜っ！ここ室内！」
そう、この時私は忘れていた。
ここが服飾店であり、多くのお客さんや商品があるお店だということを。
リーナの声に我に返り慌ててスキルを解除する。
しかし既に時遅く、お店や商品、他の店員やお客さんが灰に触れよ

うとしたときーー
「《病呪吸収》」
ーー空色の髪をして鳥の羽の髪飾りをつけた女の子が腕を振るい、灰の尽くがその腕に吸い込まれた。
幸いにも灰が触れた商品はなかったようで、私とリーナはホッと安堵の息をつく。
「えと、大丈夫、桜？」
「う、うん。びっくりしたけど。ただ、すっごく恥ずかしい」
「ーー待って、その格好反則」
顔を赤くしながらちょっと俯き猫耳を手で押さえるとなぜかリーナがそっぽを向いた。
今の格好がメイド服だったので完全なる猫耳メイドとなってしまっている。
「いやー，桜ちゃんいいわ！素晴らしい」
店の崩壊の危機だったにも関わらず店員さんはパシャパシャ写真を撮っている。
なんだかすごく恥ずかしくなってきた。
そんな店員さんに素面に戻ったリーナが訪ねる。
「これいつ治るの？」
「こっちの時間で一日経つか呪怨系状態異常を解除する薬で戻るらしいわ」
リーナと店員さんが猫化について話していると、さっきの女の子が近づいてきた。
年は十代前半くらいで、髪と同じ色の目は眠そうに半眼となっている。
髪は腰まで伸びていて、身につけている白のワンピースとのコントラストがとても綺麗だ。
「あ，さっきはありがとう」
「……うん」
「……」
「……」

会話が続かない。
なぜか私のことを凝視してくるので私もどうすることもできずにいるのだけどーーやっぱりさっきのことを怒ってるのだろうか？
「おい、なにやってんだルイア」
するとそのとき，女の子に声をかける男の人がいた。
私より少し年上くらいだろうか。
その男の人はハロウィンイベントで仮装に来てる人たちとは打って変わって，ちゃんとしたファンタジーの剣士といった感じの服装をしていた。
コートを着こんではいるものの雪国であるドライフでは不思議ではないーーどころか真っ当な格好をしていた。
（猫耳メイドと魔女っ子に比べれば大抵の格好はまともに見えるかもしれないが）
でも格好がまともな分ーー目の下にできたクマが目立つ。
そんな男の人はどうやらこの女の子と知り合いのようだった。
「…猫さん、愛でてる」
…いつの間にか愛でられてたらしい。
「…ルイア、そいつは猫じゃない。人間だーー多分」
…ほんの十分で人間かどうかを疑われる体になってしまった。
いや，九割この二人のせいだけど。
「ルイア、その子も困ってるだろ？こっち来い」
「…うん」
少し名残押しそうにしつつ私から離れるとトコトコと男の人の隣に行
く。
ルイアちゃんが側に来ると男の人も頭を下げる。
「あー、悪かったな。うちの〈エンブリオ〉が迷惑かけて」
むしろ助けられたのでお礼をしたいぐらいなのだがそれよりも気になる言葉があった。
「〈エンブリオ〉？」
「なるほど、この子はＴＹＰＥ：メイデンなのね」

いつの間にか猫化談議を終えたリーナがこちらの話に混ざってくる。
メイデンーー確か普段は女の子なのだが必要に応じてハイブリッド先の形態に変化する〈エンブリオ〉だ。
ガードナーと間違われることもあるがあれは人間じゃないし、人間のように見えてもその実別種族だったりするため差別化されてるらしい。
かなりのレアカテゴリーで実際に見るのは初めてだ。
「そうだ。ところでそれ、状態異常なんだろ？迷惑かけた詫びってわけじゃないが俺らのスキルで解除できるけどどうする？」
私達の話を聞いていたのか、それとも単なる善意か、そんなことを言ってきてくれた。
私は毛だらけのこの格好はなんだか落ち着かないので早く解除したいのだがーー
「非常に、非常に残念だけどしょうがないわね」
そう思いながらリーナを見ると，素面に戻ったおかげか懇願が伝わったのか，リーナも頷いてくれた。
「それじゃ、来い、ルイア」
男の人がそう言うとルイアちゃんが光の塵となって男の人の両手に収束した。
その両手には二本のククリ刀が握られていた。
ククリ刀はグリップの部分は普通の黒だが、刃の部分は半透明になっている。
「ダメージはねぇから」
「え？」
そう言いながら男の人は私に近づきーーククリ刀を突き刺した。
「ええ!?」
びっくりして男の人の方を見るがさっきの通り落ち着いてる。
簡易ステータスの欄を見てもＨＰが減ってる様子はなく、また私自身ダメージを受けた様子はない。
「…非実体武装」

リーナの声がやけに鮮明に響くなか男の人はスキルを宣言する。
「《リターン・ディスオーダー》」
途端に、私の体から何かが抜けていく感触があり、手足の毛が抜けていって、耳と尻尾も引っ込んだ
「そんじゃ、俺はこれで」
そう言ってあっさり店から出ていく男の人を見送りつつ、そういえば名前を聞いてたかったことを思い出した。
まあ、もう会うこともないだろうと気を取り直してリーナの方に目線をやるとーー
「ねぇ、他には獣人化の薬ないの？堪能仕切れなかったしもうちょっといろいろ試したいんだけど」
「猫化はあれだけね。ただ、犬化とウサギ化はあるわよ」
ーーそこには怪しげな交渉をするリーナと店員さんの姿があった。
「…言い値で買うわ。売ってちょうだい」
「私の方も残しときたいんだけど…。リーナちゃんはわかる子だしいいよ，売ったげる。その代わり今日の酒場ではリーナちゃんが奢ってね」
…聞かなかったことにしよう。

その後、結局魔女の服装選び、こっそり盛られた犬化の薬で犬獣人化したままハロウィンイベントを終えた。
お金もある程度溜まってカルディナ行きも大丈夫そうだが、ドライフでは《炎熱耐性》のアクセサリーは高かったため、カルディナに行ってから買うことにした。
そして、ドライフをある程度観光したあとでカルディナ行きの竜車に乗る日。
急に後ろから服の裾を掴まれた。
「え!?」
驚いて後ろを振り返るとそこには初日に助けてもらったルイアちゃんとルイアちゃんの〈マスター〉がいた。
「ああ、あんたらもカルディナに行くのか」

「う、うん。えーと」
「ああ、名乗ってなかったな。ウェグニだ」
「私は桜。えーとウェグニくんとルイアちゃんも？」
「ああ、俺らは元々カルディナが拠点だからな。ーールイア、離れろよ。歩きにくそうだろ」
　ずっと裾を掴んでるルイアちゃんをウェグニ君が嗜めるがルイアちゃんは動かない。
「…桜，好き」
「ええっ」
「いいから離れるぞ」
「あら，何顔赤くしてるの？」
「してないよ，リーナのバカ！」
「リーナ，嫌い」
「いい度胸じゃない」
「ルイアが悪いのは認めるけど《クリムゾン・スフィア》構えるのはやめてくれ。うちのメインウェポンが死ぬ」
　どこか騒がしい一行を見ながら，しかし楽しい旅になりそうだとなんとなくわくわくした。

??□???
月明かり一つない夜。
ここは、貧民が住み着くスラムであった。
金で全てが決定するカルディナにおいて、金を失った敗北者達。
気にする者も少なく、盗賊や乞食の溜まり場になっていた。
ーーそう、なっていた。

今はもう、そうではない。
スラムには二人の人間がいた。
辺りが暗いためその姿は判然としないが、一人は身長が三メートル

を超えているのではないかという大柄な男であり、もう一人はまだ成長期すら迎えていないような小柄な少女であった。

男の方は食べるものなど持っていないはずの両手で何かを鷲掴みにして食べているようであり、少女の方は死体を漁り値打ちのあるものを探していた。

「おいおい、これまた随分と派手にやったもんだな」

そんな二人にさらに現れた三人目の男が声をかけた。

男の姿もまた、暗闇で判然としないがロングコートにシルクハットを被っているようである。

「別にいいじゃん、ここの人たちは殺しても誰も悲しまないし、国も罪には問わないし、死体も綺麗に片付けるから文句だって言われないんだよ。それよりマッド、何か用？」

そんな、聞くものが聞けば吐き気を催すようなセリフを平然と吐いた少女は現れた第三者の男に声をかける。

「おうよ、パーティの始まりだぜ、リム」

また第三者の男ーーマッドは少女の方を向き、少女に声をかけるも、大男の方には見向きもしない。

また、大男も変わらず何かを貪っているようであり、少女もそれを気にはしない。

「へぇー、それで会場は？」

「オークションだ」

それは余人には意味不明な言葉の欧州であり、質問にすら答えられていないようであったが、変わらず会話は進んでいく。

「ボスからの指令だ。今回は〝光喰〟も参加するってよ」

「えぇ…。アディでぃんは根暗だから合わないんだけど」

「ま、今回は相手が相手だからな。死なない程度に楽しもうぜ」

もはや会話の程を成しているのか分からないーーお互いに好き勝手なことを言い合っているだけのようにしか見えないが、それに疑問を挟むものはいない。

さらに言えば、本人達の間ではたしかに会話が成立しているの問題ないのだろう。

「うん、そうだね、そうだね、そうしようか。それじゃ、行くよ。フラらん」

そして、最後に会話らしい会話をした後、彼らは静かになったスラムから立ち去った。

彼らが去ったスラムではもう動くものは何もない。

この後起こる大事件の未曾有の脅威が動き出したのを知らせる者は誰もいない。

ただただ血臭が立ち込めるだけであった。

第二章　死の行進
竜で魔女を釣る侍

??□【高位信仰者】雪姫　　桜

「や、やっと着いたぁ…」

「全く、なにやってるのよ。少しは学習しなさい」

暑さで完全にだれてしまった私にリーナが声をかける。

ドライフがあれだけ寒かったのもあり、私は完全にカルディナの暑さにやられていた。

ドライフでは《炎熱耐性》のアクセサリーをほとんど見かけず、見つけても躊躇うほどには高い値段だったのでカルディナで買うことにしていたのが完全に裏目に出てた。

【熱中症】などの状態異常はＨＰ回復では治せないため、リーナに冷却魔法を使ってもらいながらようやくここまで来れた。

「むむっ。桜どの。そんな風で決闘は大丈夫なのでござるか？それでは拙者が優勝してしまうでござるよ」

便乗したデュアルさんという〈マスター〉もどこか呆れ顔である。

歪なーーというより【シンデレラ】のスキル的にこういうビルドを選択するしかなかった私や純粋な魔法職であるリーナに対し，天地で決闘ランカーの下位に入ってた熟練の〈マスター〉だ。

この旅の間にそこそこ仲良くなって戦闘職の動き方とか見せてもらってたのだが、未だ前衛のジョブに就く気配すらない私にはどうやったらあんな動きができるのかさっぱりだった。

ちなみに、こんなに日本風な喋り方をしているが金髪のオールバックで完全に外人風の顔である。

リーナは気持ち悪がって半径１０メートル以内に近づくなと言ってた。

結構リーナは人見知りなので元からあまり人好きはしないタイプ

なのだが、残念ながら今回ばかりはリーナの気持ちが私にもちょっと分かる。
私も昔日本に住んでいたが、エセ侍を見るのは初めてかもしれない。

「決闘ってなんの話です？」

「むむ、桜殿達は決闘目当てでではなかったのでござるか？」

「この都市は競売都市って言ってな。数日後に大規模なオークションが行われるんだよ。それの余興として大規模な決闘大会が行われるらしい。優勝商品はオークションで扱う品を一品どれでも好きなのを選んでもらう権利だと。一級品は流石に選べないそうだが二級品でも十分でる価値はあるらしい。それ目当てで大勢の客や〈マスター〉が押しかけてるんだよ」

会話の途中でウェグニくんが割り込んできた。
彼ともこの旅の間にかなり打ち解けた。
ルイアちゃんとリーナは全く打ち解けなかったのだが、それはご愛嬌だろう。
…あれ、もしかしてリーナこの旅の間に誰とも打ち解けてない？
ーーいやいや、ウェグニくんとはそこそこ話してた気がするし、大丈夫のはず。

「なるほど、ウェグニ君もそれに出るの？」

「ちょっと気になるものがあってな」

そう言うウェグニくんの目はどことなく真剣だった。

「ほっほー、それではウェグニ殿とはライバルということでござるな。

桜殿はどうだ？参加なされては？」

途中で何度もウェグニくんやリーナに決闘を申し込んではめんどくさいと断られてたデュアルさんの顔が綻ぶ。

「んー、私は勝ち上がれない気がするので遠慮しときます。むしろそういうのに強いのはリーナじゃない？」

私の貧弱なステータスでは前衛職のスピードにはついていけない。決闘前からスキルを発動し続けてるわけにはいかないし、《灰を被ったお姫様》でも、状態異常耐性に特化した相手がいたらそれで終わりである。

ーーというか，ウェグニくんがまさにその状態異常特化なのでウェグニくんと当たった時点で終わる。

純粋にレジストされる可能性もあるだろうし、十中八九勝ち上がるのは無理だろう。

むしろリーナなら前衛職の多くは【ハルムート】で無力化できるし、大抵の状況はストックした魔法で対応できる。

亜音速も【観測者】の視力強化のスキルで見切れるだろうし，《詠唱》もストックしておけるため強力な魔法でも発動までに待機時間は必要ない。

優勝候補に名乗りをあげることも可能なんだろうけど…

「嫌よ、なにが悲しくて大衆に手の内晒さなきゃならないのよ。そういうのはいいわ、最近はジェムの収入もあるし欲しいものがあったらそれで買うもの」

そう、【高位観測者】がカンストしたリーナはお金稼ぎのために【魔石師】に就いている。

護衛の間も暇な時はずっとジェムを作り続けていたので、今のリーナの資産はちょっとしたものだ。

カルディナならドライフより売価は跳ね上がるだろうし、大抵のものは買えるだろう。
それ故、リーナは性格的なこともあって多分こういうのには参加したがらない。
「そんなリーナ殿に耳寄りな情報でござる。これを聞いたらきっとリーナ殿も参加すると言われるはずにござるよ」
「…なによ、情報って」
…リーナ、いくらデュエルさんが気持ち悪いからって私の背中に隠れないでよ。
二人に挟まれてる私が居心地悪いし。
「ふっふっふ、今回決闘での目玉とされてる商品の一つ。かの有名な亜竜級モンスター…」
亜竜級モンスターというところであれっと思う。
リーナの従属キャパシティは結構低い。
【ハルムート】に乗るために【騎兵】に就いてはいるものの、亜竜級を運用できるほどのキャパシティはないはずだ。
リーナが魔法職であることは格好からも明らかだし，デュアルさんだって気付いてるだろう。
そんなリーナに伝える亜竜級の情報っていったい…
「カーバンクルがオークションにかけられる予定でござる」
「出るわ!!」
その瞬間、リーナの決闘出場が決まったのだった。

◇

「わっ、なんだかすごく賑わってるね」

「カルディナで行われる大規模オークションだからな。盛り上がらない方がおかしい」

オークション自体もランクが別れているらしく、普通の人とお金持ち、そして超お金持ちの人のオークションが行われるらしい。

警備もかなり厳しく、そういうのに向いてない〈マスター〉も多数雇っているようだ。

私もＲＭＴ法がなければいい装備品とか買えるのだろうけど、あいにく今の手持ちは少ししかない。

ーーハロウィンイベントでそこそこ稼いだはずなんだけどな。

「それじゃ、私は受付してくるわ。桜はどうするの？」

とてもやる気になってるリーナだが、これは仕方ない。

そもそも、カーバンクルは戦闘用よりも鑑賞用としての価値が高く、戦闘力は亜竜級でありながら純竜級の数倍の値段がつくことも珍しくはないそうだ。

少なくとも私の全財産とは数個桁が違う。

…なんか言ってて悲しくなってきた。

一級品のリストに入っていてもおかしくないそうだが、流石に全てが二級品ではと、開催者が気を効せたのだろうということだった。

ジェムで稼いでるリーナでもこの【魔石師】に転職してからのこの短期間で、流石にカーバンクルを競り落とせるほどは稼げなかったらしい。

「結構並んでるし、出場選手絞ってるなら少しかかるよね？だったら今のうちに狩りでもしてこようかな」

【高位信仰者】ももうすぐカンストする。
ドライフに行って転職条件をクリアできるようにしてきたため，そうなれば晴れて【巡礼者】だ。
【巡礼者】になれば【シンデレラ】のデメリットも大幅に軽減できるようになるだろうから，噂になってる上級進化も恐らく耐えれるだろう。

「んじゃ、俺も付き合うよ」

「え？でもウェグニ君登録は？」

「俺はドライフの方でのクエストがあったから一時的に向こうに行ってただけで登録自体は済ませてあんだよ。それに…」

ウェグニ君の視線を追うとチェニックの端を掴んでるルイアちゃんがいた。

「…桜と、行きたい」

「そういうことだから、状態異常は俺らの方でなんとかするから連れて行ってくれ」

しばらく旅をした仲だしルイアちゃんには借金をさらに増やすとこだったのを助けてもらった恩もある。
状態異常をなんとかしてくれるというのなら別に断る理由もない。

「分かった。それじゃあ一緒に行こうか」

覗き込んだルイアちゃんの顔が少し綻んだ気がした。

先達者

??□【高位信仰者】雪姫　　桜

「…なに、あれ」

「…さあ」

とりあえず街からかなり離れた狩場まで来てここならそろそろ《灰を被ったお姫様》を使ってもいいかなと思ってた時だった。

どこからかドドドドッという地を震わすような音が響いてきた。

なにが起こったのかとそちらの方に行ってみると、たった一人の私と同い年くらいの女の子が砂漠を蹂躙していた。

女の子の背後にはいくつもの大きな光の輪が浮いており、そこからなにかが飛び出て音につられて地上に出てきたワームをひたすら殲滅している。

私のＡＧＩではなにが出ているのか判別がつかないくらい高速だ。

「あれ、なにが飛び出てるんだろう」

「砲弾、だな」

「砲弾？」

「ああ、多分。おそらく砲弾を飛ばすことに特化した〈エンブリオ〉を持ってるんだろうが、これ程とは」

よく見てみれば亜竜級や純竜級のモンスターもワームには混ざっているようだが、それすらも瞬時に殲滅している。

相当攻撃力は高いようだ。

「あの人もトーナメントに参加するのかな？」

「…少なくとも俺には勝機は見えねぇな」

多分、超音速は軽く凌駕している。

純竜級を容易く屠れる火力が何十発と一斉に飛来する殲滅攻撃。

決闘では自分も巻き込んでしまう可能性もあるだろうがもし火力まで調整できるのなら間違いなく優勝候補だ。

【ハルムート】で止められる数に限りがある以上リーナでも勝利を掴むことは難しいだろう。

「え？」

「は？」

そんな予想をしていた私たちに，突如光の輪のうちの幾つかがこちらを向いた。

明らかに剣呑な雰囲気を放ってるそれがひときわ大きく光りーー

「まさか…ＰＫ？」

「は，《灰を被ったお姫様》っ!!」

十を超える砲弾が私たちへと向けて飛来した。

ギリギリで展開が間に合った《灰を被ったお姫様》が砲弾を急速に【劣化】させ，その威力と速度を減衰させるが，砲弾の初期速度があまりにも早すぎて【劣化】が間に合わない。

ある程度は威力は弱まったもののどれでも十分な威力と速度を持った砲弾が私たちへと迫り，そういえばデスペナルティになるの久しぶりだなあと半ば逃避気味に考えているとーー

ーーギィィン

けたたましい音と共に予備のククリ刀を《瞬間装備》したウェグニ君が威力の弱まった砲弾をはじき返していた。
頭から足まで覆うフードマントを被っていて，それによって【シンデレラ】の灰を防いでいるようだ。
【アルノーツ】のような装備耐久値回復効果はなさそうだがとにかく頑丈に作られているようなので，これなら二分ぐらいは【劣化】にも耐えれるだろう。
「な，なんとかなりそう？」
「…この灰のせいで先に俺のナイフとマントの耐久値が尽きるな」
「じゃ，じゃあ《灰を被ったお姫様》を解けばーー」
「砲弾にやられて死ぬぞ」
言葉だけ聞いてれば随分と冷静に聞こえるが、ウェグニくんは大量の汗をかいている。
「そ、そうだ！この前ルイアちゃんが使ってた《病呪吸収》ってスキルは？あれならウェグニくん達も被害を回避できるよね」
「…あれは辺りの病毒系状態異常と呪怨系状態異常手当たり次第に吸っちまうから解除した時と結果が大差ないな」
……。
「じゃ，じゃあどうするの」
「今考えてるっつうの、静かにしろ！」

ここでデスペナルティになったら試合には間に合わない。
私はともかくウェグニくんは非常に困るはずだ。
【礼拝者】の制限で私は他者に回復魔法を使えない。
その分私はその恩恵に預かってるので文句は言えないのだが，こういうときにはその制限が恨めしくなる。
だが，私たちの警戒に反して向こうはそれ以上撃ってこない。
あるいは，何かあるんじゃないかとさらに身構えたところでーー

「ご，ごめーん。大丈夫ー？」

拡声器を通したような声が砂漠に響き，更なるワームを呼び寄せたのだった。

「申し訳ありませんでした、お怪我はありませんか？」

ワームを駆逐した後，近づいてきた女の子に深々とお辞儀をされながら，私は慌てていた。
見た感じ同い年くらいの女の子だ。
薄桃色の髪に袖口が軽く膨らんだレモン色のロリータを着ており、その容姿も相まって見るものに儚げな雰囲気を与えてる。
頭を下げられるという経験自体あまりないため、こういうときどうしたらいいかわからない。

「この辺りは人も来ないだろうと思って探査スキルに反応があったところを手当たり次第に撃っていたんですの。そしたらあなた達にまで打ち込んでしまって…」

「わ、私たちは大丈夫だったですから」

使ってるお嬢様言葉もちょっと違和感がある。

趣味でそういう言葉を調べたりした時期があったのだが、そのときの知識と照らし合わせても若干違和感がある。
まあ、全く違ってるわけじゃないんだけど
ーーというか、さっき普通の話し言葉で喋りかけてきてたよね？
あっちが素なのかな？

「驚いた、超級職ーー【砲王】か」

「まあ、初対面でいきなり看破とは礼儀がなっていないんじゃないでしょうか？」

「さっきロクに確認もせず砲弾打ち込んできてたよな？」

「…返す言葉もありません」

ここで、私も気になることがある。
さっきからちらちらと【砲王】さんが私の顔を見てくるのだ。
最初に私のことを見たときもなにか驚いた顔をしていたようだけど、顔になにかついてるのだろうか

「ところであの、随分お綺麗ですけどその顔はリアルのーー？」

「え？はい、あんまり変えてませんけど」

私のアバターは髪の色と目の色をいじったくらいで、顔はほとんど変えてない。
防犯意識が薄いって言われるかもしれないけど、リアルでも私のトレードマークは黒髪黒目だから、よっぽど親しい人でなければ私と結びつけるのは難しいはずだ。

「ーーたくっ、だから失礼はどっちだよ。桜も律儀に答えてんじゃ

ねーよ」

「失礼いたいしました、わたくしとしたことが淑女らしくない行動ばかりとってしまって」

「い、いえ全然大丈夫ですよ」

そもそもロレーヌ女学院はセキリュティがしっかりしてるからもしバレても大きな問題には多分ならない。

…厳しすぎて生徒からも文句が出るほどだし。

「ところで、ええと…」

そういえばまだ名前すら聞いてなかった。

こんなに早い時期に超級職に至っているのだから有名なのかもしれないけど。

「申し遅れました、わたくし、フィナラと申します。どうぞフィナとお呼びください」

「私は桜です、こっちはウェグニ君。それで、フィナさんもトーナメントに参加するんですか？」

「ええ，これでも近接戦には多少自信がありますので」

その外見と動きにくそうな服を見ればあまりイメージはつかないが、自信はありそうだ。

超級職に至っているという点を加味しても相当な実力者なのだろう。

「…俺，あんたとは当たらないように祈っとくよ」

「まあ，ひどい。あなたは出ないのですか？桜さん」
ひどいと言う割にはころころ笑ってる。
「私は，〈エンブリオ〉的に向いてないので」
「そうですか，それは安心しましたわ。では，わたくしはもう少し狩りを続けますので」
「あ，はい。トーナメント頑張ってくださいね」
「はい，ごきげんよう」

◇
それから私達もしばらく狩りをして、【高位信仰者】がカンストしてから街に戻った。
結局リーナは間に合わなかったみたいで、帰りはルイアちゃんがべったりだった。
…なんでこんなに懐かれたんだろう？

ちなみにウェグニくんはルイアちゃんを脇腹と足に挿しっぱなしにして【劣化】になる側から状態異常を吸収していた。
服に付与される【劣化】も吸収できるようだが、それだとそれ以外の防具は守れないので砂漠の中裸足でモンスターを狩り回っていた。
…炎熱耐性のアクセサリーつけてなければ火傷必至だったと思う。
さっきの砲撃の時もそれすればよかったんじゃ…と思って聞いてみたら「あっ」と言った後静かに目を逸らしてた。
あ、フィナさんといえば…

「ーーフィナさん，どうして私が出なくて安心なんだろう？」

もし戦うことになっても多分瞬殺される自信がある。
なんで私が出ない方がよかったんだろう？
「さっき砲弾が劣化させられるの見てたからそれでじゃねえの？」
「…そういうことなのかなあ」
一抹の疑問を抱きながら街に戻り、デュアルさんとしばらく二人っきりだったことによってメンタルが削られたリーナを慰めるのだった。

パレードの一幕

??◇【高位信仰者】雪姫　桜

「ええと，今日はみんなどうしようか？」

「というか，あなたたちなんでまだ一緒にいるの？」

リーナの視線の先には武器の手入れをしてるウェグニ君とボーっとしてるルイアちゃん。そして朝っぱらから元気良くお酒を流し込んでるデュアルさんがいた。

「俺は，ルイアが一緒にいたいって言うから」

「拙者は…なんとなくでござるな！」

「ーー今日も，桜と一緒にいたい」

「ーーああそう」

朝からすごく疲れた声を出してるリーナの肩を叩きつつ，私はルイアちゃんの方を向く。

「ごめんね，ルイアちゃん。今日は【巡礼者】に就く為に教会行って転職条件満たして来なきゃだから着いてきても多分楽しくないんじゃないかな」

「むぅ…」

少々不満そうにしつつもゆっくり頷いたルイアちゃんに安堵しつつ，ウェグニ君の方に顔を向ける。

「ウェグニ君，そういうわけだから…」

「ああ，こっちのことは気にしないでいいぜ。元々ルイアのわがままで着いて来させてもらってるんだし。それに今日は元々予定があったからな」

手入れの終わったウェグニ君は武器をアイテムボックスに戻しながらマップを出してその予定の場所を確認しているようだった。

「それじゃあ，私は魔術師ギルドに作ったジェム売りに行ってくるから」

一方リーナも今日は忙しいということは伝えてあったので，事前に予定を組んでいたようだ。

多分，あのアイテムボックス，ジェムがジャラジャラ入ってるんだ

ろうなと苦笑する。
「むむ，であれば拙者は今日はこの辺の酒場をうろついてることにするでござる。いやーやはりカルディナの酒は美味いでござるな」
「おっさん，いくらデンドロ内では病気にならないからって大概にしとけよ」
「朝から酒臭いのよ，近づかないで」
「あはは，ほどほどにしてくださいね」
すでに顔が赤くなってるデュアルさんにみんながそれぞれ言葉をかける。
「承知してるにござる，オークションで出る幻の酒を飲む為にも今日はちゃんと加減するにござる。ささ、ウェグニ殿もいっぱい」
「飲まねぇよ，俺は未成年だ」
いつもどおりの光景に少しほっこりしつつも，私とリーナは一足先に酒場を後にするのだった。

??◇

広場に出るとオークションや決闘を祝してか，賑やかなお祭りが行われていた。
楽団が美しい曲を演奏し，着ぐるみがあちこちを練り歩いてる。
中でもひときわ目立ってるのは中央でショーをやってる【大奇術師（グレイト・マジシャン）】だ。
手元に一輪の花を咲かせたかと思えば，それが大輪の花束に変化し，ついにはその花束から真っ白な鳩がたくさん出て，空へと飛び立っていく。
パレードのためか，随分と奇抜な服装をしていた。
男性にしては長く肩まであるベージュの髪を真っ赤なシルクハットで覆い隠し，金縁のモノクルをつけている。
服装も紫のシャツに白のロングコートとなかなか見ない格好をしている。
次のセットを用意した【大奇術師】が観客を見回しながら声を張り上げる。

「ここで，観客の皆さんの中から助っ人を募りたいと思いまあす。えーっと，それじゃあそこにいる箒に乗った魔女コスプレした子ーー」
魔女コスプレ？
それって，もしかしーー
「ーーの隣にいる銀髪の青いマフラーつけた君。どうぞ！」
ーー？

ーーーーーーーーーーーーー？
「え，私っ？」
「ほら，行ってきなさい」
突然のことに戸惑っているとリーナがどこか面白がってる目で【ハルムート】を起動させ，私を舞台上まで飛ばす。
空中浮遊で舞台に降り立った私に，観客が一斉に拍手をする。
「はい，それじゃあ名前とジョブを教えてください」
「え，えと，ゆ，雪姫　桜です。ジョブは【高位信仰者】」
突然のことでパニックになりながらもなんとか名前とジョブを言う。
「それでは，俺様のショーを手伝ってもらおうかな」
「は、はい。よろしくお願いします」

??◇
「「「わーっ」」」
大きな歓声の後にようやくショーが終わった。
空中浮遊で登場したためか心なしか私が指名される前より人が増えてた気がする。
観てた人は散り散りになり、【大奇術師】や私に握手を求める人達もいる。
断るのも忍びなかったので握手も済ませ、ようやく一息つけたところでリーナがこっちにきた。

「お疲れさま」
「ひどいよリーナ。あんな登場のさせ方して」
「うけたじゃない」
どこか得意げな表情で言うリーナになんと文句を言うか迷う。
「悪かったな、まさかああも盛り上がるとは思わなかった」
会話の途中で【大奇術師】さんが会話に参加してきた。
ステージ用にちょっと丁寧な口調にしてたのか、今は口調がさっきより砕けている。
「あんたら、途中からショーを見てたよな。ショーの序盤にも名乗ったんだが俺様はマッド・パーティ。【大奇術師】を貼ってるもんだ」
そう言って軽く腕を振ると，さっきのショーでやってたように手元に赤い薔薇が二輪現れる。
「こいつはアシスタントとして参加してもらった奴全員に配ってるんだ。せっかくだからそっちの魔女もどうだ？さっきのパフォーマンスはなかなか良かった」
「リーナよ、あなたこそなかなか面白い見せ物だったわ」
受け取った薔薇を胸元につけつつリーナが言う。
私も手に取ると薔薇は造花で裏にピンがあり、ブローチのようになっていた。
つけるとステータスが多少上昇する。
「あの、この薔薇って」
「ああ、装備すると軽くステータスが上昇する。あと【救命のブローチ】や【身代わりの竜鱗】等の身代わり系アクセサリーの破損確率を下げる効果もある。俺様が入ってるクランの鍛冶師が作ってるもんだ」

その言葉にかなり驚く。
身代わり系のアクセサリーはかなり高い、おまけに消耗品だ。
ティアンの人にとっては命綱でもあるため高いのはある意味当たり前なのだが、それ故にアクセサリーの損耗を抑えれるこれはかなり高いはずだ。

こんな風に配っていいようなものじゃない。
「すごいじゃない、そんなのもらっていいのかしら」
「そいつはいわば装備品としては失敗作みたいなもんでな。対象のアクセサリーの近くにつけてないと効果が見込めない上に三、四日もしたら枯れて壊れるんだよ」
なるほど、それなら確かに配ってるのも分かる。
人に配るだけあるってことはそれなりに数があるのだろうが、そんなにあってもアクセサリー欄が足りる訳もなく、おそらくクランで消費できる量を超えていたのだろう。
おまけに三、四日で壊れるなら保存しといて後で装備みたいなこともできない。
ならば協力してもらった人に配ってしまい、役立てようということなわけだ。
私は金欠で身代わり系アクセサリーなどの高い装備品はまだ買えないが、リーナはジェムで荒稼ぎしてたこともあり、【救命のブローチ】はつけている。
しばらくは決闘のためデスペナルティになるようなダメージを負うこともないだろうが、それでも有用だろう。
私も【アルノーツ】と炎熱耐性のアクセサリー以外に装備しているアクセサリーも特になかったため装備しておくことにした。
「んじゃ、俺様は次の予定があるから。協力サンキューな」
「はい、ありがとうございました」

??◇

「どうしたの、リーナ」
マッドさんと別れた後ずっとリーナは黙りこくっていた。
考え事をしているときやなにかに集中しているときは珍しくもないのだが、さっきのショーまでは普通にしゃべっていただけに気になる。
「いや、気のせいだと思うのだけど。さっきの【大奇術師】、なんだか妙なこと言ってた気がして」

…そんなこと言ってたっけ

私もリーナも《真偽判定》は持っていないため嘘の区別はできないからマッドさんが嘘をついててもわからない。

「あ、でもこの薔薇はすごい効果だしなにか秘密なことがあるのかもよ」

「ならいいんだけど」

リーナはどこか引っかかってるようだが、結局それは形にならないようだった。

Ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ

レストランの二幕

??◇【大侍】デュアル

桜がステージに祭りあげられ慌てているころ，

呑んだくれていたデュアルは数件目の店に入るとこだった。

ここまで飲んでいると明日の決闘は大丈夫なのかと不安になるとこだが，最悪ウェグニに状態異常を吸収して貰えばいいと割り切っておりいつも以上に飲んでいた。

「たのもーにござるー」

いろいろ間違っている気がしなくもない日本語を使いながら入った店ではなぜか人だかりができていた。

人だかりの中には大声で騒ぎ立てている者もいれば写真を撮ってる者もいる。

覗き込んでみるとその中心には二人の女の子がいた。

「すげぇ，あと少しで全メニュー制覇だぞ，格好は変だけど」

「まさかあのシフォンちゃんに並ぶ女の子がいるとは，格好は変だけど」

「まじですげぇ，どうやったらあんな小さな体にあんな量入るんだ。格好は好みだけど」

一人は黒髪を二つお団子にしてくくり，魔改造したチャイナドレスを着ている。

袖口を大きくしてミニスカにし，各所にフリルをあしらったいろんな意味で凄そうな服を着た１０歳くらいの女の子。

年相応というかなんというかフォークとスプーンを使ってほっぺをリスのように膨らませながら一心不乱に食事を掻き込んでいる。

その胸元には一輪の薔薇が光っていた。

そしてもう一人はその子よりもよほどに顕著だ。

七歳か八歳に届くかどうかという身でありながら，衣類を一切身につけず，代わりに包帯を体に巻いている。

それがミイラ男のように全身に巻いているのかといえばそうではなく，頭や腕や片足，胸や腰などの要所に巻き付けてあるだけで，そ

れ以外は露出している。
まだ成長期すら迎えてないような女児であるだけにそれは魅惑ではなく異質な格好として映る。
先日あったハロウィンイベントから装備を変えていないのであろうか。
こちらはシフォンとは対照的にフォークとナイフを使って静かに食事をしていた。
まるで上流階級のお嬢様のような綺麗な食べ方であるにも関わらず、食べる速度はシフォンとほとんど変わらない。
汚れやすそうな包帯も真っ白なままであった。
そしてさらに目を引いてるのがその二人の隣にうず高く積まれた皿の山。
よほどにいいバランスで立ってるのか，その皿の間にはカップや器まであるにもかかわらず，揺れることなく積まれている。
少女たちの背を足してもまだ高いであろう皿の山は一つの推論を成り立たせるのに十分だった。
それはーー
「まさか，あの二人が食べたのでござるか」
「ああ，メニューの端から全部。もう三時間以上も食ってんぞ。しかもあの二人が一緒に食べてるわけじゃなくて，それぞれ，端から端までだ。すげぇよ，シフォンちゃん以外にもあんな子がいるなんて」
少女たちを囲んでた男の一人が教えてくれる。
「シフォン？」
「中国服のあの子だよ。カルディナのいろんなとこで大食いをやってる女の子でな！一種のアイドル的存在なんだ」
その言葉にデュアルもどこかで聞いた噂を思い出す。
一度とある店を壊滅させたことがあり，それ以外でも店の食料庫から食材を喰らい尽くしてしまうということで数多の店から恐れられてる天災児。
「あの〝食いしん暴〟でござるか」
「ああ，食事の邪魔だけは絶対するなよ。…死ぬぞ」

最後のはガチだった。
なるほど，一人の素性は分かった。
となると，気になるのは
「もう一人の方は？」
「突如現れた謎の女の子だよ。シフォンちゃんと友達ってわけでもないみたいだし」
「握手とかさせてくれねぇかなあ」
レジェンダリア内外で噂になりつつあるあのクランから来たのかもしれない男はファンらしい何人かに店の外へ連れて行かれた。
なんとなく面白かったのでデュアルも人混みに混じって野次馬の一人と化す
そしてわずか十分後，二人は同時にスープをすすり終わり，店のメニューを完食した。
「すげぇぇ！」
「シフォンちゃんこれで二十四軒目制覇だぞー!!」
「あの子，あの子は何者なんだ！」
騒然となる店の中で，紙ナプキンで口元を拭ったあと手を合わせてごちそうさまをしてからシフォンが包帯の女の子に話しかける。
「すごい食べっぷりだったのですう！私以外にこんなに食べれる人は初めて見ましたあ！」
食べてる時の寡黙な様子とはうってかわって興奮して腕を振り回しながら話しかけるシフォンに対し
「私もだよ，シフォンちゃんってばすごいね」
包帯の少女は食事のときと同じく優雅にコーヒーをすすりながら答える。
「ぜひ，フレンドになってくださいい！こんな機会は滅多にないのですう！」
見た目の年齢は逆であるはずなのだが，手をブンブン振り回しながら興奮してる女の子と，食後のコーヒーをすすりながら落ち着いて話してる女の子では随分ギャップがあるように見える。
ところで，この高く積まれた皿を店員はどうやって片付けるのでご

ざろうかとウェグニが益体も無いことを考えていた時，
ーーーーッ!!
突如，店が凍りついた。
否，そう錯覚しただけだ。
反射的に後ろに飛びずさりながら腰に展開した〈エンブリオ〉の柄に手をかける。
店に入ってきた大男の威圧感に先ほどまで大盛り上がりだった人々までおしゃべりをやめて凍りついている。
それほどに男は異常だった。
二メートルを超える身長にボロボロのローブとパンツを纏っているだけであり，フードを深くかぶっていてその顔はよく見えない。
その体に詰め込まれた筋肉は目を引いた。
だが，それよりも注目を集めているのはその男の肌の色だ。
灰色がかった黒であり，リアルではあり得ない肌の色，人々は戸惑い，中には【恐怖】の状態異常を発しているものもいた。
だが，そんな中で大男にしゃべりかける者が一人いた。
「あ，フラらん。もうお食事は終わったの？」
「……」
「そう，こっちも終わったよ。それじゃあいこうか」
知り合いであるのか、はたまた異様な格好をしてる共通点故か、少女は男に臆せず話しかける。
しかし男からの返答はない。
だが、その少女は聞こえてないはずの声を聞いているようであった。
そして飲み終わったコーヒーカップを皿の上に投げ上げて女の子は席を立つ。
その異質な雰囲気に誰もが飲まれて言葉を発するどころか動くことすらできない。
二人が店を出て行こうとした時ーー。
「待って欲しいのですう！フレンド登録してくださあい！」
その大男の雰囲気にも飲まれず先ほどと同じ調子で言葉を投げか

けた者がいた。
元気よく手を挙げたシフォンが女の子へと話しかける。
「ーーうん，いいよ。私はリムル・スローター」
「シフォンなのですう！また今度会ったら一緒にお食事しましょお！」
そして店の異様な雰囲気を意に介さず二人はフレンド登録を終え，リムルと大男は店を出て行き，シフォンはお勘定を払いに金貨の数を数える。

やがて緊張が解けたものからザワザワと話し出す。
そんな中、店の中であの大男の脅威を正しく感じとっていた一人であろうデュアルは、柄から手を離せないまま冷や汗を流していた。

市長邸の三幕

??◇【双剣鬼】ウェグニ

「それではこちらでおまちください」

「わかりました」

一方その頃，ウェグニは市長邸に来ていた。

元々，彼は今回のオークションや決闘に参加する気は無かった。

それをとある依頼が舞い込んだため，その調査と回収にきたのである。

価値がわかりづらいもののため、どのオークションに選別されるか直前までつかめなかったが、ようやく今日になって最高位のオークションの目玉商品となってることがわかったた。

そこで仕方なく交渉に来ているのである。

出された紅茶をすすること十分，ようやく市長が姿を現した。

カルディナの商人ではよく見受けられる肥満体の男であり，身につけられた高価な装飾品がジャラジャラと音を立てている。

そして鎖を通して首輪でつながれた女性が何人か，淀んだ目で後ろに佇んでいた。

市長がジロリとウェグニの方を見て、あからさまに見下した顔をする。

「なるほど，貴様か。今回の目玉商品を売れというのは」

話の最初から不機嫌そうな市長に望み薄そうだと感じながらもウェグニは交渉を始める。

「ああ，そいつは危険な代物だ。どうにかこちらで引き取らせて頂きたい」

「話にならんな。今回のオークションはその商品を見たいがために来ているものもいる。こちらとてあれの危険性は十分に承知だ。厳重に管理もしている」

「それでは甘いと言っているんだ。せめて俺に処置をさせてから売ってくれ。それでも十分金になるはずだ」

ウェグニとしては価値が分からず下位のオークションに出される

か、ある程度の価値が認められて中位のオークションに出され、決闘で手に入るというのが一番楽なパターンだった。
次善が市長が商品の価値をしっかり見極めており、交渉でウェグニ自身が対処できるパターン。
だが、最も厄介なパターン。
市長が中途半端に目利きであり、なおかつ危険度を正しく認識していない場合。
このパターンであるためにウェグニは目的を果たすのが限りなく困難に近づいていると感じる。
話ぶりから特定の客層には情報を流していたようだが、ウェグニもウェグニの雇主もその情報を事前にキャッチすることができなかっただけに、後手に回ってしまっている。
そもそも目的物がこのオークションに流れ込んだらしいと判明したのがほんの少し前であったために情報を探る時間はほとんどなかったのだが、それでも今回はそれが手痛く響いている。

「断る。お前が商品を持ち逃げしない保証はない。それに価値とて下がる」
丁度最近、指名手配をいとわない〈マスター〉が希少な従魔を持ち逃げした事件が発生したため、〈マスター〉への依頼に不信感が増してる時期だった。
だが目の前の市長は本当にウェグニの持ち逃げを心配してるわけではなく、ただ単に断る口実として使っているだけだ。
ウェグニもそれが分かってるが故、互いに不機嫌な雰囲気を隠そうともしていない。
交渉は険悪な様相を呈し始める。
「なら，俺をオークションの護衛として雇ってくれ。それならいざという時に対処もできるし売れた後は買ったやつのとこへ交渉に行く」
「必要ない。警備は万全だ」
ウェグニとしては譲れる最低限のラインだったのだがその申し出すら市長はあっさり却下する。

実際、オークションに向けて〈マスター〉の警備は数多く雇われている。
だがそれは中位と下位の警備、あとは会場の外に当てられており、肝心の上位オークションの中にはティアンが雇われている。
確かにログアウトせず契約を無視しての盗難の可能性が少ないとはいえ、より高価な物品が集まるオークションではいささか以上に警備が手薄となってる感覚は否めない。
だが、市長はそれでも問題ないと考えており、その表情は絶対の自信を持っているようであった。
市長がティアンばかりの警備でもそれだけの自信を浮かべてられる理由。
それはーー
「ーーそれは，超級職を奴隷にしてるからか？」
ウェグニの言葉に下品な笑みを浮かべる。
そう，彼が答えた通り彼の後ろに佇んでいる女性の一人は超級職だ。
奴隷のほうは狼狽した視線を向けるが市長のほうは動揺すらせず言葉を続ける。
「ほう，気づいたか。一応隠蔽のアクセサリーは付けさせているのだがな」
「本人のステータスをいくら隠蔽したとこでそれについてる首輪が隠せてなくちゃ意味ねぇよ。そんな厳重で強制力の強い首輪を使うのはカンストしたやつか超級職だけだ。そこまでしぼれれば経験則で大体判断できる」
〈Ｉｎｆｉｎｉｔｅ　Ｄｅｎｄｒｏｇｒａｍ〉には【生贄】というジョブは存在すれど奴隷というジョブは存在しない。
ではどうやっていうことを聞かせるのか。
その答えが首輪である。
この首輪は所有者の意思に呼応して閉まるようになっており，また事前に魔力を込めておけば直接命令して行動を強制することもできる。

高価になるほど複雑で強制的な命令が可能となり，ＥＮＤ特化の上級職を奴隷にするときなどはこの首輪が好まれる。
超級職の女性がつけてるのはその中でもひときわ高価な代物だった。
「なるほどな，では次からは幻影のアクセサリーもつけさせることにしよう。だが，そこまでわかってるなら話は早い。おい，お客様がお帰りだ」
市長の言葉とともに奴隷が前へと出る。
その手には大型のマスケット銃を《瞬間装備》しており，装備も《着衣交換》によって先ほどのみすぼらしい姿から変化している。
高価な物品の集まりやすいこの都市なら，最高品質の装備やオーダーメイドの武具も容易に手に入るだろう。
はっきり言って分が悪い。
ルイアは未だ第四形態であり，ウェグニ自身もカンスト未満。
ジャイアントキリングを特性とするメイデンではあるものの当てれなければ意味がない。
超級職の隔絶した戦闘力は昨日ウェグニも体感しており，どんな性質を持つかも不明な相手との真っ向勝負は避けたいところであった。
だが，ウェグニにも勝算が全くないわけではない。
一つは当てれば勝てるというルイアの特性。
当たる場所は致命部位である必要すらない。
偶然だろうと何だろうと，ルイアが体のどこかに当たればその時点でウェグニは勝利できる。
部位欠損で戦闘力を大幅に削ってもいいし，制限系状態異常で動きを封じてもいい。
超級職であればレジストされる可能性もあるが，最悪桜の【劣化】であれば状態異常は通るだろう。
本来であれば自身にも降りかかる無制御の灰であるが，ルイアの手にかかれば自身の安全性を保障した上で無制御ゆえの大出力である【劣化】の状態異常を扱える。
そして勝算はもう一つーー。

その二つを天秤にかけながらウェグニは考える。
ここで事を荒立てででも強引に目的の物を回収するべきか。
〈マスター〉であればデスペナルティになっても三日後には戻ってこれるが，それではメインイベントである目的物は売れた後であり，回収は困難だろう。
黙りこくって動かないウェグニに市長が苛立ったのか舌打ちをして

「ーーちっ，おい，ころ」
「分かった。大人しく帰ることにする。あんたもその銃降ろしてくれ」
両手を上げて言った言葉に即座に銃が下され，控えていた侍女が扉の外へと俺を促す。
扉が閉まる直前にふと見えた超級職の女性の顔。
その顔は昏く淀んでいた…。

転職騒動の四幕

■□教会　【高位信仰者】雪姫　桜

【巡礼者】の転職に来た教会は王国の教会に比べてかなりきれいだった。

きちんと掃除され，建物にかけられた効果も高く，アイテムも【司祭】用のものだけでなく【医師】用のものも揃っている。

そして壁に掘られたレリーフや置かれた石像には宝石が付いていた。

「噂通りね…」

「うん…」

〈Ｉｎｆｉｎｉｔｅ　Ｄｅｎｄｒｏｇｒａｍ〉では宗教というものはあまり一般的ではない。

二千年前の先々期文明の崩壊時，数多ある宗教は失われ，信仰の対象として残ったのは【神】シリーズを初めとするジョブに根付いた宗教か，天罰神のみだ。

アルター王国の国教もこれは同様で、名もなき宗教として、「ジョブの力を使い人々を救います」という緩やかな教義の元傷つく人への回復魔法や戦いに向かう人への支援、祝福が行われる。

通称，ジョブ教やクリスタル教などの名前で呼ばれる宗教で，私が回復魔法で教会のお手伝いをしてた時に【司祭】のお姉さんーーホホンさんが話してくれた。

また新興宗教として〈月世の会〉という宗教もあるらしいが…これは今は置いておく。

反面、カルディナの教会は宗教施設という側面よりも医療施設という側面の方が強い。

治療に多くの金を取り、富裕層しか高位の治療は受けれない。

ティアンのレベルが低いカルディナでは上級職の【司教】の治療を受けるだけでも最低百万リルもの大金が必要だ。

さらには司祭系統のクリスタルも厳重に管理されている。

【司祭】になるだけでもコネが要り、それがなければ法外な金を払わな

いとクリスタルを見ることすらできない。
つまり、何が言いたいかというと…
「高すぎるでしょ！いくらなんでも法外すぎるわよ！」
「そう言われましてもこちらも規則ですので」
【巡礼者】の転職にーー一千万リルもの法外な金を請求された私達は、教会の受付で押し問答していた。
「【巡礼者】の転職条件の百倍の金額じゃない！どんだけぼったくるつもり！」
「〈マスター〉の方々なら払えない金額ではないはずですが？」
「それでも高いわよ！純竜の最低相場じゃない！」
リーナが机に手を叩きつける。
激怒するリーナに受付の【司祭】は澄ました顔で応対している。
でも、私も叫んでないだけでリーナと同じ気持ちだ。
【礼拝者】の転職条件と同様【巡礼者】も転職条件に教会への寄付がある。
その額は十万リル。
【聖騎士】の転職条件の半額だがそれでも安くはない。
そもそも、【巡礼者】というジョブ自体が【聖騎士】を比較に挙げられる程度には難しめの上級職である。
そう考えれば転職で十万リル必要なのはかなり多い方だ。
だが、それをこの教会では一千万リルで支払えと言う。
桁が違うにも程がある。
しかもそれはカルディナだから転職条件が変わってるというわけではない。
単にこの教会で転職したいなら一千万払え、という受験料の話だ。
物価が高いカルディナでも殊更高く、しかもそれが〈マスター〉だけというのが、リーナが激怒してる理由だ。
大体私は転職のために必要な十万リルだって昨日のウェグニ君との狩りでようやく貯めたのだ。

その百倍を要求されても持ち合わせがあるはずがない。
恐らく司祭系統の希少性を高めるため、万能の才を持つ〈マスター〉には就かせにくくしているのだろうが、それにしたって高すぎる。
その上…
「あの，司祭系統に就職させにくくしてるのは回復魔法の希少性を損なわないためですよね？それなら【巡礼者】はあまり関係ないのでは？あれってリジュネ特化の上級職ですし」
【巡礼者】は【司教】ほど他者の回復にができるというわけではない。
【巡礼者】は下級職である【礼拝者】と同様にリジェネ特化。
一応他者への回復魔法や聖属性スキルを覚えたりもするが，その本質は自己回復。
同じく回復魔法を使う上級職である【司教】であれば，他者への回復に呪怨系状態異常や傷痍系状態異常に回復力アップの効果が付くし，他者への支援も飛ばせる。
対して、【巡礼者】にはそれらが一切ない。
治癒力アップの効果はつかず、他者への支援もできない。
私の場合は【高位信仰者】で治癒力アップの欠点は補っているが，それでも他者を治療する時には治癒力アップの効果はつかないし、他者への支援もできない。
詰まるところ【巡礼者】は一人用のジョブであり、他者への支援という点で【司教】に大きく劣る。
多少【巡礼者】の人数が増えたところで、【司教】の価値が落ちるとは思えない。…が
「一度〈マスター〉にＯＫをしてしまうと他の〈マスター〉もＯＫしなくてはなりません。それにこちらとしても困っているんです。【司祭】についた〈マスター〉に偽善で行き倒れや孤児に回復魔法をかけられて、自分たちも治療しろと言ってくるものが後を断たず…。そういう勝手をされないためにも、紹介か一千万リルーーああ，【巡礼者】でしたらプラスで十万リルですね。それらの寄進は必要となります。それができないのであればお引き取りを。迷惑です」
「なっーーー!!」

「【巡礼者】の寄付は別枠なんですか⁉？」
「ええ，当然です」
受付の【司祭】は口調こそ丁寧であるが…見下すような態度であっさりそう言った。
…どうしよう。
まさかここまでとは予想していなかった。
リーナに貸してもらうにしてもリーナも出せる上限は百万程度だと言っていた。
かといって今からドライフに戻るわけにもいかない。黄河が目的地なのに引き返すのは遠回りにも程がある。
だが、これから先のカルディナの教会施設は似たようなものだろうし、黄河まで行ってしまえば司祭系統のクリスタルがなくなる。
つまり、どうしてもここで【巡礼者】には就いておく必要がある。
「…私がここで働いた場合、あなたからの推薦を受けることは可能ですか？」
できればカルディナの商人と関わるのは嫌だったが、一応用意していた選択肢を提示する。
激怒するリーナの目に、一瞬心配そうな感情が横切った。
だが…
「可能不可能で言えば可能です。ですが、あなたはそのレベルではない。うちは【礼拝者】のような低レベルの回復魔法は扱っていないので」
「このっ…転職はさせないくせに偉そうに」
リーナの眉が吊り上がる。
そろそろリーナが我慢の限界だ。
ここは一度出直してクエストを受けて地道に一千万稼ぐか夜中に忍び込むかを検討するべきかとそう思い始めたとき。
「もしもし、少しいいですか？」
「はあ、なにか？」
「そんなに邪険にするものじゃないですよ。カルディナの議長は〈マスター〉融和の政策を推し進めてますし。あなたもそうしてみては

？」
着物を羽織った女性が不意に現れて，受付の【司祭】に囁きーー。
「何ですかあなた？いきなりしゃしゃり出て…ええ、そうですね。雅様の言う通りです。あの、お名前は何と言いましたか？」
気持ち悪いくらいに愛想の良くなった【司祭】が話しかけてきた。
「えっ、雪姫　桜ですけど…」
「雪姫様ですか。わかりました。どうぞご案内いたします」
あまりの態度の代わりように怖くなって原因であろう着物の女性の方を見る。
見ると着物の女性は袖で口元を隠しながらクスクス笑っていた。
不思議な女性だった。
着ているのは黒に紫やピンクで花が描かれた着物だが，その着物は着崩されており肩や脚が露わになっている。
こんな女性が教会にいればものすごく目立つはずなのに，私は彼女が受付の【司祭】に声をかけるまで全く気づかなかった。
「あの、今、何か？」
「ああ、すいません。同郷だったので手助けしたくなってしまって」
私の質問に着物の女性ははんなり笑いながら答えた。
「同郷？」
「お名前，リーナさんと桜さんですよね？日本人っぽい名前だったのでつい」
そう言いながら彼女は簡易ステータスウィンドを見せてくる。
ネーム：天上　雅
ジョブ：【花魁】
「【花魁】？」
聞き覚えのないジョブだ。
「【花魁】は東方の【傾国】のような超級職です。主なスキルは【魅了】のサポートですね」
なるほど、それで受付の【司祭】を【魅了】したのだろう。
精神保護がなければ〈マスター〉もああなるのかもしれない。
あと、気になることがもう一つ。

「すごくスケール大きい名前ですね」
「自分の名前に姫なんてつけてる桜は人のこと言えないわよ」
素直すぎる私の感想にリーナが脇腹を突いてくる。
「いえいえ、天地にはもっと大きな名前の〈マスター〉がいるそうですから」
より正確に言えば桜と雅は年齢高くなってからつけたことを後悔する名前である。
所謂若気の至りというやつで、天地にいるより名前の大きな人達はそういうのとは関係ない。
近さで言うなら後に天地からアルター王国に行き、王国色に染め上げられるプリティー剣士だろう。
閑話休題。
ともあれ、同郷と言っていた意味はわかった。
私は名前を漢字にしているし、リーナはカタカナだから出身は日本だと思ったのだろう。
だが、私はフランス人のパパと日本人のママのハーフだ。
昔日本にいたときにママに教えてもらった漢字を流用しているからそう見えても無理はないが。
若干コントを挟みつつも一応、誤解は訂正する。
「あの，私は昔日本に暮らしてたことがあるだけで日本人じゃないです。国籍もフランス人ですし。リーナは日本人ですけど」
「あらこれはご丁寧にどうも。でも困った時はお互い様ですし。私もそこの人の言い分にはムカついてましたから。ちょっとした意趣返しです。スキルの効果が切れちゃわないうちにクリスタルに触ってきてください」
そう言って、雅さんは教会の奥を手で指す。
「はい，本当にありがとうございました」
その後、【司祭】の人の変わりようが凄すぎて転職条件の十万リルすら受け取ってもらえなくなりかけたが…どうにか転職することができた。
【巡礼者】となって受付に戻ってきたときには、雅さんはどこかに行っ

たのか教会にはいなくなっていた。

To be continued

【超銃兵】

??◇【巡礼者】雪姫　桜

昨日、リーナに付き合って帰ってジェムをギルドで売った後に宿に帰ったら、なぜかウェグニ君がすごく不機嫌そうで、デュアルさんはとても興奮した顔でお酒を煽っていた。

あまり刺激するのも躊躇われたので気づかれないうちに回れ右してレベル上げや【巡礼者】で覚えた聖属性スキル、浄化スキルなどを試した後一度ログアウトして諸々の用事を済ませていた。

…ちなみに、レベルは昨日の三時間もない狩りで二一まで上がった。

【シンデレラ】は収入も少ないし使い勝手も悪いのに殲滅能力は高いせいでやたらレベルは上がりやすいのである。

(回復魔法もやたら使うので回復魔法のスキルレベルもぐいぐい上がる)

レベル上げできる環境が限られるせいでアルターからカルディナまでロクにレベル上げできていなかったができるようにならば早い。

私としては上級進化したときに上級職の回復力でダメージを抑え込めることを祈るばかりだ。

第四形態は大丈夫だと思うけど、第五、第六はちょっぴり不安がある。

流石にこれ以上ビルドを回復力の強化に当てたらまともな戦闘が出来なくなる。

〈エンブリオ〉はスキルが増えれば大して出力は上がらないとリーナが言っていたのに、下級の間は進化する度にスキルを覚え出力も順調に上げていたのが【シンデレラ】である。

この先の出力がどうなるかなど予想もつかない。

一度、私以外にも敵味方構わず吹き飛ばす〈エンブリオ〉を見てみたいのだが、流石に最終安全ラインとして自分は対象外となっているものがほとんどだ。

リーナやデュアルさんもここまでネジの外れた〈エンブリオ〉は見

たことがないと言っていたし、やはり〈マスター〉ごと自爆する〈エンブリオ〉は珍しいらしい。
まあ、来年の話をすると鬼が笑うと言うし、【巡礼者】のレベルもカンストしてない内に第六進化の話をしてても仕方ないだろう。

そんなわけで次の日。
今日はこの都市ーー【レファノンダム】のバザーを巡っている。
明日決闘が行われると同時にオークションも行われることになっており、その影響で商人が数多くこの都市に集まっている。
その商人達がオークションで出品されなかった品物や、元々ここで売る予定だったものを置いて店を構え、王国のバザール以上の賑わいを見せていた。
イベントに備えての戦闘職用の装備だけでなく、普通のアクセサリーやマジックアイテムも売っている。
ちなみに私は戦闘用の装備やマジックアイテムは買ったことがない。
【劣化】耐性の装備は大抵装備品に付与されてるものだから私自身の身は守れないし、それなら教会を手伝ってるよしみで安く手に入れられる【巡礼者】用の服の方が調達しやすかった。
【劣化】耐性ついてないーー否、付いてても中途半端な耐性だったら壊れる装備品をわざわざ買う気にならなかったのである。
それにリーナと会うまで私の戦闘とは散歩とイコールだった。
なんせ歩いてるだけでモンスターが逃げ、あるいは寄ってきて力尽きるのである。（気づいてなかったが恐らく〈マスター〉やティアンも）
【劣化】なんて装備品にかける耐性をわざわざ持ってる物好きなモンスターがいなかったことも大きい。
第三に至った頃には純竜クラスもさして苦労せず倒せていたし、ビルドがそもそも生存特化。
むしろ進化直後の調整ミスで自滅したことの方が多い。
特に回復魔法の圧縮技術を覚えてからは、調子に乗って使いまくっ

てたときに回復位置と濃度が《灰まみれの日々》とズレることが頻発した。
そういう意味では【アルノーツ】が初めて〈Ｉｎｆｉｎｉｔｅ　Ｄｅｎｄｒｏｇｒａｍ〉でまともにやった戦闘と言えなくもない。
初戦闘が〈ＵＢＭ〉だなんて珍しい話もあるものだ。
話が横道に逸れた、戻そう。
ともあれ、戦闘用の装備は買ったことはないが、普通の服やアクセサリーを買いにバザールを回ったことはある。
王国で最も賑やかと言われるギデオンや、交易品で多種多様なものが並ぶキオーラにも行ったことはある。
だが、それを加味してもこの街のバザールは広大だった。
ギデオンやキオーラの十倍はあるのではないかという土地に、所狭しとテントが貼ってある。
さらにそのテントに空間拡張機能が付けられており、見た目の面積よりもさらに大きさが膨れ上がるのなら確実に私が今まで見たどの街よりも大規模なバザールができている。
さらに売られてるものも多い。
カルディナ第二の都市のコルタナと西方三国の中間地点にあるからだろうか。
マジックアイテムや機械製品、墓標迷宮のドロップアイテムや海のものと思われる貝殻や魚、遺跡からの出土品まで並んでいる。
欲しいものならなんでも揃うと言われるカルディナでも、さらに交易に特化した街が、この【レファノンダム】である。
「なんでこんなに大規模なバザールができてるの？」
「なんでも街の成り立ちに関わってるそうよ。まあ、ここまで商人が揃ってるのは平行して開催されるオークションのおかげでもあるらしいけど」
今回リーナやウェグニ君達が参加する決闘の話もそこから派生したものらしい。
後でちゃんと聞いとこうと頭の片隅にメモしつつ、とにかく今日はショッピングを楽しむことにする。

【レファノンダム】は居住区、第一商業区、第二商業区、ギルド区、そして都市の真ん中に競売場と分かれた構図になっている。
商業区が二つに分かれているのは、第一商業区の方がちゃんと建物で商売が行われてる店が集合している土地なのに対し、今私たちがいる第二商業区ではこんな風に一日ごとにテントが張られ、ラインナップやお店すら変わる。
第一商業区に店舗を出してるお店は一定以上の税金をある程度の期間納めなければならないけれど、第二商業区は一日ごとにテナント料を払うだけで参加できるらしい。
だから第一商業区はいわゆるブルジョワ系のお店ばかりだけど、第二商業区のこっちはピンキリが非常に激しいそうだ。
行商人が滞在期間の少しの間だけ店を出すことも多く、掘り出し物が多いのもこちらである。

私が今日買いにきたのは掘り出し物の方。
【巡礼者】への転職が終わってようやく直近でお金が入用になる予定がなくなった。
その上の超級職である【大巡礼】や【超信仰者】は条件が虫食いだったりそもそもロストしてあったりと一筋縄ではたどり着けない。
【シンデレラ】の進化次第ではどちらかは必須になるだろうが、少なくともカルディナにいる間は自由にお金を使えるくらいには余裕ができた。
なので昨日の狩りで稼いだ一万リルで今日は砂漠越えのアイテムや戦闘装備を買うことにしてる。
【アルノーツ】が手に入ったおかげで戦闘装備も買えるようになったから、《ＨＰ増大》や《ＭＰ増大》が付与された装備，砂漠越えの《炎熱耐性》のアクセサリー等が欲しい。
《ＨＰ増大》や《ＭＰ増大》の装備を買うにはお金が足りないと言われてるけど、その場合はリーナが一時的に貸してくれる。
普段ならお願いしないんだけど、バザールという早いもの勝ちの環境では良い装備はすぐにとられてしまうのでお願いすることになっ

た。
この街から一日行ったくらいの砂漠に私が相性のいい危険指定された賞金首モンスターの住処があるらしいので、お金が足りなくなったらそちらで狩ってきて補充する予定だ。
…最初はちょっと渋ったんだけど毒を使う純竜クラスのサソリの群れなら，広域殲滅型の【シンデレラ】と普段からもっとえげつない状態異常を常時治療してる【高位信仰者】なら大丈夫だって言われて納得せざるを得なかった。
閑話休題。
ともあれ、二つ目の上級職で装備の更新時期でもあるし砂漠越えのアイテムもこれからカルディナを横断する身としては当然要る。
そんな折に競売都市と言われるほど品物に溢れたこの街に訪れられたのは行幸と言えるだろう。

ちなみにリーナは前にレジェンダリアに行ったときにそういう各種必須アイテムは揃えたそうだ。
ということで、《鑑定眼》も《真偽判定》も持たない私では騙されて偽物掴まされるかぼったくられるのがオチだと、人間慣れして《真偽判定》も持ってるウェグニ君と掘り出し物の発掘要因でリーナ、そして特に理由はなさそうだけどついてきた（つけてきた）デュアルさんがついてきてくれてる。

「桜、これなんかいいんじゃない？《炎熱耐性》のついたイヤリング。聴覚にもボーナスあるしアクセサリーとしてはかなりいいわよ」
「ちょっと高すぎるかなあ、三万リル。メイン装備でもないのに貯金が吹っ飛ぶし。《炎熱耐性》だけでいいかな」
「じゃあこいつはどうだ？《ＨＰ増大》のコート。高レベルだし他にも結構耐久値ありそうだから有用だと思うぞ」
「えっと…装備制限レベル四百!?むりむり、【巡礼者】カンストしても着れないじゃん！」
「ウェグニ殿、リーナ殿、この刀面白いでござるな!?持つだけで何かを

斬り殺したくてたまらなくなるでござる!!」
「今すぐその妖刀を戻せこのエセ侍」
そばの店から黒紫のオーラを纏った刀を振り回しながらデュアルさんが不穏な言葉を口に出す。
リーナが【ハルムート】でデュアルさんを【拘束】しようとし，ウェグニ君がルイアちゃんに蓄積された状態異常を使って動きを止めようとしたが，それら全てを振り解いてデュアルさんはどこかに行ってしまった。
方角的に向かったのは街の外だろうから，斬ろうとしてるのが人でないだけ幸いと言って良いのだろうか？
ん？そもそもプレイヤー保護の機能があるのに生物が斬りたいとは一体…？
まあ，リーナとウェグニ君が向かった以上酷いことにはならないかな。

それにしても《鑑定眼》使える人が全員いなくなってしまった。
どうしよう。ＭＰを注げば冷たい水が出てくるっていうこの魔法のビン、買うべきかどうか…。
迷っていると売り子の証人が声を掛けてきた。
「お、お客さんお目が高い。そいつは砂漠での必需品だ。しかもライア工房っていうレジェンダリアの有名な工房で製造されたもんさ。買ってくれるなら一万リルのとこを九千リルに撒けるよ」
そう言いながら【商人】が裏についた焼印を見せてくる。
私はよくわからないがこれがそのライア工房と呼ばれる工房のマークなのだろう。
「うーん」
「あれこれもダメ？お客さん値切り上手だねえ。それならお客さんの可愛さに免じて八千リルにしとこうか。ね、どう？」
「えっ…と」
値切り交渉もしてないのに勝手に値段が下がっていくのは値切り交渉とは言えない気がする。

「んー，じゃあ六千リルだ！これ以上は流石に無理だよ。さあ，どうだ！」
でも，ここまで言ってくれてるのに断るのも悪いなあ…
十分予算内ではあるし確かに砂漠では要りそうだ。
「それじゃあ買い…」
「それはだーめ」
「え？」
肩を捕まれ、振り向く。
そこにいたのは露出の多い砂漠の踊り子のような衣装を身にまとう女性。
ただし、その首には衣装に不釣り合いな無骨な首輪がーー奴隷の首輪が嵌められていた。
さらには、目もどことなく渇いた印象を受ける。
だが、その目とは裏腹に言葉は酷く軽い調子だった。
「それは粗悪品。使えば一か月もしないうちに壊れるよ。あっちの店に売ってるやつの方は、一年以上持つ」
「あ、なんだお前？どっかの店の回し者か？そういうセコイ手使われるは不愉快だな」
売り子の【商人】不機嫌な声を出すが、奴隷の女性は気にせず水筒を手に取り、裏側に貼られてたシールを剥がした。
「別に回し者とかじゃないよ。ライア工房なら印はシールじゃなくて、焼き印。あと、使ってる鉱石は鉄じゃなくてミカル鉱石。そうじゃないと質のいいスキルは載せれないからね。でもまあパチモンにしてはよくできてるほうだから相場は三千リルってところじゃないかな。ライア工房の三分の一なら十分検討してる方…っと」
「うるせぇ！奴隷風情が言うこと信じる奴なんていねぇんだよ！おい、営業妨害だ！こいつを叩き出せ！」
男の号令とともに店の奥から屈強そうなティアンの男が五人ほど出てきた。
私は《看破》を持ってないから正確なレベルやステータスはわからないけど出てきた時の動きからしてレベルは百～二百ってところ

じゃないだろうか。
レベルだけで言えば私は二百を超えてるので数値上は拮抗できてることになる。
だが、私のビルドは百パーセント司祭系統。
礼拝者系統は例外的に満遍なくステータスが伸びるが逆に言えば特化してるステータスはないので上級職である【巡礼者】のレベルを五十も上げてない私では純戦闘職で構成されたビルドのステータスは確実に下回っている。
そして、ティアン相手に【シンデレラ】を使うわけにもいかない。【シンデレラ】はコントロールや弱体化起動という概念が一切ないのでレベル百や二百そこらのティアンでは確実に殺してしまう。
そもそも街中での戦闘自体が予想外だ。
戦闘職が暴れたら【シンデレラ】を使わなくても周囲に被害が出る可能性はある。
でも、親切にも私を助けてくれたお姉さんをほっといてどこかに行くわけにもいかない。
どうしようもないので【テレパシーカフス】でリーナに救援要請を出す。
リーナやウェグニ君なら無血…とまでは言わないけど殺さずに相手を制圧できるだろう。
さて、問題は二人が来るまでの待機時間だ。
タンクらしくリジェネで殴られる箇所を集中回復しながら救援が来るのを待ってようかと思ったそのとき。
「奴隷だからと言って別に弱いわけじゃないんだよ」
音もなく、男たちが全員倒れ、【商人】の眉間に銃が突き付けられていた。
それを成したのは、桜が戦闘力があるとなど微塵も考えていなかった奴隷の女性。
それもレベル百越えのティアンを瞬く間に【気絶】させ、一瞬で店を制圧した。
明らかに、一般的な上級職の動きを超えている。

「なっ、あっ、ああ!?」
売り子の男は驚いて声も出せていないが私もそう。
かろうじてお姉さんの腰に目をやると、先ほどまで何もなかったそこにはそこには拳銃用のホルスターが装着されていた。
「早打ち…」
思わず口から洩れた言葉にお姉さんが薄く微笑んだ。
しかもただの早打ちではない。
発砲音がしなかったことや銃弾が見えなかったことから握っているのはおそらく風属性の魔力式銃器。
しかも男たちの眉間を正確に射抜いておりおそらく銃の威力もレベル百のティアンが気絶する程度に調節されている。
個人差があるステータスを持ち立ち位置も異なるティアンに、魔銃に込める魔力一人一人調節しながら、目にも止まらぬ早打ちを成し遂げたのだ。
人間業ではないその行為を桜も店頭の売り子も完全には理解できていないが、それでも気圧されている。
十分過ぎるほどの威圧を与えたことに満足したのか、奴隷の女性は拳銃をホルスターに収めた。
「それじゃあ今日はこの辺で帰ろうかな。阿漕な商売はいいけどほどほどにね」
そうして、踵を返した女性はさっそうと店を去ろうとしーー
「桜、大丈夫!」
リーナが叫び声を上げながら開いたドアに、思いきりぶつかった。

??◇

四人の中で一番ステータスが高いのがデュアルさんで，しかも呪いの武器のせいでさらにそのステータスが強化されてしまったため、デュアルさんはどこかに消えてしまったらしい。
下手に騒ぎにならないうちに回収しようとリーナが空から、ウェグニ君がルイアちゃんの感覚で捜索してたらしいが、その前に私の救難信号を受けて戻ってきたらしい。

結果的には二人が到着する前に解決したので、単に人騒がせなだけだったけど。
そして、一番人騒がせなデュアルさんはフィールドに出てしまい捜索不能という事だ。
しばらくすれば帰ってくるだろう。
「その、すいません。大丈夫でしたか？」
「あはは、いいのいいの。幸いなことに恥ずかしいとこ見られたのはこの子だけだったからね」
珍しくリーナがしおらしい。
普段から強気を崩さないのにあまり見ない光景だ。
「…」
そしてウェグニくんがなぜか仏頂面だ。
あまりお姉さんを歓迎してないように見える。
「改めましてボクは【超銃兵】リリース。君達は大会に参加するために来たのかな？」
そうして名乗られたジョブは超級職だった。
その言葉に驚くと同時に納得する。
この都市に来てから超級職に会うのは二人目だが、私はティアンで超級職の人を見たのは初めてだ。
王国の超級職と言えば英雄と謳われる王国騎士団長や〝魔法最強〟と呼ばれる【大賢者】達だ。
リリースさんもその人達と同格のステージに上がっている。
さっきの正確無比な射撃の要因が、少し見えた気がした。
「私は【巡礼者】雪姫　桜です。彼女は【高位観測者】リーナ。で，彼が」
「ああ，彼のことは知ってるから大丈夫。ウェグニ君とルイアちゃん，だよね」
「え？ええ，はい。二人は大会に参加するんですけど私は不参加で」
ウェグニ君の名前をなぜリリースさんが知ってるのか気になったけど会話を先に進める。
【それにしても桜、これはまた一段とやばそうな人と知り合ったわね】

リーナが本人を目の前にしつつ【テレパシーカフス】で話しかけてきた。
…密会に便利だなあ、このアイテム。
【やっぱり、リリースさんってそんなにすごいの？】
【彼女が付けてる首輪は従属キャパシティに収まらない奴隷に言うことを聞かせるためのものよ。主人の命令に強制的に従うような精神系状態異常の込められた呪いのアイテム。つまり、彼女を買った主人が従属キャパシティに収められないくらい彼女が規格外ということね】
【へー、すごいね】
追加でリーナが教えてくれた情報によると、あの首輪は装備権自体は装着者にあり装備制限が適用されるのも装着者の方らしい。
リリースさんについてる首輪は最上級のもので付加されている精神系状態異常も最高品質のものなので、装備制限は最低でも五百以上だろうとも。
例えあの早撃ちを見ていなかったとしても、それだけでリリースさんの腕は保証されてるようなものだ。
私とリーナが本人を前にして内緒話をしてる間に、ウェグニ君がリリースさんに声を掛けた。
「あんたはなんでここに来たんだ？」
「ボクがボクの雇い主に頼んで設営してもらってる孤児院へのお土産をね。あの人は命令にさえ従っていれば物分かりいいから」
そう言うリリースさんはやはり、酷く渇いた目をしていた。
一方ウェグニ君はどことなく不機嫌だ。
「…それを守るためなら、あのバカのやってることを放置していいと？」
「ボクの守れる範囲はボクの中で決まってるんだ。それ以上を望んで全部台無しにする訳にはいかないんだよ。例え何と敵対しようとね」
…？
ウェグニ君とリリースさんはお互いを知っているようだ。
けれどそれにしては二人の間に流れている空気は非常に奇妙な気

がする。
仲違いしてる訳でもなければ仲がいい風でもない。
ただ、二人とも悲しそうな、ーー同情しているような顔をしていた。
異様な空気に飲まれて私もリーナも声を出せない間にリリースさんが出て行く。
ただ、扉からリリースさんが出て行く瞬間に、ウェグニがその背に声を掛けた。
「市長によろしくな、奴隷」
「……」
答えは返ってこないまま、扉は閉められた。

トレジャーハント

■□カルディナ西方中継都市　【レファノンダム】

【レファノンダム】の最も特徴的な面を挙げるとするならば、都市の地下が遺跡となっていることが挙げられる。

ゲーム的に見ればアルター王国で最も有名とされる〈神造ダンジョン〉、〈墓標迷宮〉と同じ仕様である。

しかし【レファノンダム】は〈墓標迷宮〉と比べたときに最も違う点が一つある。

それは【レファノンダム】の地下遺跡は〈神造ダンジョン〉ではなく〈自然発生ダンジョン〉であるということだ。

見えざる存在に管理され、外にモンスターが漏れ出すことのない〈墓標迷宮〉や、モンスター…〈イレギュラー〉ではあるものの自我はなく機能を人為的に掌握可能な【エンペルスタンド】とは逆。

未だ探索されきらず、何者にも管理されていないダンジョンが、いつモンスターが溢れ出すかもわからない状態で足元に埋まっている。

【レファノンダム】ができた起源は遥か昔、カルディナ砂漠が出来上がる前…そしてセーブポイントが設置される前まで遡る。

暴走した先々期文明の遺跡に昆虫型のモンスターの大群が侵入した。

遺跡の防衛システムも起動し昆虫モンスターに対して応戦したがその中に特異個体…モンスターを従える〈ＵＢＭ〉が混じっていたことにより、遺跡のシステムもモンスターの侵入を阻み切ることができなかった。

死力を尽くして侵攻するモンスターと応戦するシステム。

それはどちらにも大きな損害を出した。

結果として、モンスターと遺跡のシステム。

どちらもが戦力の大半を失うことでその戦いは勝者なき結末として決着した。

そこから数百年。

防衛システムも稼働しなくなり、邪魔者のいないまま宝の山が残された遺跡。
冒険者達にとって宝の山であるその遺跡は多くの冒険者達によって賑わうこととなった。
内部には生き残った昆虫型のモンスターや辛うじて起動していたシステムもあったが、当時はまだ少なかった発掘された遺跡の一つに学者や生産職、そして超級職も含む多くの戦闘職が【レファノンダム】へと集まった。
数多の遺物が掘り起こされ、その場で欲しいものを交換する者、アイテムを売る者、簡易な装備の整備をするものなど多種多様な人物が遺跡の上部に拠点を築くこととなる。
いつしかセーブポイントも設置されたそこはやがて都市となり、競売都市とも遺跡都市とも呼ばれるようになった。
それが【レファノンダム】の成り立ちである。
セーブポイントが設置されたことによってモンスターは本能的に地上部ー街までは近づかなくなった。
だが、モンスターが近づき辛くなったというだけでまだ潜在的な危険は存在する。
遺跡は深く、さらに攻め入った昆虫型モンスターの群れの中に地中潜航型のワームがいたのか、ただでさえ入り組んでいた遺跡がさらにややこしくなり、あたかも迷路のような状況となっている。
遺跡の地下深くにセーブポイントのモンスター避け効果の効かないモンスターが存在する可能性は決してゼロではない。
ましてやゴーレムの類にはセーブポイントのモンスター避け効果は効き辛いのだから尚更だ。
そこで【レファノンダム】の市長は一計を案じた。
近年、多種多様な奇跡を持つ〈マスター〉が多く降り立った。
その中には探索系能力を持つものや熟練の戦闘職に匹敵する者もいる。
ならばこの機に遺跡内部のモンスターを一掃してしまおうと。
そして開かれたのが変則的な、決闘と銘打たれたトレジャーハント

である。
ルールは遺跡内部にあるアイテムを回収し、総額で最も多くの金を得た者が勝利。
また遺跡内部のモンスターを倒すこともポイントとして累計される。
並行して開催されるオークションにより一般の店では捌くことができないほどの価値ある物品が出てきてもオークションで落札が可能であるし、興業の一種として人も集めれる。
そして、その優勝商品が珍しいことで有名な地竜の亜竜だったという訳だ。

「なるほどなるほど。で、決闘の内容って？」
大会が開かれる一時間前。
リーナにスパーリングの相手を頼まれた私は【レファノンダム】の成り立ちや決闘の内容を聞きつつ一昨日やってた【巡礼者】のスキルのテストの続きと昨日バザールで買ったアイテムの調子を確かめていた。
買ったのは《炎熱耐性》のアクセサリーと１０％の《ＨＰ増大》がついた服。
《炎熱耐性》のアクセサリーは下級魔法の《ファイアーボール》くらいならダメージをかなりカットしてくれるくらいの性能はあった。
【巡礼者】で覚えたのは簡単な浄化スキルと聖属性攻撃。
ただし浄化スキルは自分を中心に一定範囲を浄化するもので、聖属性攻撃ーー《洗礼の残光》は《ホワイト・ランス》のように遠距離攻撃するものではなく、《聖別の銀光》のように纏うタイプのものだった。
どうやら【巡礼者】は基本的に近接戦闘を想定したスキル構成らしい。
具体的に説明すると、《洗礼の残光》は自身の攻撃をアンデッドにしか効かない聖属性攻撃に作り替え、本来のダメージの十分の一のダメージを与えるというもの。

リーナにデコピンしても皮膚すら赤くならず、偶々エンカウントした亜竜クラスのワニ型モンスターを全力で殴ってもノーダメージだった。（その後、反撃してきたワニに丸呑みにされかかった）

スキルレベルを上げれば変換効率は上がるようだけど、スキルレベルが上がってもアンデッドにしかダメージが通らない仕様は変わらない。

通常攻撃にさらに聖属性ダメージが追加され、アンデッドへの回復無効とダメージ十倍化を発揮する《聖別の銀光》と比べて随分と見劣りするものだ。

高難易度の解禁条件が設定されてる《聖別の銀光》と違い、《洗礼の残光》は【巡礼者】についてある程度レベル上げするだけだ取得できてしまうので、性能に差があるのは仕方ないのかもしれないが。

変換効率がこの上なく悪い代償か、完璧ではないものの回復阻害効果はこちらにもある。

ちなみに浄化スキルは汚水がすごく綺麗になった。

ある程度の呪怨系状態異常なら跳ね除けることもできるようだ。（【劣化】は普通に通ったけど）

今のところはアンデッドと戦う予定もなければお水を売る予定もないのでこの二つのスキルは死蔵することになりそうだ。

まあ、私の場合攻撃スキルは【シンデレラ】で事足りてるし、【巡礼者】になったら固定値回復のリジェネスキルだけでなく割合回復のリジェネスキルまで覚えれたので文句はない。

閑話休題。

話を闘技場のルールに戻そう。

「持ち込んだものを売って一番多くポイントを稼いだ〈マスター〉の勝利らしいわ。今までは危険とされて開けられてなかったブロックやモンスターの侵攻のせいでぐちゃぐちゃになったり迷路みたいになってて進めなくなったブロックなんかも完全解放されるそうね」

「〈マスター〉なら適任だね」

例え迷路で迷子になっても〈マスター〉ならログアウト＆ログイン

で元の場所に戻ってこれる。
危険なブロックも何百人もの〈マスター〉がいれば踏破できるだろう。
〈マスター〉全体のレベルが上がってると言われている昨今らしいイベントである。
実際、純竜級モンスターの群れや〈ＵＢＭ〉を倒した〈マスター〉の話も最近は割と聞く。
「他にルールは？」
「持ち込むものはテイムできてるならモンスターでもＯＫ。売却は基本冒険者ギルドで行われるらしいけど値がつけられないものはここのオークション会場で売れた金額がポイントとなるそうよ。遺跡で手に入れたもので売りたくないものは売らなくてもいいけど、欲しいものがあった人が直接交渉できるように獲得したアイテムは原則公開。優勝商品は無色の【カーバンクル】の幼体」
「ふむふむ」
【カーバンクル】にわざわざ『無色』とついているのはカーバンクルが吸収した魔力によって色が変化する特殊な亜竜だからだ。
炎属性の魔力を取り込めば赤く変化し炎属性を，雷属性の魔力を取り込めば黄色に変化し雷属性を使うようになる。
一部の富裕層の間で人気で好きなジェムを吸わせて思い思いの【カーバンクル】を作るらしい。
ちなみに、〈マスター〉の間でもイ〇ブイみたいととても人気なモンスターだ。
だが、無色の【カーバンクル】の数はとても少ない。
そも、【カーバンクル】の住処はレジェンダリアほどでないにせよ自然魔力が濃い地域だ。
故に、その地域の自然魔力を取り込む過程で何らかの属性に変化を遂げることは多々ある。
さらには自身の力を高めるために多くの魔力を取り込む習性があるためよっぽど自然魔力が澄んでいる場所でなければ無色の【カーバンクル】は生まれない。

純粋に一つの属性に特化した【カーバンクル】ですらかなり珍しいと言われる。
故に、無色透明のカーバンクルは亜竜クラスであるが、純竜を超える値段をすることも珍しくない。
亜竜であるため従属キャパシティ内に納めることも比較的楽で、ペット用のモンスターとしても親しまれている。

「妨害や他者を襲うのもありだけど遺跡を崩壊させた者は即失格。実況はオークション会場で飛ばしたドローンをモニターに映しながら行われるそうよ。名のある何人かは専属のドローンがつくらしいわ。その分ボーナスポイントが最初から入るみたい。ちなみにデュアルもそうらしいわ」
「ああ、デュアルさんって昔天地の決闘ランカーだったって言ってたもんね。今は不戦敗で落ちてるだろうとも言っていたけど」
「結託もありだからかなり荒れると思う。禁止されてるとはいえ事故や流れ弾で遺跡の崩壊もきっと度々起こるわね。私も気をつけるようにはするけど、それよりもＭＰコントロールが重要になりそうね」
「あー、魔法職にはきつそうだもんねこの形式」
「まあ、その辺はなんとかするわ。【ハルムート】も戦闘時以外は出さないようにするつもりだし」
今回の形式はかなりリーナに不利である。
観測者系統は探索に向いたスキルがいくつかあるし戦闘もリーナならよほど相性の悪い相手でなければ大丈夫だろうが、リーナはとにかくスタミナが低い。
戦闘リソースの八割をＭＰに依存してるのに、《詠唱》やら【ハルムート】の操縦やらでＭＰの消費が激しいのだ。
そのため、リーナにとってかなり厳しい戦いになるはずだけれど、それでもリーナの顔に負ける気は微塵もなさそうだった。
「それじゃあ、そろそろ時間だよね。いってらっしゃいがんばってね」
「ええ、カーバンクルの幼体は絶対ゲットするわ」

■□【高位観測者】リーナ

一時間後、桜と別れたリーナは指定された時間に指定された場所に来ていた。

遺跡内部に入るための道はいくつかあり、参加者は指定された等分されて指定された番号の入り口からそれぞれ内部に入っていくことになる。

入り口は五つ以上あるのだが、それでも１００人に迫る人数が入り口の一つであるここに集まっている。

そして、ここでは既に情報戦が始まっていた。

《看破》で周囲のメインジョブやステータスを探る者。

ブラフでメインとは別の装備を装備しておき、《着衣交換》のタイミングを誤らないよう緊張している者。

スキルで己のメインジョブとステータスを偽る者。

既に戦いは始まっている。

リーナも探りを入れている者の一人であり、本番が始まってからの戦闘に影響が出ない範囲で周囲を【高位観測者】のスキルで見回していた。

だがそのとき、リーナは突如顔をしかめた。

すぐにその場を離れようとするも人混みのせいで上手く距離が取れず、そのまま追いつかれる。

「リーナ殿もこっちでござるか！」

「……」

「ハッハッハ、そんな嫌そうな顔で見ないでほしいでござる」

リーナを見つけ、接近してきたのはリーナをこの大会に誘った張本人。

【鎧武者】デュアルであった。

顔をデュアルの方に向けていないのに嫌そうな顔をしていると見破られたのはスキルか勘か…

等分する際に振られる番号はランダムで、組み合わせは完全に運なのだが今回はどうやら運がなかったらしい。

しかしそんなリーナの思いとは裏腹に、デュアルは朗らかに笑っている。
「まあまあ。リーナは運が良い方でいると思うでござるよ。この大会、かの〝星屑〟や〝食いしん暴〟が参加してるようでござるからな!!」
「…【砲王(キング・オブ・カノン)】と【鬼将軍(オーガ・ジェネラル)】が?」
顔も見てないのに運が悪いと思った心まで読んでくるデュアルにさらに渋面を作りたくなったリーナだが…それよりも気にかかる言葉に思わず口から言葉が漏れる。
それはリーナがデュアルへの嫌悪感よりそのビッグネームへの驚きの方が大きかったからだ。
どちらもまだほとんどの〈マスター〉の手に超級職がないなかで早々に超級職を手に入れた例外中の例外。
一時期〈Ｉｎｆｉｎｉｔｅ　Ｄｅｎｄｒｏｇｒａｍ〉内外で大きく話題となった広域殲滅型と広域制圧型の代名詞。
どちらも戦闘中に撮られた動画が広く出回っており、戦闘手段は割れているが遭遇すれば厄介極まりないことに間違いはない。
強いて救いがあるとすれば遺跡を壊せないというルール下では【砲王】の戦闘力が大幅に落ちることぐらいであろうか。
…それだけに【砲王】と同じ入り口となってしまった者たちにはご愁傷様としか言いようがないが。
「まあ，気負わずにお互い頑張るでござる！いやー、リーナ殿との戦いも楽しみでござるな！」
「…」
【砲王】と【鬼将軍】の情報を思い返し、半ば思考から排されていたデュアルの存在が、他でもないデュアルの声によって現実に引き戻される。
ため息を吐きながらリーナはデュアルが嫌いになった原因を想起する。
【レファノンダム】へ向かう旅の際、所構わず心を読まれ、隙を見ては決闘に誘われ、日夜問わず肉食獣が獲物を見るような目で見られてい

たことを。
桜に対してはまだ時期ではないと考え、どちらかというと師のように振る舞っていたが、リーナに対してはそれこそ感知系スキルが永遠と反応し続ける程度には常時殺気を振りまいていた。
ウェグニは適度に相手をすることで戦闘欲求を満たしていたようだが、リーナは模擬戦をずっと断り続けていたことが原因だったのかもしれない。
最も、傷痍系状態異常の回復ができ、相手へのダメージ判定も制限系状態異常で行えるウェグニでなければ安全な野試合などできるはずもない。
決闘用の結界施設はそんなに頻繁にあるものではないし、模擬戦を一回するごとに【ブローチ】を砕くのは金遣いが荒いにも程がある。
ましてやデュアルが本当に望んでいるのはデスペナまで含めた決闘ともなれば、リーナからすれば断るのも当然と言える。
天地では当然の光景なのかもしれないが、生憎リーナはリアルは平和な日本出身であるしデンドロ　内でもアルター王国の出である。
常時殺気を振りまかれて落ち着かない状態で嫌いになるなという方が難しい。
それだけに、デュアルが待ちに待ったであろう今回の大会とどちらかがデスペナルティになるまで追ってきそうな執拗さを想像し、リーナが抱いた感想は一つ。
（絶対に戦いたくない）
普段のロールも抜けて心から浮かぶその言葉に、リーナは初手から切り札を切ることを決めた。
「それでは、〝トレジャーハント〟これより開始いたします」
と、そんなことを考えている内に開始の時間になったようだ。
【拡声の指輪】で声を大きくした審判が、カウントダウンを始める。
遺跡の入り口に設置された門が光りだし、周囲の〈マスター〉から興奮が伝わってくる。
リーナが周囲を見れば嫌な目で周囲を見渡している人も幾人もいる。

ーーまあ、それはリーナも同じなのだが。
「三、二、一、ハント・スタートォ!!」
幻影魔法で投影されたゲートが消えると同時に戦闘が解禁され、遺跡への侵入も可能となる。
開始の宣言と共に幻影魔法で投影されていた大きな門が消える。
同時に、周囲の〈マスター〉達が一斉に動き始める。
中に入ろうとする者、周囲の人間に襲いかかる者、身を守ろうとする者、開始を今か今かと待ち侘びていた〈マスター〉達が思い思いに動き出す。
必殺スキルを浴びてデスペナルティになった〈マスター〉もいれば、遺跡に入った瞬間に後ろから蹴り飛ばされてそのまま人の波に飲まれる〈マスター〉もいる。
それは当然の行為。
開始直後の混乱が起きるこの瞬間が最も好機で最も混沌とした瞬間。
それを予見できていなかった〈マスター〉が慌てら予見できていた〈マスター〉が周囲の〈マスター〉を狩り、あるいは出し抜いて遺跡へと潜っていく。
ーーそして、それはリーナも同じだった。
「《魔導法(グリモワール)》ーー《天罰の柱(ジャッジメント・ピラー)》」
初手から必殺スキルを切ったリーナは、《恒星》を手に入れるまでずっと隙あればMPを注いでいたとっておきを呼び起こす。
発動したのは、司祭系統の奥義である儀式魔法。
かつて神話級〈UBM〉すら消殺せしめたアルター王国の切り札。
その名も高き《天罰の柱》。
本来であれば数多の聖職者のHP、MP、SPを吸い上げて行使される天罰は、その名に恥じぬ火力を十全に発揮する。
一瞬の静寂の後、周囲にいた約四割の〈マスター〉が蒸発した。
【ブローチ】をつけていた残りの六割の〈マスター〉も連続する熱気に【ブローチ】を砕かれ、《炎熱無効》のスキルを持っていた者も酸素の欠乏によりデスペナルティを余儀なくされる。

砂漠の熱気など比較にならない灼熱が周囲を炙り、やがて消え失せた頃、そこには二人の人影しか立っていなかった。
そう、【グリモワール】は儀式魔法であろうとスキルをコピーできる。
スキルレベル１０の《攻撃観測》により詳細を暴いた魔法であればその全てがコピー対象内。
早すぎて観測することができない光属性魔法、複雑すぎて構造を暴くことが難しい複合魔法を除けばほぼ全ての攻撃魔法が対象内。
本来であれば膨大なＭＰを要求する複数人での使用が前提の儀式魔法であろうとリーナであれば必殺スキルを併用すれば行使が可能となる。
必殺スキルで起動した魔法はストックから失われて使えなくなるが問題はない。
桜が上級職が二つとも司祭系統で埋めたことにより《天罰の柱》の習得条件を達成したので、遠からず小規模でも再コピーさせてもらえるという余裕があった。
ため込んでいた必殺スキルがもたらした結果とその後のリカバリー。
これらに不満はなく、上々のスタートだったと言える。
故に、不服なのは自分以外に立つ者がいるというただその一点。
「いやー、ハッハッハ、死ぬかと思ったでござる」
リーナが視線を向ける先には半分融解した武者鎧を仕舞い、笑いながら別の武者鎧を出すデュアルの姿があった。
鎧兜は融解しているが、その身にほとんど傷はない。
死にかけたなどと宣っているが、ポーションを飲むだけでも十分回復できる範囲だ。
なぜか酸素欠乏により死ぬこともなく、豪快に笑っている。
「絶対殺したと思ったのに」
自身の切り札を余裕で耐え切られたことに、リーナの隠しきれない不満顔が表に出る。
「いやはや、リーナ殿なら間違いなく初手で【砲王】や【鬼将軍】と同

じ手を打ってくると思ったでござるからな」
最初の会話はリーナが本当に初手で魔法を切ってくるかどうかの最終確認だったのだろう。
本当に食えない男だと、リーナは思考する。
「それで、やるの？」
仕留めきれなかった以上戦闘になるのを覚悟し、リーナ【グリモワール】のページを開き【ハルムート】を装備する。
元々戦闘欲求の塊みたいな男だ。
寧ろ《天罰の柱》を発動した直後に奇襲してこなかっただけでも奇跡であり、ここからは壮絶な死闘となるだろう。
だが…
「いやいや、ここではやめておくでござる。拙者もＨＰが減っておるしリーナ殿も防御魔法にＭＰを割いていたせいで残りＭＰは半分を切っているでござろう。このままでは面白くないでござるし戦いはまた後にするでござる」
あの光熱の中でどのように見たかは知らないが、デュアルはリーナが自分ごと魔法に巻き込んだせいで《ハイ・セイント・レジストウォール》を貼っていたのを見ていたらしい。
《魔導法（グリモワール）》は事前にため込んでおいた魔力を任意のタイミングで開放できるので発動時の消費は０だが、それに合わせて発動した防御魔法はそうもいかない。
遺跡を損壊させないという条件を守るために入り口とその周辺にも防御魔法を稼働していたためリーナのＭＰは半分を切っている。
実際、ここでやれば恐らく負けるのはリーナだろう。
「それではお先に失礼するでござる」
そう言ってＨＰポーションを飲みながらデュアルは勝手に遺跡へと入っていってしまった。
見逃されたと若干の悔しさを覚えながら、リーナは苦いＭＰポーションを開ける。
連続で使うと効果が落ちるためあまり使いたくはないのだがこれは最初から決めていたことなので仕方ない。

「それにしても、【砲王】や【鬼将軍】と同じ手…か」
ポーションによるＭＰ回復を待つ間、リーナはデュアルが言っていた言葉を呟いた。
よく言うものだと思う。
自分がいなければここを全滅させていたのはデュアルだったろうと確信しているから。
それほどに、リーナはデュアルを警戒している。
むしろ後手を取らないためにも先手で打って出たのだが戦果は鎧兜たった一つ。
与えた多少のダメージも、次の戦闘までには回復されているだろう。
本当に食えない男だと、溜息を吐く。
…それと、言いたいことはもう一つ。
「…あれと一緒にしないでほしいんだけど」
リーナが視線を向ける先には〝天空に展開された無数のゲート〟と〝どこからともなく聞こえてくる叫び声〟があった。

不穏

◆◇遺跡内部　【高位観測者】リーナ

「予想外に静かね」

ＭＰの回復を終えたリーナは遺跡内部に踏み込んでいた。

観測者系統で得た数多の知覚スキルを発動させつつ先々期文明の貴重品を攫っていく様子はいっそ鮮やかとも言える。

恐らく〈トレジャー・ハント〉に出場している著名な実力者の中でまともな探索スキルをちゃんと有しているのはリーナだけ。

なので、リーナはそこで勝負する気だった。

スタミナの問題もあり、極力戦闘音のする方向は避けたルート選択をしている。

だが、それにしても遺跡内部が静かすぎる。

まだこれまで、〈マスター〉どころかモンスターにも遭遇していない。

各種探索スキルによる反応も人間の反応は散らばっているがモンスターの反応はゼロ。

【レファノンダム】の地下遺跡はモンスターが運営によってポップする神造ダンジョンではない自然発生ダンジョンだがこの人気（モンスター気）のなさはありえない。

最初に【砲王】や【鬼将軍】を始めとする実力者が何割か〈マスター〉やモンスターを殲滅するだろうとは考えていたが、それでもゼロというのはあり得ないはずだ。

ここはもう何百年も攻略のなされていない地下遺跡。

道の複雑さはもちろん、モンスターも相当な強さを持つものが跋扈していると考えていた。

だが、現状その気配はみじんもない。

遺跡ゆえのトラップもいくつか発見したが、大昔のモンスターの侵攻で壊れたのか大半は機能すらしていなかった。

これでは本当にただの迷路である。

「そもそも、この遺跡って生きてるのかしら？」

まだ上部だが、この部分は確実に死んでいる。
地下深くになにかあり、そこにまだ見ぬ兵器が眠っているのか、それともモンスターが新たな王として君臨しているのか。
共倒れしていてこの遺跡には脅威となるモンスターがもういないという可能性はない。
それであればこの数百年の間に誰かがクリアしているはずだ。
だが、現在の光景はそれを否定する。
（――ッ!!）
そこまで考えたとき、リーナの背中を怖気が走った。
それは別の可能性に気付いたから。
（もしーー、もし、誰かが私よりも先に進んで遺跡を攻略しているとすれば？）
モンスターも、ドロップアイテムも残さず、遺跡を探索に特化したリーナよりも早く攻略する存在がいれば、モンスターが全く見当たらない現状にも説明がつく。
（でも、一体誰が？）
遺跡内部のモンスターを余さず排除しているということは広域制圧型か特殊な広域殲滅型だろう。
だが、リーナはスタート地点でＭＰの回復を待つ間、視覚スキルで他のスタート地点も観察していた。
目に見えて周囲を蹂躙していたのは【砲王】と【鬼将軍】のところのみ。
それ以外はスタート地点での小競り合いが起きていた。
そして、この二人が下手人ということはあり得ない。
【砲王】であれば確実に傷が残るし、【鬼将軍】であればドロップアイテムが残るか、彼女の配下に遭遇しているはずだ。
デュアルという線もあり得ない。
アレはどちらかといえば個人戦闘型の部類であり、密集した生物をまとめて切り殺すならともかく遺跡内部に散らばったモンスターを一掃できるほどの殲滅力はないはずだ。
だとすればまだ無名の広域殲滅型か。

人知れず王国の土地を灰にしてた桜のような例もあるのでもちろん可能性がないわけではない。
だが、まだ上部で頻繁に探索に来るものもいるため減っていたとはいえ、遺跡内部のモンスターを一掃できるほどの実力者だ。
そうであるならば、スタート地点で能力を使わない意味がない。
（私の考えすぎ？いや、でも他にモンスターが見当たらない理由に説明がつかない。まだ知られていない実力者？現状推測できる能力はーー？）
このとき、リーナは思考に集中し、周囲を探索する余裕はなかった。
もちろん、各種スキルは切っておらず奇襲対策は行っていたが、思考の大半はそちらに割かれた。
いつ自分も殲滅か制圧の能力圏に囚われてもおかしくない状況だったため、敵の能力を考察することは間違いではない。
だがそのせいでーー一歩遅れた
「――◆◇□■」
「――え？」
音もなく接近してきた〈マスター〉に、アイテムボックスを《強奪》された。
「しまったっ!?」
特典武具故に盗難対象外だった【ハルムート】を《瞬間装備》し、逃げる〈マスター〉を追う。
だが、逃走する相手が速すぎて【ハルムート】の速度でも追いつけない。
それは先ほど考察していた正体の見えない殲滅者ーーなどではない
（バーサーク化と【飢餓】の状態異常。間違いなく【鬼将軍】がスタート地点で配下に加えた手ごまの一人！ジョブと〈エンブリオ〉の二重強化が掛かったＡＧＩ型。このままじゃ絶対追いつけない）
「《フリージング・コフィン》」
とっさに選んだ手段は逃走の防止。
青白く輝く光線が〈マスター〉へと飛来し、その足を凍りつかせる。

【凍結】し動きが鈍った瞬間に追いつき、トドメを刺してアイテムボックスを回収する。
だが、その時には既に囲まれていた。
「――■■■」
「――◇◇◇◇」
「□□□□ーー」
「◆◆◆◆」
来た道からも、倒した〈マスター〉が進もうとしていた道からも、次々と〈マスター〉が現れる。
その中には正気の顔をした者は一人もおらず、全員が理性を失い狂化した顔をしている。
まるでゾンビ映画のような光景だが、〈マスター〉はゾンビになどならない。
それは手駒にして配下。
【鬼将軍】のバフにより、理性を失った狂化軍団である。
自身の行動を悔いる暇すら与えられない怒涛の進軍。
そんななかでリーナが選んだのは逃走ではなくーー迎撃。
「《エメラルド・バースト》」
狭い空間で破裂した風の嵐が、遺跡内部を蹂躙した。

◆◇【レファレンダム】オークション会場　ボックス席

そこは【レファノンダム】競売上の上等なボックス席でもさらに特上の席。
立見席では熱中症や逆に低体温症で倒れる者も出るのでカルディナのボックス席は他国よりも多く設置され、かつ金額も跳ね上がる。
それなら会場自体の作りを変えて屋内にし、冷房も完備すればいいだけの話だが、【レファノンダム】でそれがなされてないのはこの施設に備えられた結界設備のせいでもある。
かつての【建造王】が作ったオークションのための設備。

会場全体に、そして会場内に任意で発生させることの可能な結界設備を備えており、上級職の奥義までならある程度は遮断できる。
決闘の結界設備に比べれば多少は劣るがそれでも強力な施設だ。
建造された当時はカルディナはまだ砂漠ではなかったため空調設備は常識的な範囲に留まるものであり、カルディナの埒外の熱気に対応できるほどオーバースペックなものではない。
そして会場自体の作りを変えてしまうと結界そのものが発動しなくなる可能性もあるため上級職の生産職では手が出せない。
結果として、元からあったボックス席をさらに増やすという程度のものだった。
それ故、【レファノンダム】のオークションは日が沈んですぐに行われることが多かった。
立ち見席しか取れなかった人物でも十分楽しんでもらえるように、極力快適な時間が選ばれていた。
だが、今の市長が台頭してからはオークションは昼や真夜中に行われることが多くなっていた。
それは、趣味。
金を払えなかったものと金を払えた者の差を浮き彫りにし、弱者が喘ぐさまを見る市長の趣味だった。
法外な金を払わなければ【司祭】の治療すら受けられない【レファノンダム】では大変危険な行為だが、市長はそれを気にしない。
「天地の元決闘ランカー、グランバロアの討伐及び決闘ランカー、カルディナの賞金稼ぎ、そして、レジェンダリアの辺境を襲った古代伝説級討滅作戦でＭＶＰに選ばれた魔術師か…。くっくっく、なかなかいいな。これならアレも倒せそうだ」
モニターに映る三か所の攻防を見て、市長は満足げに頷いた。
彼の目の前には三か所に限らないいくつもの映像が浮かんでいる。
それは〈トレジャーハント〉の風景を撮影するために飛ばしているドローンが映す光景。
それぞれの戦闘風景をドローンが記録し、会場へと映像を送り届けている。

「なあ、お前もそう思わないか？」
「…はい、そうですね」
そんな市長が語り掛けたのは、彼の筆頭奴隷でもある【超銃兵】リリース。
今はウェグニと会った時のような一般奴隷の服ではなく、砂漠の踊り子のような服を着ている。
死んだ目をしたリリースは市長の言葉に同意を示した。
だが、市長はそれが気に入らなかったように、思念で〝命令〟を下す。
直後、リリースがにっこりとほほ笑み、深くお辞儀をした。
「全て、ノット様の仰せの通りにございます。遺跡を攻略できないふがいない私が、ノット様のお手を煩わせてしまい、申し訳ございません」
「ふん、それで」
一通りの言葉を言わせた後、市長は〝命令〟を説いた。
今リリースが発した表情と言葉は、精神系状態異常の込められた首輪によって、強制的にさせたもの。
当然、命令を解除すればリリースが市長の望む言葉をかけることは強制できない。
だがーー
「最有力は、【鬼将軍】かと。やはり個で軍団を作り上げるあの〈エンブリオ〉は強力ですし、探索力にも非常に優れています。ですが、相性差もあり地下深くにいる〈ＵＢＭ〉には勝てないでしょう。【鬼将軍】が起こした【ミューテーション・プレッシャー】を、【砲王】か【鎧武者】が倒すのがおそらくおおよその流れになるかと思われます」
そう、言葉を続けた。
首輪による命令は既になく、自由に言葉を発し、市長を害する以外の行動もとれる状態。
しかし、彼女は言葉だけにとどまらず、表情や姿勢も崩そうとはしない。
「ほう、あの【高位観測者】は絡んでこないか」

「《看破》で確認したところＭＰは上級職の域を出ていません。恐らく、【ミューテーション】と会敵する前にガス欠します」
「ふん、まあいいだろう」
市長がそういった瞬間、リリースの顔は元の生気のない表情に戻った。
それは、奇妙な光景だったが、それ以上に彼らが発した言葉の内容のほうが問題だった。
今の言が正しければ、彼らはこう言ったのだ。
「既に迷宮は攻略し、最奥に住まうボスモンスターの姿も確認している」と。
これまでも幾人もの戦闘系超級職が攻略に挑み、断念したことをやってのけたと二人は言っている。
既に遺跡を攻略しているのにも関わらず大金を払って無色のカーバンクルを手に入れて景品とした市長。
精神系状態異常の首輪で縛られていなくとも市長に従順に従うリリース。
その後の〈ＵＢＭ〉を示唆する言葉も含めて、そこにどれほどの意味があるかはわからない。
だが、遠からず状況は動く。
そうなったときどうなるかは、この時点ではまだ誰にも分らないのだった。

Ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ

【鬼将軍】

■□【鬼将軍】について

将軍と呼ばれる超級職がある。

パーティーメンバーが己と配下のみで構成されている場合に限りパーティー枠を大幅拡張する超級職。

その数は最低でも千であり、《軍団》のスキルレベルを上げることで最大数も上昇していく。

言うまでもなく強力なスキルであり、戦乱の世ではいつでも大きな戦果を上げてきた超級職である。

だが、【将軍】にはもう一つ特性がある。

その特性こそが、パーティーへのバフ。

例を挙げるとするならば、魔蟲系統将軍職である【蟲将軍】がパッシブの強化スキルで軍団の全ステータスを倍加させている。

将軍ごとに設定された特定の種族にしか効果がないが、その分強化スキルは強力無比。

移動の手間、配下の補給、といった条件をクリアすれば、一軍が上級職を遥かに超える戦闘能力を発揮する。

それが【将軍】という存在である。

そんな将軍シリーズの中でも例外的に【鬼将軍】の全体バフスキルー《千鬼夜行》はバフをかける種族を選ばないスキルだった。

正確には、効果を受けた生物が種族〝鬼〟に変貌する。

配下に加えた全ての種族がバフの対象であり、その効果、配下の全性能三倍化。

だが、【鬼将軍】は【将軍】シリーズの中でも最も配下が集めにくいと呼ばれているジョブだった。

その理由は…

■□【高位観測者】リーナ

「■□□□ーー!!」

「《ホワイト・フィールド》」

発動した【白氷術師】の奥義により、前後左右から襲ってきた〈マスター〉が【凍結】する。
「■■■■!?」
「《クリムゾン・スフィア》」
対状態異常の〈エンブリオ〉を持っていた〈マスター〉を【紅蓮術師】の奥義で焼却する。
「■■■■!!!」
「《エメラルド・バースーー!!」
【凍結】した仲間ーー配下ーーを砕きながら前進してきた〈マスター〉に【翠風術師】の奥義を叩きつけようとしたとき、その魔法がキャンセルされた。
（マジックキャンセル…!!）
心の中では慌てながらも、しかし頭は冷静に、【ハルムート】の念力で対象を捉え、別の〈マスター〉に思い切りぶつける。
ここまで相対する全ての〈マスター〉が、ステータスを数倍化され、致命傷を負わせても命が尽きない限りこちらへ向かってくる。
リーナが先程から上級職の奥義しか使っていないのは上級職の奥義でなければ倒せないほどに、相対する〈マスター〉達のステータスが高いからだ。

その現象を引き起こしているのは【鬼将軍】の常時発動型奥義ーー《千鬼夜行》。
その効果は、配下の全性能の常時三倍化。
単なるステータスに留まらない。
装備品を除くスキルやステータス、〈マスター〉であれば一心同体である〈エンブリオ〉のステータス補正、スキルも含めた全性能の三倍化だ。
〈エンブリオ〉ありきの〈マスター〉の全戦力を三倍化。
一人の〈マスター〉に使うだけでも脅威が跳ね上がる非常に強力なスキル。
しかし、強力なスキルには利点だけでなく欠点も設けられる。

《千鬼夜行》の効果を受けている【鬼将軍】の配下はその身が常時バーサーク化する。
【鬼将軍】のパーティである間はどれだけ強くとも全性能向上を代償に、敵味方構わず暴れ回る鬼と化す。
生物を見ればすぐさま殺しにかかる深刻な精神系状態異常。
そして、殺しにかかる対象はバーサーク化した仲間もーーその長である【鬼将軍】すらも、生きてる限りは標的だ。
それ故、【鬼将軍】のスキルを受けた軍は多くが同士討ちで全滅した。
唯一、【鬼将軍】自身はスキルレベルＥＸの《精神系状態異常耐性》で正気を維持できるが、他の配下はそうもいかない。
そも、こんな軍団の配下になろうとする者など存在しない。
そしてどうにか集めたとしても，集めた配下すら同士討ちで消えていく。
歴史的に見ても【鬼将軍】の軍団に入りたがるものはほとんどおらず、そういう意味で【鬼将軍】は最も条件がゆるいにも関わらず、最も配下を集められなかった軍団と呼ばれている。
故に、【鬼将軍】は超級職の中でも使えない超級職としてその名を知られていた。
だが、カルディナ最高峰の賞金稼ぎである〝食いしん暴〟シフォンーー正確には彼女の〈エンブリオ〉【悪辣感染　ヒダルガミ】はその評価を反転させた。
ＴＹＰＥ：アドバンス・レギオン・テリトリー【悪辣感染　ヒダルガミ】
餓鬼とも悪霊とも言われる日本の妖怪をモチーフとした〈エンブリオ〉。
ヒダル神に憑かれた者は腹を空かせて身動きが取れなくなり、何かを食べるか掌に米という字を書いて嘗めないければ、同様にヒダル神となって憑いたヒダルガミと同じように、辺りを彷徨うこととなる。
そうして、ヒダル神は加速度的に増えていく。
その逸話をモチーフとする【ヒダルガミ】の能力特性は、【飢餓】と

新たな力の付与。
【ヒダルガミ】の基本スキル《飢饉》。
その効果圏内にいる者は徐々に隠しパラメーターである【満腹度】が減っていき、【満腹度】が３０％を切ると【飢餓】の状態異常が発生して新たに《飢饉》の発生源となる。
そして１０％を切れば、【飢餓】が【餓鬼化】という状態異常に進行し、【餓鬼化】した者はシフォンのパーティーメンバーとなり、【飢餓】による行動制限を受けなくなって【ヒダルガミ】にコントロールされる。
【満腹度】が３０％を切った時点で大概の者は空腹によって動けなくなるため強力なスキルではあるが、デメリットーーというか少々使いにくい側面がある。
まず、単体では満腹度の減衰が少々遅く、範囲もかなり狭いこと。
三つも重ね合わせればかなりの速度で満腹度消費させることができ、ある程度の範囲もカバーできるようになるが、最初の敵を【餓鬼化】するのには少々時間がかかる。
次に、パーティーメンバーの枠が空いていなければパーティーメンバーになれずに【餓鬼化】もされず、そのまま満腹度が減り続け、餓死することになること。
そして最後にして最大の欠点として、一度満腹度が３０％に落ちた後で【満腹度】が５０％以上に回復されてしまえば、もうその者の【満腹度】を下げることができないという点だ。
ヒダル神の伝承の具現。
腹が空いても食糧を食べればヒダル神になることはないというモチーフまで、【ヒダルガミ】は再現している。
一度落ちた満腹度を３０％から５０％まで回復するにはそれなりのカロリーを摂取しなければならないが、【ヒダルガミ】単体の満腹度減少速度はそこまで速くないので、やってやれないことはない。
それ故、【鬼将軍】を手に入れるまでシフォンはそこまで名の知れた〈マスター〉ではなかった。
ただし、【鬼将軍】を手に入れた今は違う。

《千鬼夜行》で強化された【ヒダルガミ】が広範囲に猛威をふるうことができ、
《軍団》スキルによって【餓鬼化】の取りこぼしがなく、
【満腹度】を回復される以上の速度で削り取ることができる。
おまけに、《千鬼夜行》のバーサーク化によるデメリットも【ヒダルガミ】がコントロールすることによって消している。
ジョブと〈エンブリオ〉の完全なるシナジー。
強化と、バーサーク化と、パーティー加入。
それによって生まれるのは、性能をはねあげられ、【餓鬼化】へ誘う《飢饉》のスキルを持たせられた増殖軍団。
似て非なるスキル同士が噛み合った結果、生まれたのが準〈超級〉でも上位のバケ鬼モノの軍団なのだから笑えもしない。

それ故、リーナは防戦一方だった。
今は《詠唱貯蓄》と魔法スキルの射程、そして古代伝説級特典武具である【ハルムート】によって《飢饉》の圏内に入ることなく狂化〈マスター〉を倒しているが、この均衡を永遠と維持できない。
今回シフォンが【餓鬼化】したのがよりにもよって〈マスター〉だったためいつ〈エンブリオ〉による初見殺しが飛んでくるかも分からない。
むしろ広域殲滅スキルも使わずにたった一人で狂化〈マスター〉を落とし続けたリーナを称賛すべきだろう。
現に、一度はマジックキャンセル持ちの〈マスター〉が襲来したため非常に危なかった。
自身の天敵のような存在を相手にしてなおデスペナにならなかったのは、リーナの高い技量と【グリモワール】の万能性を示しているとも言える。
だが、このままでは確実にまずいことがある。
一つは、魔力の枯渇が近いこと。
既にＭＰは三割を切り、未だ逃走の目処が立っていない。
何度か試みようとしたものの、一本道の通路と次々と現れる〈マス

ター〉達に、すぐに回り込まれ追い詰められてしまう。
おまけに通路の過度な損傷は禁止というルールがあるため、必殺スキルによる広域殲滅攻撃も仕掛けられない。
地形、ルール、そして敵、その全てがリーナにとって不利を押し付けてくる。
もう一つは、まだ遺跡内のモンスターを一掃した広域殲滅・制圧スキルの主が特定できていないこと。
狂化軍団に阻まれて考察や探索もままならず、早く相手の攻撃射程から抜け出すか対応した防御手段を打たねば、もういつ敵手の攻撃がこの場を襲ってもおかしくない。
そして最後にして最も差し迫った危機。
それは一つの地点で【餓鬼化】することもなく手勢を狩り続けるこの行為事態。
『見つけたのですううううう』
ーーそれをこの軍の将であるシフォンが許すはずもない。
漆黒の全身鎧を纏い、通路を跳ね回ってくるシフォン。
それに対してリーナも《詠唱》を込めて威力を上げた《グリムゾン・スフィア》を撃ち放つ。
必殺スキルとの併用で超級職奥義を用いないリーナにとっての最大火力。
莫大な熱量を内包した火球がシフォンに向かって放たれる。
これはリーナにとってチャンスでもあった。
ここでシフォンを倒せば【鬼将軍】と【ヒダルガミ】による二重強化は終わり、残るのは【飢餓】による行動制限を負った〈マスター〉達だけだ。
本来、将軍系のジョブは自らが前線に立つジョブではない。
そういう観点からみればシフォンは戦術的にミスを犯したと言える。
ただしそれはーー
「《ホワイト・フィールド》」

ーーリーナがシフォンをーー
「《制動》」
ーー倒すことができると前提した場合の話である。
『効かないのですううううう』
火球を突き破り、氷壁を割り砕き、古代伝説級特典による拘束を突破したシフォンが、リーナを思いっきり殴りつけた。
【救命のブローチ】が起動し、破損判定を逃れられなかったことにより割れ砕ける。
そのままシフォンは両手を振りかぶり、リーナを殴りつけようとしーー
「《キャリアー・ブリーズ》」
《詠唱》を込めた風属性魔法で自身を超音速移動させたリーナが辛うじてシフォンの間合いから逃れた。
全性能を三倍強化されてるとはいえ、いくらなんでも今のシフォンの動きは異常だ。
《鑑定眼》を使用すれば全身鎧に伝説級特典武具の判定が出た。
想定していた脅威が更に一段階上がり、珍しくリーナが顔を引きつらせる。
（やばい。配下だけならワンチャンなんとかなったけど、これはほんとにやばい）
あるいは配下だけなら通路の不利がなければリーナはいつでも逃げられた。
【ハルムート】で上空に退避し《詠唱》込みの魔法スキルで一掃するか、相性の悪い〈マスター〉がいるならあるいはそのまま逃げてもいい。
シフォンの【ヒダルガミ】による増殖軍団は非常に強力だが、同時に大きな弱点も抱えている。
それは配下に対処できない距離と速度で配下を倒す絶対強者の存在がある場合。
近接型であれば時間さえ稼げば【ヒダルガミ】の餌食となるが、相手が広域殲滅手段を持った遠距離型であれば配下では対処できないこともある。

〈マスター〉を配下としている場合はそうそう起こり得ない事態だが、普段彼女が配下とするのは狩場周辺のモンスター。
戦力にムラができやすいのもこの増殖軍団の欠点の一つ。
故に増殖軍団だけであれば、シフォンは名を馳せたとしてもここまで恐れられてはいなかっただろう。
だが、現実としてシフォンの名は畏怖され、恐怖（と興味）の対象となっている。
それはシフォンが【餓鬼化】の即時戦力以外にも、安定した強力な戦力を用意できたから。
そしてシフォンが用意した常駐戦力は新たな配下ではなくーー自分自身。
（最終奥義だけは、切らせちゃいけない）
そう、シフォンが〝食いしん暴〟として名を馳せた理由は、【鬼将軍】の奥義と【ヒダルガミ】による際限なき増殖軍団ーーなどではない。
その更に先ーー【鬼将軍】の最終奥義こそが最たる理由である。
かつてある都市で起きたクラン同士の抗争で、巻き込まれたシフォンがキレて両クランに壊滅的な被害を出し、死者こそ出なかったもの都市が半壊した事件。
その事件で使われたという最終奥義が切られた時点で、リーナの敗北は決定する。
故に、戦いの山は今ではなくまだこの先にある。
だが、現状は最終奥義を切られずとも既にリーナは満身創痍である。
〈マスター〉の軍団に擦り潰され、高い打点を持つシフォンが勝負を決しに来る。
万能の対応力を有したリーナですらも処理能力を食い潰され、シフォンの拳が間近に迫った時ーー。
「ーーー!!?」
ーー遺跡を大きな衝撃が襲った。

【砲王】

??◇

現在、トレジャーハントの戦局は大きく分けて三つに分かれている。

一つはシフォンが放った〈マスター〉の大群と、それに対抗する別の参加者達。

スタート地点の激闘を経た屈指の〈マスター〉達は、シフォンの放った狂化軍団と戦っている。

だが、広域殲滅を仕掛けられた地点での激闘を制した〈マスター〉でも、モンスターがいないという異常に気づく者はほとんどいなかった。

二つ目はリーナとシフォンの戦い。

シフォンが優勢のまま進められており、取り込んだ〈マスター〉を呼び寄せてリーナに差し向け、リーナを防戦一方に追い込んでいる。

そして三つ目が今大会屈指の名カード。

会場中の人々が固唾を飲んで見守る一戦。

砲撃手系統超級職【砲王（キング・オブ・カノン）】フィナラＶＳ武者系統派生装武者系統上級職【鎧武者（アームド・サムライ）】デュアル。

二人の戦いが、今まさに行われようとしていた。

??◇レファノンダム地下遺跡　大広間

その二人は、一際大きな広間で向かい合っていた。

他の崩れかけた場所よりも保存状態がよく、多少は暴れまわっても問題なさそうなくらいには広い大広間。

その中で、まるで果し合いでもするかのように向かい合っている。

その静寂を妨げるものはなく、戦端の口火を切るなにかもない。

戦いの火蓋を切るのは、他でもないその二人自身。

子供の日に飾られるような物騒な見た目の鎧兜が、ヒラヒラしたレースを身に纏う少女と対峙する。

鎧が三メートルを超える大鎧ということもあり、下手をすれば不審

者と襲われる少女の構図だが、実際の力関係はその逆だ。
グランバロア決闘、討伐ランキング中位、【砲王】フィナラ。
元天地決闘ランキング下位、【鎧武者】デュアル。
遺跡中に散ったシフォンの狂化軍団を難なく打ち倒し、切り伏せた怪物達がここにいる。
遺跡内の至るところで起こっている衝突と違い、二人の邂逅は静かだった。
フィナラは己の〈エンブリオ〉も展開せず、何かを探るように。
デュアルは、これから始まるであろう果し合いに今か今かと待ちわびた表情をしている。
「…」
デュアルにも、フィナラにも、言葉はない。
デュアルは決闘が始まる前のこの静寂が一番楽しいとばかりに今の全てを味わい尽くさんと立っている。
それに対し、フィナラも無言。
先日、桜やウェグニと話したときはもっと饒舌に喋っていたのであちらが素であるのなら今のこちらは普段と違うということになるが、【砲王】の普段を知らないデュアルにその差異は見出せない。
だが、突如としてフィナラの背後に無数のゲートが展開した。
様子を見に回っていた【砲王】フィナラの攻撃態勢。
遂に始まる戦いにデュアルの瞳が子供のように輝き、それに呼応するように一斉にゲートも光を放つ。
それこそは【砲王】フィナラの〈エンブリオ〉、ＴＹＰＥ・ウールドフォートレス【流星砲雨　ミーティア】。
能力特性は砲弾の作成と砲門の自在配置。
宙に浮かぶ光のゲートはその全てが弾薬庫とリンクされ砲門であり――
「《流星砲撃（メテオ・レイン）》」
今まさにデュアルを撃ち抜かんとするもの。
幾多もの砲門から放たれた砲撃が、逃げることすら許さずデュアルに直撃する。

音速に数倍する砲撃は避けることを許さずその運動エネルギーをそのまま着弾地点へと伝えている。
そして耐えることもできはしない。
そも、砲撃とは亜竜や純竜が蔓延る環境の中で人類が手にした下級職でも戦いのステージへ上がるための武器。
一発一発の威力は上級職の奥義に匹敵し、それを間断なく撃ち続けることができる。
サイズの関係で持ち運ぶことが難しいと言う欠点があり、正式に兵器として運用しているのはグランバロアとドライフくらいのものだが、フィナラであればその制限もない。
たった一人で五十を超える砲門を人が行うより遥かに早い連射で打ち放てる。
上級職の奥義を超える砲火の連射。
更には、全ての砲撃が火薬式大砲運用特化超級職【砲王】スキルレベルＥＸの《砲撃》によって強化されている。
かつて襲来した純竜クラスの群れを壊滅させ、決闘や討伐ランキングでも順調に成績を上げ続けているグランバロアのランカー。
それが【砲王】フィナラという存在である。
徹甲弾、爆裂弾入り混じる砲撃がデュアルへと突き刺さる。
人間の身一つでは決して耐えきれない砲撃が流星群のように殺到し、破壊の嵐を巻き起こす。
自然発生ダンジョンとなる前は先々期文明の遺跡だったからこそギリギリ耐えてはいるが、通常の自然発生ダンジョンであれば崩落必至の大破壊。
「ハッハッハ。なかなか痛いでござるな」
しかし、そんな大破壊の中でフィナラは笑い声を聞いた。
【ミーティア】による砲撃を一時中断し、爆裂砲弾によって起こった粉塵が何処かへと流れていく。
そこにいたのは、傷はあれど破壊はされていない鎧兜。
おそらく内部にもほとんどダメージは通っていない。
その光景に、フィナラが目を見開く。

グランバロアの海洋に於いて、幾多もの純竜級クラスを相手にしてきたフィナラだが、この連射が直撃して耐えうるものなどそうはいなかった。
（防御スキルの重ね合わせ？それにしても違和感がある。ですわね…）
通常、防御スキルには防御力の数倍化の代わりにある程度の使用条件がある。
防御力を五倍化する代わりに身動きの取れなくなる《アストロ・ガード》や地に伏していないと使えない《五体投地結界》などがそうだ。
だが、デュアルは先ほどそのようなモーションは取っていない。
防御スキルによる防御体制も取らずに耐えれるほど【ミーティア】の連撃は甘くない。
それこそ、物理防御に特化した〈エンブリオ〉のバリアすら、打ち破るだけの火力を備えている。
（〈エンブリオ〉だけでなくジョブも防御系だったんです。かしら？【鎧武士】はその名前に反して防御系ではなく万能寄りのステータス配分だったはずですが、サブジョブに何か仕掛けが？どちらにしろ、防御一辺倒であればこのまま攻撃していればいずれは限界が見えてくると思うのですが）
【ミーティア】の能力特性の一つは砲弾の作成。
ある程度は外部コストが必要だがローコストでかなり性能のいい砲弾を作ることができる。
そして、攻撃手段が砲撃しかないフィナラはそれを大量に保持している。
やろうと思えば攻撃の手を緩めず長期戦に持ち込むこともできる。
超級職のフィナラと一介の上級職に過ぎないデュアル。
長期戦になれば先に息切れするのは間違いなくデュアルだ。
「…」
次はその正体を確かめようと、展開したゲートの一つから、一発だけ徹甲弾を打ち放つ。

爆発による粉塵もなく、耐久型の上級職が防御態勢を取っていても少なくないダメージを与えるであろうこの砲弾ならば、デュアルに攻撃した結果の行く末も見ることができる。
放たれた砲弾は音速の数倍の速度でデュアルに迫りーー
「ハハハハハ」
ヒラリ、とデュアルがそれを避けた。
今度こそ、フィナラの目が驚愕で見開かれた。
音速の数倍で接近する砲弾は、ＡＧＩ型の超級職でもそう簡単に躱せる代物ではない。
ましてやデュアルは上級職であり、しかもジョブの上級職の一つはそこまでステータスの伸びがな【鎧武者】で埋まっている。
もう片側がＡＧＩ型の上級職であっても、この砲弾を躱せるはずがない。
展開している砲門から再び矢次早に砲弾を輩出するフィナラだが、デュアルはそれを難なく避けている。
たまにある避けきれない砲撃も、まともに受けた上で耐え凌いでいる。
純竜級を容易く屠る砲弾を素受けし、回避するほどのＡＧＩとＥＮＤ。
どれだけ放とうと、捕えようと、倒すまでの道筋が見えない。
あまりにも不可解…異常な行動に寒気を覚えるフィナラ。
だが、相手に対する意識を切り替え、格下相手の蹂躙から純粋な戦闘用に頭が切り替わる。

（【鎧武士】は武装強化系のスキルを持った装武者系統の上級職。単にステータスが高いというのなら装備品が強化されたことによってステータス補正も強化された？けれど、それだけであの砲火をしのげる程のＥＮＤとＡＧＩを？確実にジョブだけでなく〈エンブリオ〉も使っていますのでしょうが、それでもあまりにも強すぎる。どちらにしろ、〈エンブリオ〉にこれ以上の隠し玉はないでしょうが…）
〈エンブリオ〉で最も恐ろしいのは初見殺し。

単純な強化型ならそこまでの隠し玉はないだろう。
だが、初見殺しはなくとも十分脅威となるだけのステータスがデュアルにはある。
段々と、避けるのに慣れてきたのかデュアルの被弾回数は減りつつある。
完全にこちらの癖を読み切れば一気に畳みかけてくるだろう。
その前に、何らかの手を打つ必要がある。
だが、フィナラは他の戦術を執ることはできない。
〈エンブリオ〉の特性上、発射した砲弾数や上級ボスモンスターの討伐を始めとした転職条件を満たし、〈マスター〉の中でも初期に超級職を手にしたフィナラは無数の砲撃による圧殺という戦術しか持ちえない。
もちろん、普通ならそれで十分なのだ。
【砲王】によって強化された砲撃は射程も威力も非常に高い。
【ミーティア】は必殺スキルを持たないが、必殺スキルがなくとも伝説級の〈ＵＢＭ〉くらいなら圧殺できるだけの力がフィナラにはある。

問題はその砲弾が効かない相手が現れたとき。
単一の手段しか持ちえないフィナラにはそれに抗しえない。
単機能特化型の欠点ともいえる性質。
それはフィナラの扱う砲弾が火薬式に限定されているのも一因だろう。
魔力式であれば持ちえるレパートリーを火薬式大砲特化超級職である【砲王】では持ちえない。
厳密に言えばもう一手、強力な切り札がフィナラには打てる手段があるが、そちらのスキルはクールタイムが長く、天敵でもないデュアルに使うわけにはいかない。
デュアルは強敵だが、スペックが匹敵しているだけの話。
砲撃自体が効かない相手ではなく、その切り札はもっと直接的に天敵の相手に切るべきだ。
だが、現実問題としてこのままで倒せる気配がないのなら何らかの

手を打つ必要はある。
スペックで押し切られようとし、攻撃手段も変えることのできない単機能特化型の取れる手段はただ一つ。
ーーより苛烈に、出力を上げるのみ。
「《十字砲架(クロス・ファイア)》」
発動されたのは、【砲王】の奥義。
その効果ーー一分間の砲撃の全性能十倍化。
単純な攻撃力に留まらない。
弾速や弾丸の強度、不随効果まで含めた全性能の十倍化。
言うまでもなく強力な奥義だが、本来ならそこまで脅威にはならない。
火薬式大砲は《自動装填》のスキルを加味しても一分間で打てるのはどれだけ慣れた者でも十発が限界だ。
相手が動き回る場合は照準を合わせるために更に時間をロスすることとなる。
おまけに火薬式大砲は魔力式大砲ほどオプションの性能に優れておらず、不随効果の十倍化はおまけのようなものだ。
結論として、ダメージ減算スキルを持ってる相手でもなければ一発の砲撃を十倍化するよりも十の砲撃で殴った方が楽だし早い。
だが、【ミーティア】はそれらのデメリットを全て踏み倒す。
一分間の間に間断なく大砲を打ち続けーー
〈エンブリオ〉のスキルにより徹甲や爆裂などのスキルを付与して作成した弾丸を放つことができーー
狙いをつける必要もない数の暴力で相手の回避する空間をなくすことができる。
避けようと、防御しようと、確実にデュアルを叩き潰しうるだけの砲撃群。
デュアルの周囲を３６０度覆うようにして【ミーティア】を展開したため回避もできず、切り払うことも不可能。
先程の攻撃で「痛い」と発言していたのなら奥義を使わない状態でもダメージは通っており、十倍化した今なら確実に叩き壊せる。

デュアルも発動された奥義の内容は分からずとも何らかの脅威をその砲門から感じたのか、アイテムボックスから装備しているどれとも違う質感を放つ刀を取り出す。

砲門が光を放ち、振るわれた刀がその刀身を怪しげに光らせようとしたそのとき。

――遺跡を大きな衝撃が襲った。

Ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ